

774. 2-W27ウ
1200501944837

774.2
N27



始



7742
W27
1

若月保治著

近世
初期
國劇の
研究

青磁社刊

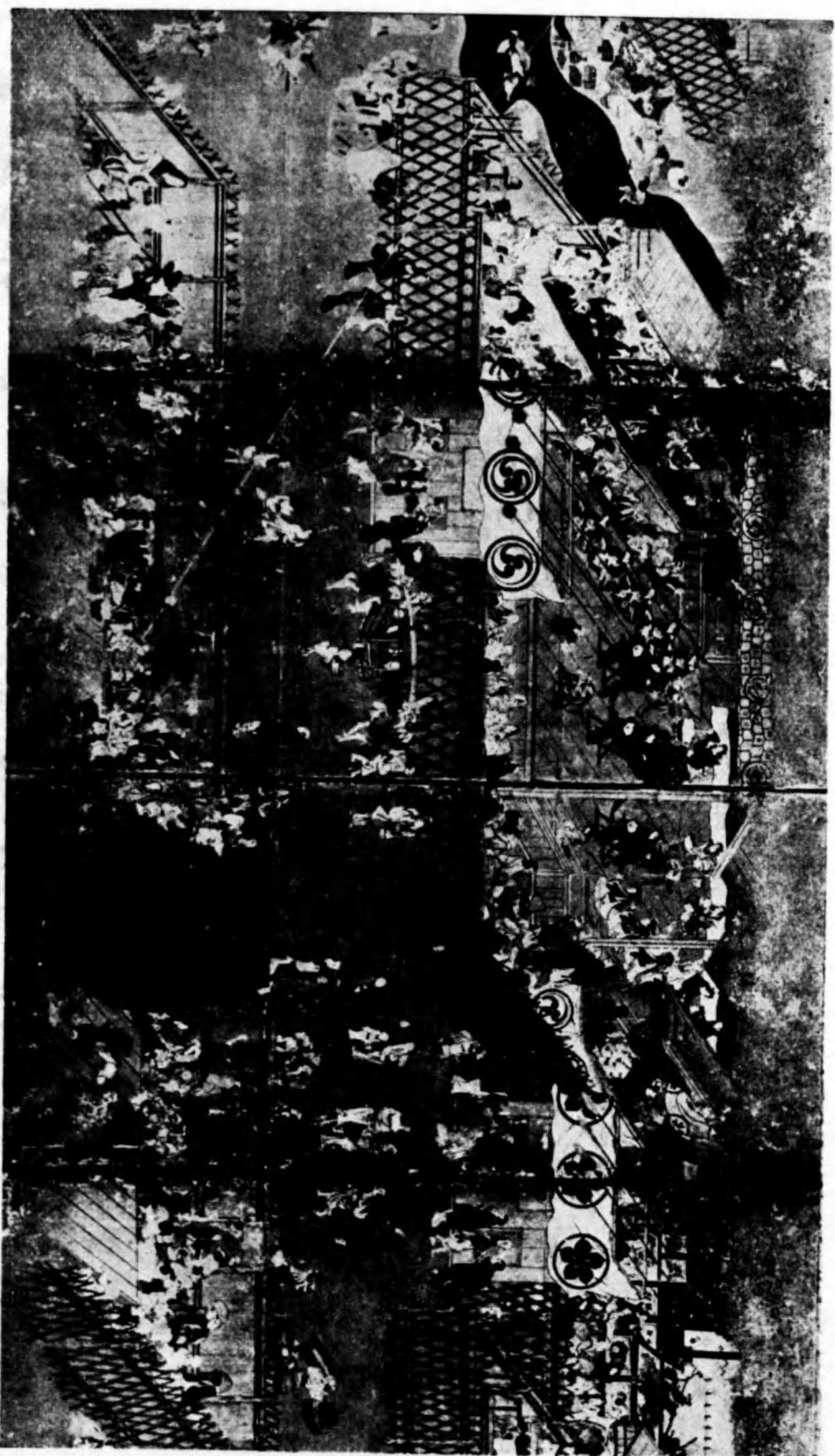


寛文十年庚午
 大和守日記
 一 此の好む
 一 此の好む
 一 此の好む
 一 此の好む
 一 此の好む
 一 此の好む
 一 此の好む
 一 此の好む
 一 此の好む
 一 此の好む

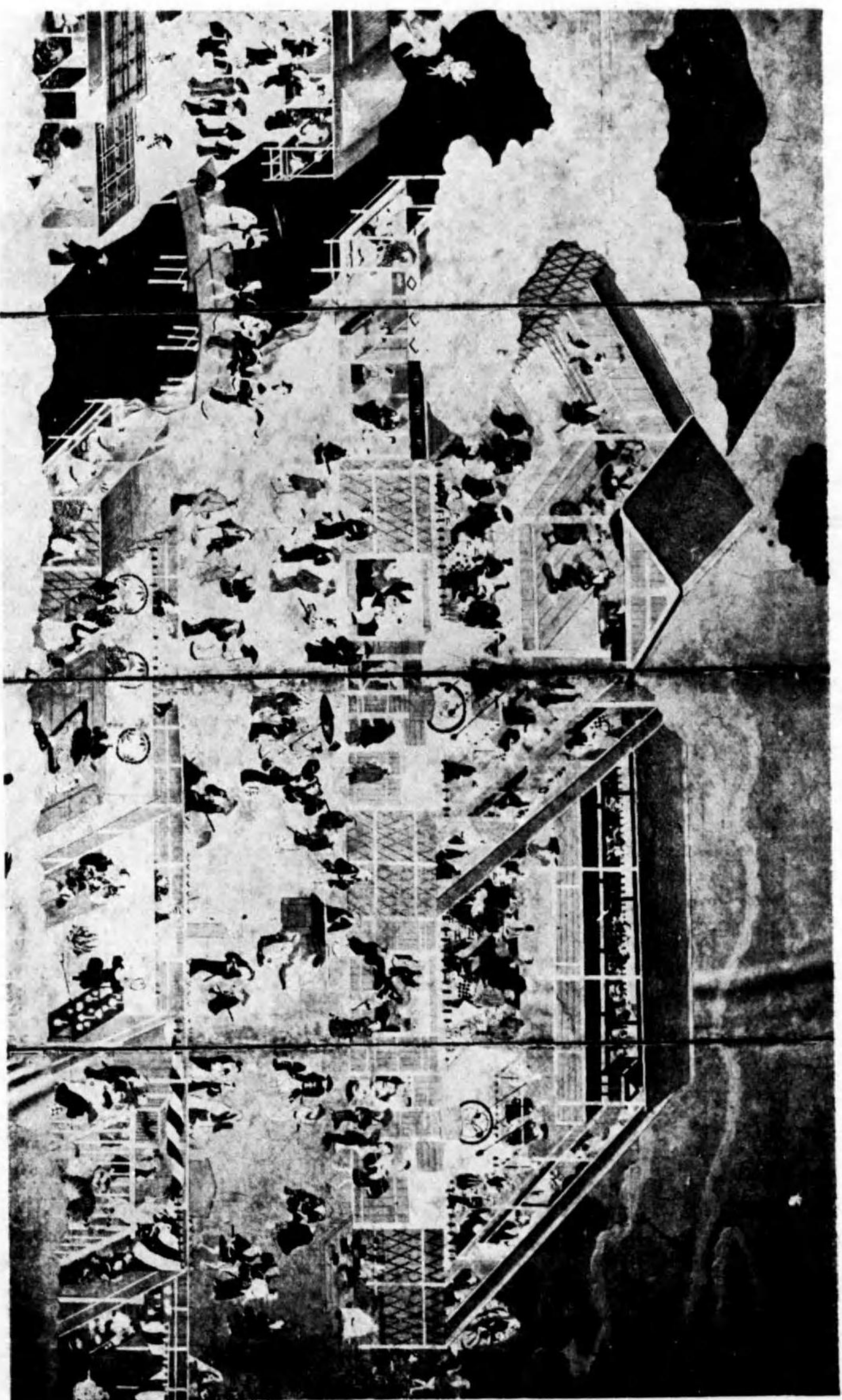
大和守日記 寛文十年正月の條

同
 大和守日記
 一 此の好む
 一 此の好む
 一 此の好む
 一 此の好む
 一 此の好む
 一 此の好む
 一 此の好む
 一 此の好む
 一 此の好む
 一 此の好む

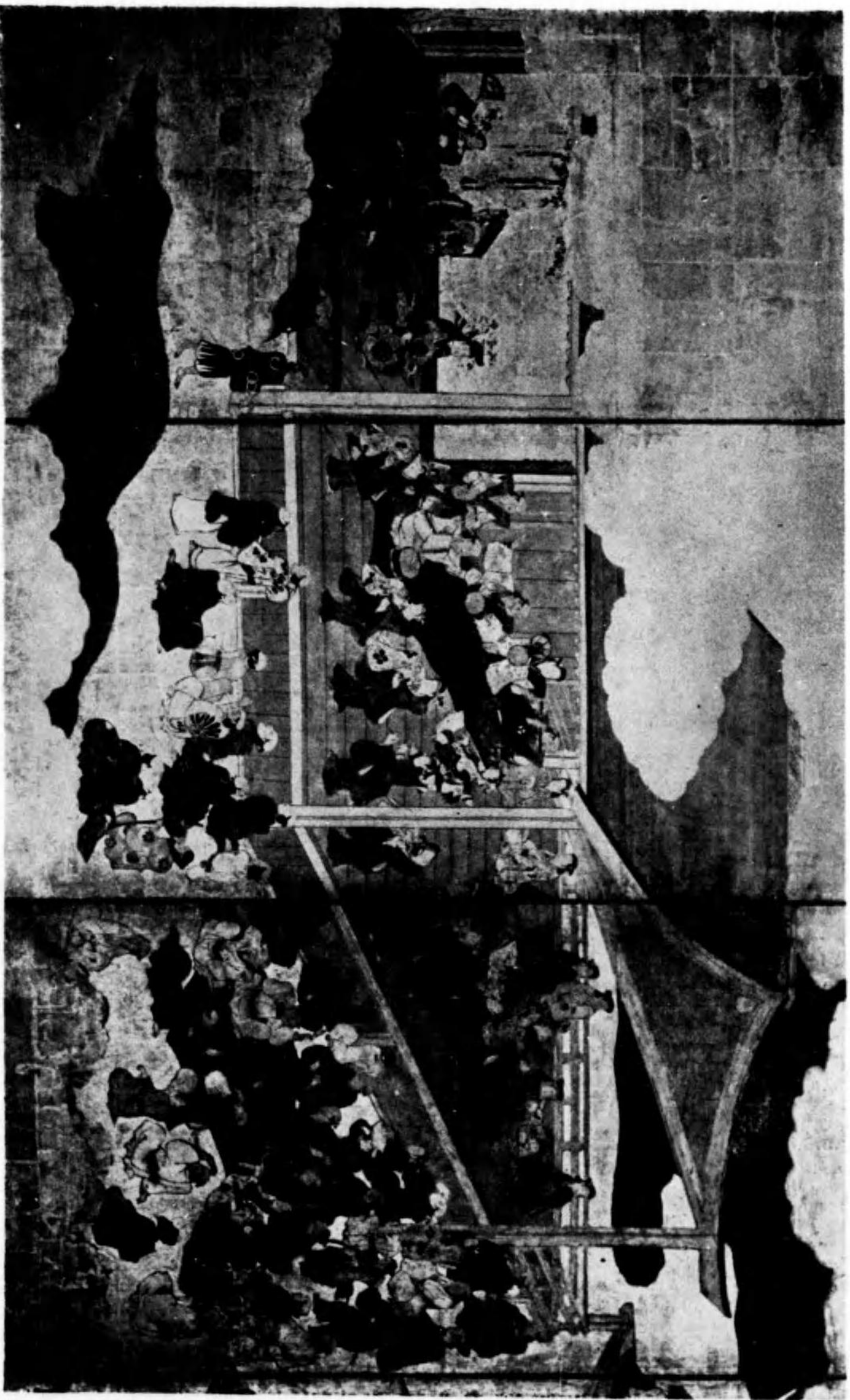
大和守日記 萬治三年五月十九日の條



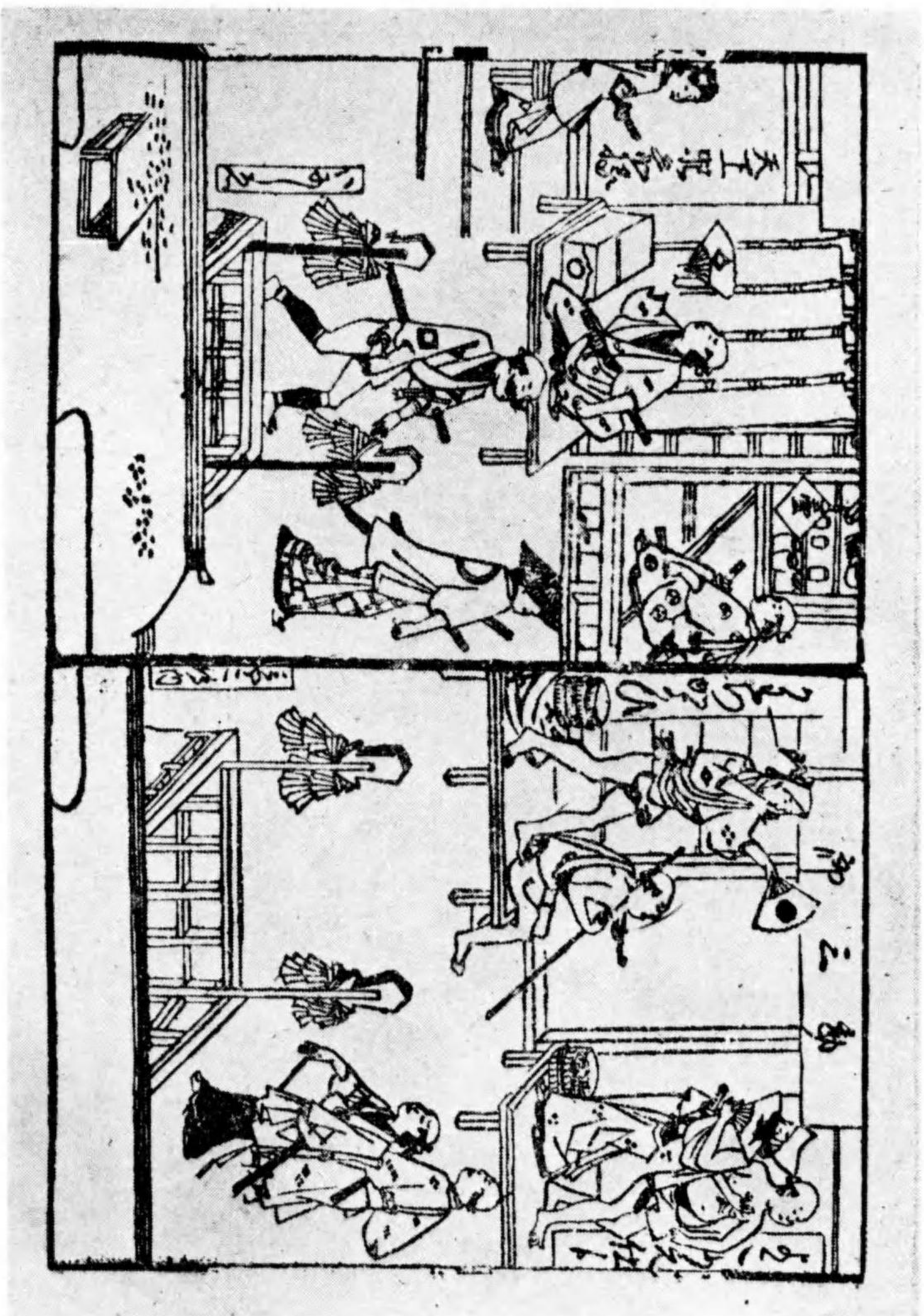
觀盛の原河條四京後前永寛 風屏藏館繪美ノトスホ



圖居芝伎舞歌女び及居芝操原河條四京 期永寛



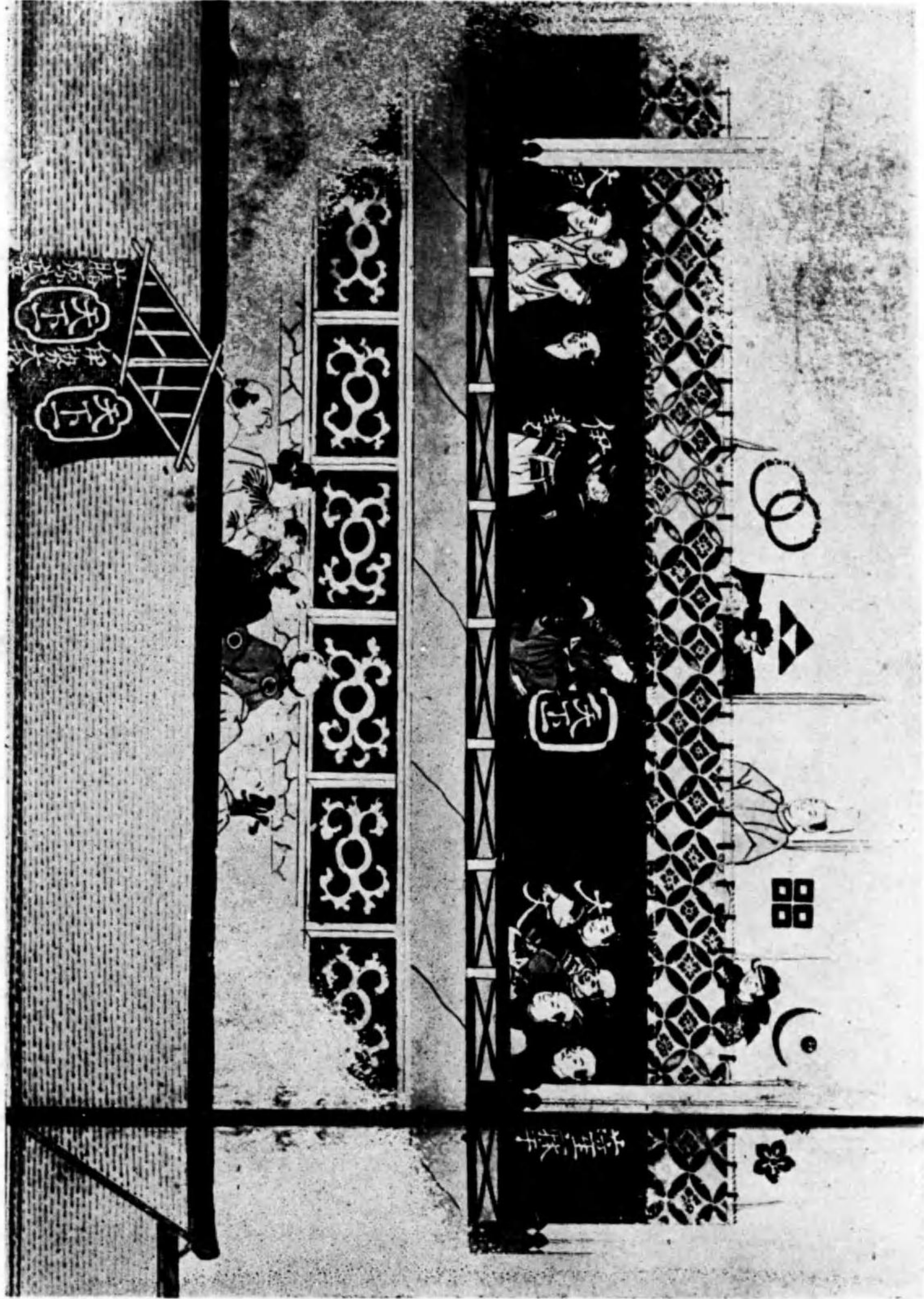
圖の伎舞歌衆若頃應承保正



(歌所如野制) 圖居芝操ひ及伎舞歌戸江 頃治萬



座内傳都(六)(照參圖別)座掾大勢伊(五)中演上「戰合大原野須那」「覽一



圖中演上(美捕生姫島江)「前御額板力勇大」座掾勢伊夫太摩薩戶江 頃年二寶延
部一の風屏藏館術美ソトスホ

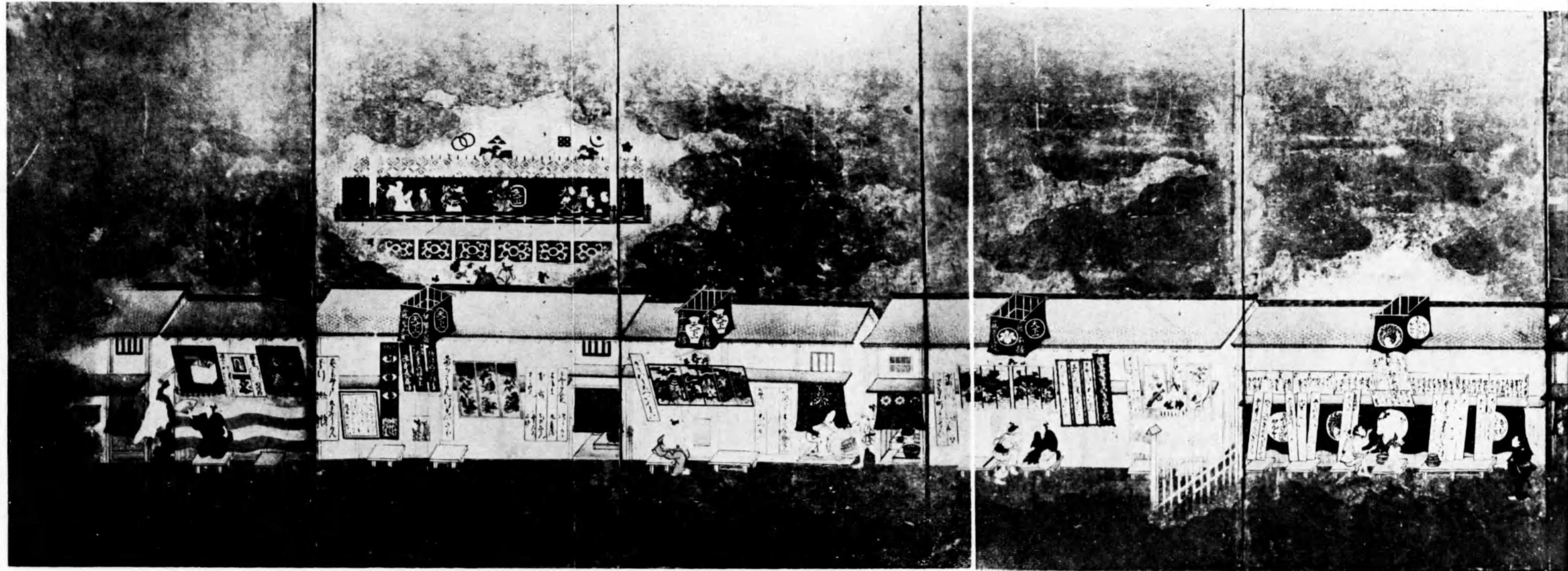


團中演上(妻捕生姫島江)「前御領板力勇大」座掾勢伊夫大摩薩戸江 頃年二寶延
部一の風屏藏館術美ントスホ



圖居芝町屋葺戸江頃年三・二寶延 風屏藏館術美ントスホ

座内傳都(六)(照參圖別)座掾大勢伊(五)中演上「戦合大原野須那」「覽一代王」「玉親のよい」座掾波丹(四)中演上「町小七」「記衰盛平源」座掾前肥(三)藝人八は隣左のそ 中演上「道白河二心一」「物語我曾」居芝郎三勘村中(二)屋子葉(一)らか右



ボストン美術館蔵屏風 延寶二・三年頃江戸葺屋町芝居圖

芝居町居「曾我物語」「一心二白道」上演中（三）肥前座「源平盛衰記」「七小町」上演中（四）丹波座「よい親王」「覽一代王」「那須野原合戦」「伊勢大座」（六）都傳内壺

1001
18

はしがき

近世國劇の初期といふのは、淨瑠璃や歌舞伎が、まだ十分な形態をそなへない、貞享、元祿の初頃までをさすのである。この頃までの國劇は、淨瑠璃に於ても、歌舞伎に於ても、資料が甚だ乏しく、殊に歌舞伎に於てさうである。従つて研究もまだ甚だ不十分な儘に置かれてゐるのである。

この期の資料として、近頃私が發見した、國寶的ともいふべき大和守日記と、これも古淨瑠璃の研究の際に私が見出した、十五段本の十二段草子や、その他の正本の蒐集とに、その研究を加へたのが本書である。

といつてもこの研究の部分は、實をいふと、まだ研究といふほどの研究ではなく、先づ簡単な紹介と思付の記述に過ぎない程度のものであり、殊に淨瑠璃正本の研究に於てさうである。最初の計畫では、もつと徹底的に研究するつもりであつたが、時局を考へると、あまりゆる／＼研究してゐたのでは、資料公刊の機すら逸して、世を益することも出来さうになつたので、せめては國寶的存在である大和守日記の萬一にも失はれることのない中に、兎も角も之を印刷に附して残しておきたくて、全速力で發表を急いだのである。

この貴重な國寶的資料さへ保存されてをれば、誰でもがいつでも研究を進めることが出来ると信じたからで

ある。この意味からいふと、この書はむしろ大和守日記の發表紹介書といつてもいいのである。これが今後の國劇研究の上に貢獻する所少なくないと思はれた爲である。

試に大和守日記を見ると、私達は初期の歌舞伎と淨瑠璃とが、題材上にも、上演上にも、如何に密接な關係をもつてゐて、両者が互ひにその發達を如何に助け合つてゐたかを知り得ると同時に、延寶元祿初年頃の狂言太夫が、また大抵淨瑠璃を語つてゐたことを知り、歌舞伎と能狂言とが、また如何に濃厚な關係に立つてゐたかも知像し得るのである。かくして元祿初年の江戸の芝居を見ると、淨瑠璃と歌舞伎との間に、題材上その他に於て、實に何程の著しい線を引き得るかを疑はしめるものがあるやうにすら思はれるのである。

更に又大和守日記を見ると、淨瑠璃の題材なり内容なりが、歌舞伎の上に如何に流用されたかを知る事が出来るのみならず、歌舞伎の發生期に於ては、あまりにも多くの能狂言が、歌舞伎に流用されたらしいことを推定することも出来るのである。また、謡曲と歌舞伎との間にも、頗る密接な關係があることを、教へられるのである。

次には俳優の盛衰や、その移動や、各座の關係なども知ることが出来、又當時の藝評なるものが如何なるもので、容色美本位の品定を出でないことをもあり／＼と見せつけられるのである。更に又、道化役者、よねま、のろま、茶平などの使用の意義等についても、教へられることが少くないのであつて、大和守日記が國劇の研究に關して、様々の鍵を與へてくれることは想像以上であるのである。

又淨瑠璃正本の珍稀なるもの數種は既に公にしたこともあるが、更に新に一層珍しいものをも數篇加へた

のであつて、就中、十二段草子の十五段本發見の如きは、その改作論に對して一大暗示を與へ、また利太夫正本の二種の發見の如きも、義太夫の出現期に關して爆彈を投ずるものであり、「八島」や「上り八島」「下り八島」の如きも、淨瑠璃研究上に種々の示唆を與へるものであらう。

かうして見ると、本書の資料の發見と發表と紹介とが、我が國獨得の藝術たる國劇の研究、殊に、初期暗黒時代の研究上に資する所、如何に大なるものがあるか知られるであらうと思ふ。

今大東亞戰爭滿二周年を迎へて、戰爭は益々苛烈ならんとするに當つて、これだけの發表の出来ることは、私にとつて誠に喜ばしいことであり、偏へに 皇恩の深くして厚きに感激措く所を知らぬ次第である。

終りに本書の資料探求發表に關して、種々の便宜を與へられた方々に對して、謹んで感謝の誠を捧げる一方に、本書及び「人形淨瑠璃三百年史」「人形淨瑠璃史研究」等に於ける、之等諸種の新資料の無斷轉載若しくは利用を謝絶すると同時に、資料の研究については、本書の外に、「古淨瑠璃の研究」、その他の拙著を十分に参照されんことを切望して筆を擱く。

昭和十八年十二月十二日

聖上陛下、皇太神宮御親拜の記念日

若 月 保 治 識

覺え書

- 一、大和守日記にも、誤字や當字は少なく、それ等の凡ては原文の儘にしておいたが、大和守の達筆の爲に、愚鈍の判讀し得ぬ文字が少くなかつたのは残念である。或ひは誤讀を生じたものも多少はあるべく、疑ひのある字には右側に點を打つておいた。
- 一、資料は日記中から必要な點だけを取入れ、不必要な點は已むなく省いた。
- 一、日記中一や、○や、句讀點やは、明晰を求める爲にわざと附加へた。それらの中、大きな○は大抵その下にあるものが淨瑠璃曲名であることを示し、△や、一、の記號は歌舞伎の狂言又は歌舞伎關係を示すものが多い。
- 一、文字の中、左衛門、右衛門には分明でないものもある。今、左衛門と明かに讀み得るものが、次の場所では右衛門としか讀めぬものがある。従つて多少の誤記があるかも知れぬ。
- 一、日記中、大和守の註もあれば、著者の註もあるが、著者の註は、特に(註)の字を附加して、その性質を明らかにしておいた。
- 一、淨瑠璃の正本にも、便宜上句讀點を加へたものもあるが、そこにはその旨をことわつておいた。
- 一、淨瑠璃の正本にも、疑はしい字や、不明な文字には、右側に點を打つたり、(マ、)と記したりしたものがある。その他は怪しい文でも原文の儘としておいた。

松平大和守略傳

大和守直矩公は、寛永十九年壬午十月越前大野城に生れた。父は結城秀康の五男直基にて、初め結城七郎と稱したが、寛永元年越前の勝山に、ついで十二年越前の大野に移封され、同二十一年山形に、慶安元年には姫路に移封、十五萬石を賜つた。慶安元年六月直基卒するや、直矩はその年十月、七歳にして襲封、同二年六月越後村上に移封され、承應三年甲午十二月從四位下に叙され大和守と稱した。寛文七年丁未六月十九日舊封姫路に移され、延寶九年辛酉六月族光長の事に連坐して、天和二年壬戌二月豊後の日田に移封され、八萬石を減じて七萬石を賜ふ。更に貞享三年丙寅七月には舊封山形に移され、ついで元祿五年には陸奥白河に移封され、十五萬石を賜ひ、やがて元祿八年乙亥四月十五日江戸溜池の邸に卒した。享年五十四。白川孝顯寺に葬る。公は極めて多趣味の人で、書道、香道、能樂、狂言、操、歌舞伎、繪畫、連句、狂歌、和歌、舞踊、相撲、狩獵等有ゆる方面に興味を有し、相當に古典にも通じ、書、香、繪、和歌等には可成り優れた技倆の持主であつたやうである。

なほ序に日記に關係ある事項について記しておく、永壽院といふのは母堀氏のこと、萬治三年六月卒。室は駒といひ、同姓出羽守直政の女にて、萬治三年四月結婚し、寛文三年正月卒。繼室は長と呼び、東園大納

言基賢の女にて、寛文十二年四月結婚し、延寶九年五月卒。

姫伊久は寛文九年五月姫路城に生れ、延寶三年七月毛利元千代と約婚し、姫佐手は實は養女にて京極甲斐守高任に嫁した。嗣子基知は延寶七年七月姫路に生れ、幼字を源次郎後久太郎と稱した。元祿八年六月襲封。日記中に屢々鳥越の語が出るのは、延寶八年三月出生の直姫の邸のことで、源之助といふのは延寶八年十月に生れた次男である。

松平家第十一世直克公は前橋に襲封し、明治二年藩籍を奉還して前橋藩知事に任じ、現主は松平家の十五世である。(凡て「松平家系譜」による)

目次

序 篇

- 一 國劇史上國寶的資料の發見……………三
- 國劇の準備時代——明暦寛文の暗黒時代——國劇史上の一大發見
- 二 松平大和守日記の國寶的價值……………五
- 國寶的存在の意義——都鄙の歌舞演劇史——初期國劇再檢討の必要
- 三 新發見の淨瑠璃正本……………七
- 十五段本の發見——繪卷と短篇物——八島・梵天國・田村——利太夫の珍正本

第一篇 資料 篇

一 松平大和守日記……………三

二 上るりごぜん十二段さうし……………二八
本繪

三 繪卷「上瑠璃」……………二三

四 上るり御前十二段（江戸版十五段本）……………二五二

五 源氏十二段（？）（上方版十五段本）……………二六

六 淨瑠璃十二段（『平藝古雅志』所載）……………二九〇

七 寫本中篇十二段……………二九三

かしわ出……………三〇〇

みやこ廻り……………三〇〇

八 上るり十二段（八段本）……………三〇一

九 淨瑠璃姫（九段本）……………三〇九

一〇 源氏十二段（八段本）……………三一七

一一 源氏十二だん（肥前掾正本）……………三三六

一二 源氏十二段（土佐掾正本）……………三四六

一三 播摩節十二段……………三六七

一四 嘉太夫節十二段……………三七三

一五 八島（南無右衛門正本）……………三七八

一六 下り八島……………三八八

一七 のぼり八島（大八島—江戸土佐掾正本）……………四〇四

一八 梵天國……………四一三

一九 たむら（伊勢島宮内正本）……………四二五

二〇 空也上人御由來（清水利太夫正本）……………四四六

第二篇 研究篇

第一 歌舞伎篇

- 一 諸大名と初期の國劇……………四七五
將軍の操・狂言觀覽——諸大名の豪奢——大和守と演劇
- 二 大和守日記と歌舞伎上演物……………四七六
本格的の上演物——島原狂言から情味濃厚へ——狂言味と舞踊の要素
- 三 初期歌舞伎と謠曲及び能狂言……………四八八
初期から密接な關係——詞章上の關係——演出的關係——能狂言と歌舞伎狂言
——大和守日記の證據——歌舞伎と謠曲
- 四 大和守日記に見る舞踊……………四九三
躍踊の多種多様——最後の總踊の意義
- 五 初期歌舞伎と淨瑠璃……………四九六
珍らしき歌舞伎狂言——淨瑠璃と關係ある狂言——上演上の兩者の關係——
座敷あやつりの狂言——歌舞伎と操の交渉
- 六 大和守日記に發見する續狂言……………五〇〇

七

歌舞伎の隆盛と地方芝居……………五〇八
地方歌舞伎の隆盛——姫路に於ける五回——山形に於ける三回——地方芝居
の狀況——白河の女芝居

八

結語……………五二三
技藝本位の國劇の基礎を開く——能狂言謠曲淨瑠璃の吸收——歌舞伎の利用
と續物——地方民衆の娯樂と文化——他の種々なる資料——女形の發達

第二 淨瑠璃篇

- 一 萬治前の夥しき未知の正本……………五二七
驚くべき正本の數——刊年の明かとなる正本
- 二 大和守日記の淨瑠璃上演曲目……………五三〇
主要なる項目——知られてゐる曲目・珍らしい曲目——既に國性爺も上演
- 三 名太夫に關する新事實の發見……………五三四

名太夫の動靜——杉山丹後——薩摩淨雲——和泉太夫・肥前掾兄弟——土佐掾
虎之助——下り薩摩外記——虎屋源太夫——説經太夫

四 新太夫の發見とその活動……………五八

新太夫の發見——伊勢大掾——江戸筑後掾——豊前源之丞——虎屋永閑——美
聲の清五郎——小平太——その他の太夫

五 寛文前後の演劇上演の状況……………五九

淨瑠璃上演の模様——歌舞伎狂言の上演——早くから連節——機巧應用と賑か
な演出——舟操の贅澤——當座の狂言——座敷操の狂言——上演の時間——
舞臺背景装置——役者の數——役者の給料——役者の役の區別——役者の評判
——二種の未知評判記——淨瑠璃の意義

六 碁盤人形と江戸の人形の遣ひ方……………五九

延寶元祿頃の流行——操にも狂言にも遣ふ——劇場公演の場合——操狂言太夫
小山次郎三郎——式部太夫と江戸半太夫——碁盤人形の遣ひ方——江戸孫四郎
の三人遣——人形遣と太夫——人形遣と太夫別人の説明——屏風人形の意味

七 伊勢大掾座公演の實例……………五八

延寶初年の好實例——寫眞は延寶二三年頃——伊勢大掾座の公演——公演もお
座敷も同様——狂言の演出者は誰か

八 結 語……………五八

臺本本位の淨瑠璃——大規模の上演——寛文期淨瑠璃の發展——連節と七段曲
——正本の數と元祿時代——大和守日記の國劇史上の地位

第三 正本研究篇

一 十二段草子研究……………五九二

十二段正本の三大別——流布本長篇系——中篇十五段本系——奈良繪本十二段
——繪卷上瑠璃の構成——播磨と加賀の十二段——短篇八九段本系——中篇が
長短兩篇の鎖——段名比較表・内容比較表——語物としての十二段——作者と
改作説——第二類の存在價值——十二段草子の影響

二 六字南無右衛門の八島……………六〇五

八島の構成——下り八島との關係——のぼり八島との關係

三 梵天國とたむら……………六〇七

目次

序
篇

目次

一四

梵天國の面白味——宮内のたむら

四 清水利太夫正本……………六九

利太夫の殘存曲——延寶三年刊の類似曲——播磨の日本王代記——利太夫出現の年代——空也聖人御由來

一 國劇史上國實的資料の發見

國劇の準備時代

元祿期を江戸時代の國劇たる淨瑠璃及び歌舞伎の興隆開花の時代とすると、元祿初年に至るまでは、我國の近代國劇たる淨瑠璃歌舞伎の初期に屬し、未だ蕾の時代である。その中慶長初年より慶安承應に至る五六十年間は、淨瑠璃も、まして歌舞伎も、まだ體をなすに至らなかつた萌芽期ともいふべき時代である。

けれども明暦萬治から、寛文延寶天和貞享及び元祿初年にかけての三四十年間は、漸く國劇の前途に光明を約束されるに至つた時代である。淨瑠璃に於ても、既に可成りに澤山の新作が現れ、東西に色々有名な太夫が生れて、各々その得意の曲節を工夫し、現實味人生味の豊かならんとする延寶期の淨瑠璃が生み出され、戯曲味の多分な、元祿享保の新淨瑠璃の現るべき濫床整備の時代であつたのである。歌舞伎に於ては、寛永六年に禁ぜられた女芝居の後に、承應元年に至つて、若衆歌舞伎までが禁止されると、野郎歌舞伎の現出によつて、爰に始めて、國劇の一面たる眞の歌舞伎誕生の端緒が開かれ、演劇としての臺本の發生も約束され、俳優の技術も、容色本位から技藝本位に轉換を生じ、ある意味に於ては、國劇としての歌舞伎が全然方向をかへて、その進みを新にすべき準備時代となつたのである。

明暦寛文の暗黒時代 それにしても、明暦から元禄初年に至る三十四年の中、殊に明暦寛文の二十年間は、眞に國劇萌芽の時代であつたので、未だ文學的には興隆を見るまでには至らず、操淨瑠璃としても見るに足る臺本は少く、殊に歌舞伎の脚本として傳へられたもの殆どなく、またこれまで國劇としての、淨瑠璃芝居及び歌舞伎芝居の發展の徑路を知るに足る資料誠に乏しく、狂言の種類、名目、番組、操や狂言の上演の模様等についても、殆ど知る由なく、國劇の培養時代準備時代といひながら、その實、演劇史的には全く暗黒時代であり、未開拓の時代であつたのである。

淨瑠璃の方面に於ては、曩に私が古淨瑠璃の正本を詳細に讀破研究し、『古淨瑠璃新研究』三卷四千五百頁を刊行して、未墾地に多少の鉄を入れはしたが、歌舞伎の方面に於ては役者評判記などの存在によつて、多少研究が進められてゐる以外に、如何なる狂言が、如何に上演されたかもよくは分らなかつたやうである。

國劇史上の一大發見 ところが古淨瑠璃研究の途次、極めて幸運なる發見によつて、松平大和守日記を涉獵して見ると、この日記の中には、我が國劇史上、全く暗黒時代とされてゐた、明暦から元禄にかけての我が國劇について、色々記されてゐることが極めて多量にして、これまで殆ど知らなかつた國劇初期の、基礎時代準備時代が、その實吾々の想像以上に花々しいものであり、隆昌なものであつたことを知り得ると同時に、次の延寶元禄の時代が、既に此時代に準備され、近松の淨瑠璃乃至元禄歌舞伎、引いては寶曆以後の淨瑠璃や歌舞伎の完成が、此時代に培はれつゝあつたことをも知ることが出来るのである。この意味に於て、國劇史資料としての大和守日記は、全く貴重なる國寶的存在ともいふべく、之が發見發掘は、私の一代に於ける無上の歡喜でもあり、大發見といつても

よからうと思ふ。否之は決して私の歡喜自負ではなくして、我が國劇史上に於ける大歡喜であり、之が演劇史上にもたらす光明の如何に大なるものであるかは、私がこの新資料を故伊原青々園氏に見せた際の氏の絶叫の、あまりにも大きかつたこと、氏が病床にあつて、最後までその寫本を手から離されなかつたといふ事實によつても、大體に察することが出来るであらう。

二 松平大和守日記の國寶的價值

國寶的存在の意義 それでは大和守日記の國劇史上に於ける價值といふのは、具體的にいへば如何なることであるか、何が故に大和守日記が國寶的存在價值を主張し得るかといふと、この日記は、明暦四年四月から始まつて、元禄八年四月十五日、大和守の卒去二週前の三月二十七日まで、大凡三十八年間に亘る極めて詳細なる覺書の中、其間に於ける操淨瑠璃芝居、歌舞伎芝居等に關する記述が、頗る綿密を極めて、この間に於ける資料の貧弱極りなき國劇史に對して、最も信すべき、無二の研究資料の莫大なる量を提供するからである。普通には、研究資料といつても、多くは二三の事實を提供するか、數個の證據を見出すに過ぎないのが大抵であるが、大和守日記に於ては、三十八年間、殆ど年々毎月といつてもいゝ位に、家臣や小姓などをして、江戸の境町や木挽町の操や狂言芝居、その他の色々の見世物などを、慰勞の爲に見物せしめるとか、或は自邸に招聘して演出させるとか、又は家門の間に上演されるとか、さうした種々の場合に於ける芝居關係の有ゆる事を記述し、若しくは他の諸大名に招請さ

れた場合の見聞の一切や、必ずしも自ら見ずとも他人の見聞した話までも記述するといふほどの、熱心のこもつたものであつたので、記述の回数も可成り多く、又その量も頗る豊富なるものである。

都鄙の歌舞演劇史 勿論かうした日記は、大抵の場合、極めて形式的な、無味乾燥なものに陥るのが普通であるが、大和守は演劇に對しても、舞踊に對しても、非常に深い趣味の持主であつたと見え、參觀交代で在京の折は勿論のこと、姫路や、越後の村上や、山形や白河などの領地にあつた間でも、江戸の留守邸に於ける模様を報告せしめて之を記述し、又は之等の地方に在る間に於ても、その地／＼の狂言や操や舞踊などについても、家臣をして取調べさせたり、自ら見聞したりして、詳に之を記述するといふ風であつたので、特殊の事情なき限り、演劇關係の事が最も多く記述されてゐて、此期間に於ける大體の演劇の趣を知ることが出来るのである。勿論最初の頃は、その記述がそれほど詳細なものではなかつたが、寛文の初頃からは、殊に記述が詳細により、番組は勿論、之を演じた大夫や、役者や、其役名や、更に劇場附屬の全役者の名や、平生から差別しておくべきことを命ぜられて、それぞれの役者が受持つてゐる役柄や、種々の音楽の受持の人々の名から、場合によつては、それらの人々の内職の名目に至るまでが一々記されてゐて、常人ならば、半年や一年で中止しうなことが、三十八年といふ長期に亘つて、一日も缺かさず熱心と興味を以て記されてゐるのである。

初期國劇再検討の必要

大和守日記は、それ等の外に演劇に關する事は、噂でも聞書でも大抵記されてゐるのは勿論、種々の劇場に於ける折々の役者の異動や、見世物、流行歌、小歌、節、説經芝居、子供芝居、機巧芝居、能、淨瑠璃の正本、野郎に關する草子、女舞、舞、籠拔芝居等、歌舞遊戯に關する見聞の残らずが記述されてゐる

ので、一種の風俗史でもあると同時に、演劇史でもあるのである。

従つて之が國劇史研究上の色々な貴重な資料となつて、國劇の暗黒時代に貢獻する所計るべくもなく、自然大和守の國劇史に於ける功績も亦輕視すべからざるものであり、蓋し之によつて、我が國劇の初期に於ける研究は改めて再検討さるべきであらうと思はれるのである。

されば今こゝに、出来るだけ原本の體裁の儘に、大和守日記中より、淨瑠璃及び歌舞伎に關する貴重な全資料を抜出して掲載し、新資料として、惜しみなく學界に提供することにしたいと思ふのである。

三 新發見の淨瑠璃正本

十五段の發見

古淨瑠璃の研究に際して、私が新に發見した正本中には、これまでその存在も知られなかつたものが可成り澤山あるが、十五段本十二段草子の江戸版並に上方版の如きは、最も珍稀なるものである。由來十二段草子は猶現存淨瑠璃の最初であるらしく想像され、而もいつまでも後代の淨瑠璃の上に大きな影響を及ぼすつゝも、種々なる異本が發見されて、如何なる變遷を遂げ來つたか明かでないのであるが、十五段本の發見は、この謎を解く上に、最も大切な役をなすものであると思はれるのである。

繪卷と短篇物

長篇流布本十二段草子と、中篇十五段本との外に、十二段草子の短篇物が數種あることも、多少は知られてゐるが、その短篇の異本の數種と共に、中篇十五段本と密接な關係に立つものは、繪卷の「上瑠璃」

である。これは岩佐又兵衛の筆に成るものと推定されてをり、十二巻より成る絢爛目を奪ふ如き豪華なものであるが、その詞章はこれまで翻刻されたことはないやうである。その他寫本中篇十二段といひ、今まで知られてゐなかつた肥前掾の正本『源氏十二段』といひ、土佐掾正本『源氏十二段』と比較して、薩摩系の淨瑠璃と杉山系の淨瑠璃との系統曲風を研究するには、最も必要なものである。

八島梵天國田村 女太夫六字南無右衛門の唯一の正本として傳へられる『八島』の一篇は、江戸時代の學者をして惱ましめたものであり、柳亭種彦の如きすらが、飛んだ誤をしたものであるが、これまで、その正本も寫本も存在を傳へられる所がなかつた。所が圖らずも私が發見したのが、種彦本の寫本である。之と密接な關係に立つものは『下り八島』『上り八島』である。之等は近松物といはれる『門出八島』『凱陣八島』との間にも、甚だ深い關係をもつものである。

『梵天國』は説經から淨瑠璃に入つたものであるが、その古版も極めて珍らしく、私の見たのは寫本として可成り古いものであり、伊勢島宮内の正本『たむら』も亦私が新に發見したもので、これまでその名も知られなかつたものである。

利太夫の二正本 竹本義太夫の前身である清水利(又ハ理)太夫の正本たる『神武天皇』と『空也聖人御由來』とは、初期の義太夫を知る上に於ても、又その珍稀なる點に於ても極めて重要なものである。殊に『神武天皇』には、延寶五年版前、異本と思はれる延寶三年版がある。もしその三年版が眞に利太夫の正本であるとすると、義太夫の出現は嘉太夫の前でありさうな、面白いことになつて來るのである。

之等の淨瑠璃正本は、皆初期淨瑠璃の研究資料として珍稀中の珍稀であり淨瑠璃史上最も重きをなすものであつて、大和守日記と共に、國劇の研究に於ては忘るべからざるものである。

第一篇 資料篇

松平大和守日記

一、明暦四年四月一日 靈台院殿(註、大和守の母堂) 内藤攝州(註、大和守の妹、實は本多内藤助の女、攝津守の妻たり) へ御出、同晩御馳走のため、まいが御座候由、太夫はかつがしそん三かつと申候由也

一、同 四月七日 出羽殿(註、松江藩祖松平直政、大和守の伯父、その女は大和守の室) にて、丹後あやつり見物申候

○上るり 歌 枕

初段 狂言 さまり すげかさおとり 二段 二世のちぎり 三段 かはちかよひ

四段 もんたいき うきよひやうし(ぬめりひやうしとも申) 五段 まんさい 六段

註 歌枕「淋敷座戀」に道行がある。

○上るり もろと き

初段 狂言 松風村雨 二段 何れもしよもふにて うき世ひやうしの手引 三段 同 うきよひやうしの手引

第一篇 資料 篇

第一篇 資料篇

一四

四段 何もしよもふにて

五段 れいぜんふし

六段

祝言

右何もでかし申候、歌枕の内、上二段丹後二男七郎兵衛かたり申候

一、同十六日 酒井町へ見物にやる、見申候 覺

見せ物にては、一、くじやく 一、一寸ぼうし 一、いんこうたうたい 一、鸚鵡 一、れんとび

一、島原、一番に左近所にて二番、二にみやこ傳内所にて二番、三に日向太夫所にて二番見物申候

一、明曆四年四月十七日 酒井町へ見物に遣申候

覺

一、熊 一、ふたなり 一、小うたうたいいんこ 一、くじやく 一、一寸ぼうし

一、けちしまばら 二所にて一番つゝ見申候由。本島原にて、一番めに左近所にて二番、二番めに都傳内所にて二番、三番日向太夫所にて四番見申候由

一番 るいの助、二番 かもん 三番 權八

右三人よき子共にて候由

註 日向太夫といふは、後に松田の姓であることが知られるが、『晝證録』には、「竹田といふからくり師高名なれば松田といへる放下師出づ……」と記す所によると、曲藝などに長じてゐたと見える。

一、同晩 下り源之丞、しやみせんひきかつま又左衛門參申候

上るり いけどりすゞき より たかたち まで 六段 かたり申候。其あいに又左衛門どうけ申候

一、同十八日 酒井町へ遣申候、見申候分前の如し

一、同二十日 酒田李之丞日向太夫よび見せ申すべくと申候

一、明曆四年四月二十二日 日向太夫を酒田李之丞よびよせ見せ申候 番付

一、とん三郎 ほうか ばさみ箱

一、わか衆道心 ほうか 花見とこ

一、ふせうつま ほうか 門

一、わか衆ろん 以上

一、かうし島原 ほうか そろばん

一、いせ島原

若女房 るいの助(山本)

勘左衛門

權 八

七左衛門

左 の 近(今井)

一 善左衛門

と の も

女かたか、 二 人

吉 十 郎

ふへふき一人

かふろ 三 人

たいこ一人

かいて 三郎左衛門

しやみせん二三人

五郎兵衛(奥村)

つゝみ打二三人

武兵衛(小泉)

名しらす 二 三 人

左兵衛

名しらす 二 三 人

第一篇 資料篇

一五

一、明曆四年五月十六日 内藤攝津守殿へ靈臺院殿も御出、我等も行、嶋原狂言御座候。相模と申者參候

註 伊原青々園氏考によれば『女若論七番歌合』にさがみといふ女かぶきありしこと見え、そして、後に萬能丸五郎兵衛が相模と合同せし事記しあり、同人か異人か

きやうげん

ほ う か

下、ほうか

グメン中一、きやうげん

上、きやうげん

中一、ほうか

グメン中一、きやうげん

同中一、かんたんゆめのとこ

上、ほうか

グメン中一、きやうげん

グメン中一、きやうげん

一、ほうか

グメン中一、きやうげん

下、ほうか

中一、きやうげん

グメン中一、きやうげん

下、ほうか

何もへた故ふできに御座候

一、明暦四年五月二十八日 晩、日向太夫よび、ほうかさする。

覺

一、玉子のほうか △かきうりの狂言 一、門のほうか 一、さけちうのほうか △さか木の狂言 一、花

見のとこ ほうか △河原市きやうげん 一、はさみ箱 ほうか △狂言一番名しらす 一、玉火 ほうか

△かさの下狂言 一、そろばんのほうか △しばかき

所望にて玉子のほうか見申候間に、しやくせんこひの狂言、

一、玉子のほうか 門のほうかはふでき也

一、同六月二十七日 二十七日より、島原御はつとになるよし。

一、明暦四年七月十一日 いきみ玉、并、御暇の祝儀ながらに、上屋敷にて、靈臺院殿、永壽院殿、おゑん殿、

攝州五郎殿ふるまう、あやつり申付、太夫は源之丞來。

○上るり まつらかつせん

女わた(か?) きやうげん

初

後

れいせうく

とほるしほくみ

おたき

しばかき

かはちかよひ

小うた

ぼんてんこく

うはなり

すみた川

水あびせ

かか川

れいこふし(?)

かか川

大かから

一、萬治二年七月二十三日 晩、羽前殿へ行、狂言見物

一、祝言 みつきもの

三左衛門
七左衛門
三郎右衛門

一、川原市

シテ
源左衛門
九郎三郎

一、かさの下

名しらす
十二斗ノ子

一、つんぼうざとう 七左衛門 三郎右衛門

一、ちねんこじ

シテ 源左衛門 九郎三郎 長左衛門

源左衛門 おい

竹松

一、くまの物語 源左衛門 おい 竹松

一、羽衣

源左衛門 三郎 長左衛門

後、源左衛門座敷へ一人出、うちわにてまふ、女しやうそく。

後、出羽殿小ぼうす三人出、しはかきを打、しやみせん二丁つゝみにて。

一、萬治二年九月十四日 今度御普請首尾能しまひ申候、祝ながらあやつり呼ぶ(註、原本に太夫名はないが、出し物を見ると杉山丹後かと思はる)

あやつり番付

○上るり ごすいでん

一段 狂言 萬歳 夜るのさなへ

二段 狂言 一夜けんきやう あふみおとり

三段 梅かつま 小うた きよくたいもく

四段 若衆だんぎ きやうがのこおどり

五段 かねまき あく太郎

六段

○後のちこひ

初段 おきなはらんべ かそへうた

二段 二世のちきり

三段 どん太郎

四段 かはちがよひ

五段 むきつき ぬめりひやうし たゝき

六段 うはなり れいせいふし

七段 祝言

一、萬治二年十月十六日 靈臺院殿お延殿……來、今日口切ながら料理進上いたし候、晚 狂言組

一、栗木 二郎兵衛 八左衛門 清兵衛

一、河原市 源左衛門

一、鳥さし 竹松、三左衛門

一、唐人 又左衛門 半右衛門

一、さふ風 二郎兵衛 三左衛門

一、羽衣 源左衛門 七左衛門 三左衛門 次郎兵衛

一、長光 清兵衛 八左衛門 半右衛門

一、ばゝのまね 又左衛門

一、ちねんこじ 源左衛門 竹 三左衛門 七左衛門

其後源左衛門うちわまい せなに子をおい 七つになる子 亥の下一刻にお歸り。

一、萬治二年十月二十一日 本多内藏助殿へ靈臺院殿御出に付、我等もおしかけ行、あやつり有。下りさつま外記、上るりかたりて權太夫

番組

○ 佐々木もんどう

きやうげん 初段 おとめのまい せうくおとり

二段 おぐり さんやめぐり

三段 道成寺

第一篇 資料 備

一九

四段 ××やま狂言

五段 よしのござ
しやみせん、かぞへうた

六段

○ 爲朝官領諍

初段 じねんこじ
大かぐら
神樂おどり

二段 小町
ひだのたくみ
りうきうおどり

三段 初花島原
長崎ひやうし
つしましんがく

四段 うらみつま
あきのおどり
大坂おとり

五段 しうろん
うただいまく
鬼島原
能あそび

六段 祝言

一、萬治二年十一月七日

永壽院殿をふるまう、御普請かれこれの祝也。晩御見物もの申付ル

番組

一、たゝむこ

入せこ 類之助 彌八父 次郎右衛門 同母 善左衛門 キモ入 武兵衛
キモイリ 吉兵衛 徳家 二郎兵衛 ヨメ内 匠 おとり有

一、六條かよい

武兵衛 女善左衛門 武兵衛代り 利右衛門
三郎右衛門 女二郎兵衛 ニサセンス 子共出おとり
吉兵衛 女惣兵衛

一、ものまね かけゆ 源左衛門
吉兵衛

一、吉原まなび

とん三郎 利右衛門 同らは 善左衛門 とん三郎 武兵衛 同三郎右衛門
あとあけやのかまね つかひもの 後かひて

とん三郎 吉兵衛
あいさつ 惣兵衛
たよりせし 惣兵衛
三郎右衛門 二 郎右衛門
つかひものまね

女かた 類之助 やりての 二郎兵衛 おまねや 八兵衛
かかもん 源左衛門 おとり有
二人三味線引 しはかき歌ふ やつこのまね

一、きかず座頭 サトウ 源左衛門
ツンネ 吉兵衛
テイシニ 二郎右衛門

一、不覺つま

内匠母 惣兵衛 類之助 同母 善左衛門
たいこ 吉兵衛 ジヨ齋 三郎右衛門 奥吉 利右衛門

一、忍ひつま

おゆき 掃部 同つかひもの 二郎兵衛 奥吉 利右衛門
左 近 (さか井町にては五) タイコ 三郎右衛門 次郎右衛門
郎兵衛ナル由

一、若菜 次郎右衛門

ツカイ善坊主チンアミ 子共 類之助 おとり有 掃部 近 善左衛門
幸兵衛 匠 惣兵衛 二 郎兵衛

一、おやころん

武兵衛 二郎右衛門 武兵衛 女類之助 二郎兵衛 おとり有 茶や 八兵衛 武兵衛 三郎右衛門 おとり有
おや 善左衛門 つかひ女

一、おたまき

いとやの 武兵衛 いとや女 惣兵衛 同すき 二郎兵衛 いとや娘 類之助 たいこ 吉兵衛 おとり有
娘ニ思入

舟頭 理右衛門 唐人ニ成テ 源左衛門 武兵衛 二 郎右衛門
ミヤクトル 供奴

其後源左衛門出よせ一段かたる、しやみせん吉之丞也、亥の中刻すむ、萬面白きと云は愚也、其外類之助かも
ん左近の事不及言

一、萬治三年正月二日

堺町松田日向太夫所へ川邊久意見物遣ス

番組

第一篇資料篇

第一篇 資料 備

- 一、よしの幸平 (兼カ)
- 一、ひばり山
- 一、かり小袖
- 一、おやこ妻
- 一、かしこき女
- 一、こべにや
- 一、さるわか
- 以上如此の由
- 二、つれく
- 一、ちこ思ひ

一、萬治三年四月二日 晩、出羽殿へ森内記殿父子御振舞に付、あやつり有之候故、我等も見物可致之由被仰下
 行見る。外記也 太夫、權太夫、上るりは○秀平三代記六段、狂言替事なし。但 弓つぎと申狂言斗替候也

番 組

- 一、同四月三日 鳥越屋敷に見物もの申付、靈臺院殿永壽院殿懸御目
- 一、むこしらす むこ 武兵衛 同女(兼事) 助三郎 同下女 ×兵衛 類か父 佐右衛門、是も上下の者、女 淺之丞
- 武兵衛下人 三郎右衛門 佐右衛門權持 源左衛門、是も上下の者 茶や 八兵衛 おとり有 左 權三郎 近 内 匠 笠と葉を持て

- 一、おもひのちこ ちこ 類、ちこに思入し女 内匠 同うは 惣兵衛 ちこのつかひかうとう 弟子城麻 寺の留主てつけん 吉兵衛 利右衛門 おとり有 同下女 二 郎兵衛 淺之丞
- 一、忍ひつま おゆき 權三郎 下女 二 郎兵衛、左近 供 三 郎右衛門 與 吉 利右衛門 おゆき父 吉兵衛 同母 善左衛門 下人 武兵衛
- 一、××遊 町人 佐右衛門 同女 善左衛門 同子 左近 茶屋 利右衛門 同女 淺之丞 むすめ 權三郎 あいさつ人 吉兵衛
- 浦の千鳥おどり 左 近 小鼓 八兵衛 權三郎

- 一、ゆや ゆや 左 近 同母所ヨリ 淺之丞 同下女 惣兵衛 同中間 佐右衛門 宗盛 吉兵衛 宗盛内の者 武兵衛 八兵衛 おとり有 使あさかほ
 - 一、かり小袖 三郎右衛門手代 武兵衛 佐右衛門 同下女 惣兵衛に小袖かした女 善左衛門 内 匠 同母 淺之丞 同内中間 佐右衛門 同あいさつ女 惣兵衛 吉兵衛 ひんし女
 - 淺之丞 惣兵衛に小袖かした女 善左衛門 同下女 二 郎兵衛 一、吉原學 去年のに替事なし 以上
- 其後助三郎左近權三郎内匠武兵衛二 郎兵衛座敷へ出、酒もり有、但、權三郎内匠二 郎兵衛ははやく歸、殘て助三郎(山本類之) 右近武兵衛居、色々の興有、我等も出慰、丑の中刻に上屋敷に歸宅、
- 一、盃の事、一、茶の事、一、苺害の事、
 面白き事かきりなし

一、萬治三年五月十九日 出羽殿御奥方、弁之助殿、左近殿振舞、其後操申付、懸御目二 太夫ハ下り薩摩外
 記、上るりは權太夫也

○ 頼光八幡詣

- 初段 狂言 げんそうかうてい おくらおとり 小人おとり
- 二段 おしを島原 茂助風呂
- 三段 初花島原 たんぜん うただいまく
- 四段 蔵太鼓の學 れいぜいぶし 藏太鼓の學 たすけつま 長崎ひやうし
- 五段 さしきしんかく 秋野おとり
- 六段 中入

第一篇 資料 備

○上るり 松浦合戦

初段 狂言ありとをし、付のつとろ
小町ものくるひ

二段 ひだのたくみ
りうきうおどり

三段 おぐり
能あそび

四段 うらみ妻
大坂おとり

五段 吉野こぜ
大神樂 神樂おどり

六段 祝言

一、同七月二十七日 古都日向太夫座にて、四天王と云狂言見物ス由又々人語。

一、萬治三年九月十日 ある人のかたるは、すきしころはやりし上るりをきししかといふ。我こたへていやうは給らずといふ。又とひし人それならば語てきかせんとて、其比はやりものしやみせんとして、こまがうてんじうとやらんに、海老尾とやらんを金にて字を入、どろはくわりんとやらん駒をつけ猿尾などに銀かなごにして作は近江とやらんいふものとて、ひきてうしをあはせ

△いつふみそめておちかたのそのみやきのとやらんをはきよおよひしおたよりにて人目つゝみの道すがら分行草の葉末にもむすふやつゆの。玉かつらかゝるうき身は。三州やしとの浦波よせきてもたつねみよかし沖の石人こそしらね袖のつゆかわく間もなきおもひこそつゝむとすれと。かしわぎのもりてやよそに白ゆきのなかれ。いつみのうきしつむなけきを。しかの浦はなる色も。ときわの。若まつにさきそふ花の。藤李こそあけをうほうや紫の雲井に香ふ。覺山の。るいなきすかた。よしだそと。いくよこかれて。金大夫おもひハいつか。やまの井のあさくはあらん戀ひじゆへ。さんやにまよふおきふしや波のたちの。さかた川朝夕なる。たまの井のふかきちきりはたのもしや

一、同三年九月十一日 ある人堺町に見物に行歸の際四天王といふ狂言並秀平さいごより和泉城の所まで狂言にいたすよし。又茶壺に羽織づきんなどをきせ、それをさとうにかたをうたせ、其間に遊山に出る、そのうちの者も主の留主とし出、さきにて主にあひおかしき事有之よし、勿論助三郎掃部左近其外いつれも無事の由かた

一、萬治三年九月十六日 信濃殿(註、松江藩の二代目) 御裏方上野殿御裏方弁之助殿……右近殿お出、引渡之祝

過料理出、巳ノ上刻操初る

番組

杉山丹後掾

○上るり 日、連、記

初段 狂言 萬歳 孫兵衛
夜るのさなへ
しはかきふし

二段 れいせんよしの
もんつくしたゝき
一夜けんきやう

三段 よこ笛
小うた
うたたいもく

四段 かはちかよひ
うきよひやうし
辻だんき

五段 二世のちきり
なんきんかそへうた

六段 小原木おとり
よし原大てき
よし原たんき

七段 かねまき
おふみおとり

○上るり 父子ツレフシ

一段

○上るり 同引三味線は二ちやう、狂言うはなり
かしわいでの道行 少し

戌の上刻挨拶、其より奥へ入料理臺出、祝儀、亥の刻二所御歸
 一、同無神月九日 平氏物語の内、横笛の事、丹後掾芝居にて、狂言にしくみ申候。瀧口處へ横笛たつね行間、歌はせつきやうなり。町にはんに出て有。

一、同三年無神月二十一日 堺町に行、見物したるものゝ語は、日向太夫座にて、おもしろき狂言いたすよし。

番組

一、よりまさ 一、白菊 一、しげ平 一、さかり松 一、六たい 一、こかぢ 一、てかいのつる
 づれも子供ものゝ由かたる。

一、萬治三年十一月二十三日 堺丁へ見せにつかはしつるものに、番付をとへば、しかくといふ

一、小べにや 一、白菊 一、四天王 一、花見すや 一、よりまさ 一、さかあそひ 一、たかをとこ入

一、ぼんでんこく

註 これは日向太夫座らしく思はる

一、萬治三年十一月二十五日 ある人の堺町をとほりて来るに色々役者有とかたる。其名をいかにといへば

△古都傳内日向太夫座

若衆方

山本るゐの助 本名助三郎 高橋かもん
 今井左近 松戸萬三郎
 瀧小源太 加藤木内匠

萬狂言方

横座吉兵衛 小泉武兵衛
 吉川六郎左衛門 野村三郎兵衛
 平野傳兵衛 坂田勘兵衛

秋山權二郎
 川村喜内

鈴木長二郎
 山村山三郎
 奥村五郎兵衛
 吉田次郎兵衛

やりにて
 松井淺之丞
 中村權八郎
 小林甚之丞

あけや津田彌左衛門
 か、馬場善左衛門
 坂本源兵衛

小うた
 川口十右衛門
 川野吉之丞
 清兵衛

とらげ方

田原半右衛門 小林助右衛門
 大野半右衛門 柴田次兵衛
 原二郎右衛門

はやし
 八兵衛
 七兵衛
 七郎兵衛

やっこ
 半兵衛
 德兵衛

△子、勘三郎座役者 (註、元祖勘三郎は前々年死す、今年二代目勘三郎は十四歳)

若衆方

山井吉彌 富永作彌
 池田久米之助 花澤左源太
 松本角彌 伊藤内藏助
 小島半彌 星名平八
 長谷川平三郎 花井六之丞
 星合熊之助

やっこ方

八郎兵衛 彌五八
 茂右衛門 權彌平太
 傳之丞 利右衛門
 平三郎 右衛門

第一篇 資料篇

狂言方
七郎右衛門 左兵衛
次郎右衛門
女かた
二郎兵衛
三郎右衛門
傳十郎
半兵衛

かいて
一郎右衛門
どちけ
長右衛門 孫四郎
八郎兵衛 忠兵衛
金右衛門
かいて
長右衛門 八郎右衛門
権右衛門 金三郎
小うた
権右衛門
狂言
半右衛門 八郎兵衛
勘右衛門

一、同三年十二月三日 上野殿へ振舞ニ行、是は祝儀也。天満八大夫來。

せつきやう番組

○ おくり

初段 すきやむこ
井筒
四段 唐舟
おとり

二段 かなわ
花月
五段 おきなもんたう
いとより

三段 小うた
竹の雪
うた 忠左衛門

六段

註 松平上野介近榮——寛文六年廣瀬藩、直政の第二子にて、綱隆の弟。天和元年、お家越後事件の爲め、直矩と同様閉居を命ぜられ、所領を半減さる。

一、萬治四(寛文元)辛丑正月二日 堺町へ見せに遣し候

一、大しよくわん 一、ようめい天皇 一、横山、その他、女かたおもしろきよし

同所にて和泉太夫○よりよしゆめ合と申上るりいたすよし

一、同正月十日 興一右衛門堺町へ見物に行、歸て咄、

日向太夫座に左善(松本)と云ふ子有、無類にかたることなれば、耳をかたふけて聞。尤類之介、かもん、さ

こん、いづれも息災にておもしろき事いたすよし。

一、同二月四日 禁中にはらうそくなし

一、萬治四年二月十三日 昔とかはりたる事は、さま／＼有といふうちに、上るりのさうしいろ／＼出來たり。

あらましかそへて見るに、内にせつきやうのさうしも有、よき物の本はすくなし。思ひいたし次第に書のせる

○あいこの若 ○さんせう太夫 ○おくり

○しんとく丸 ○もくれん記 ○すみた川

○せつしやう石 ○といだ ○あみたの本地

○しやかの本地

右はせつきやう也

第一篇 資料篇

△上るり

- かうがの三郎
- 源平軍論
- げんそうかうてい
- へんげ論
- 命こひ
- 田原藤太
- 十二段
- かんやうきう
- 藤原有時
- 佐野源左衛門
- 平治らいでん
- いけにゑ
- 相模入道
- 爲久
- 石橋山
- さくらかり
- すみ友
- かさき夜討
- 末竹印論
- 太平記
- 源平落馬論
- 日連記
- 酒てんどうじ
- 友正
- 月見のいこん
- あたかたかたち
- 四天王つくし攻
- 入鹿大臣
- 今川物語
- 關白下馬あらそい
- きん平有
- むらさきの合戦
- みかはりもんだう
- ちりやくもんだう
- しんらん記
- ひたちぼろ
- たつ田らいでん
- にしき戸合戦
- どうじわかざかり
- 源平花揃
- 判官都おち
- 大森彦七
- 頼光記
- 曲馬論
- 曾我物語
- 三井寺合戦

- ふじ川
- さつきもんたう
- 三田八幡ゆらい
- はこね合戦
- 道成寺
- くまがへ先陣論
- ゑびすもんたう
- 源氏あらそひ
- 四天王さいご
- 武田信吉
- 源のよしおき
- もみちがり
- ごあつたゝかい
- きそ物語
- 源平問答
- よろいうち
- きそはた揃
- 山木
- 森屋四天王
- よし家都攻
- 三原かつせん
- ためとも
- 源氏刀揃
- 三浦大助
- 八幡太郎義家
- にたんの四郎
- つくし物語
- 阿へ中丸
- 紀貫之
- 鷹あらそい
- 松らとうかつせん
- 源平武將論
- くりから
- まかき
- 金平末治軍論
- きふね夜討
- 高氏
- 二代のかたき
- じねんこじ
- なすのいこん
- 大物合戦
- 入馬判官兼高
- 田村丸
- 名馬論
- がんせきわり
- 小平六
- もろこし太子あらそい
- 花いくさ

- 甲州合戦
- 哥 枕
- わだいくさ
- 千人切
- よりとも江の島もうて
- よしみつ馬揃
- 源氏ほろそろへ
- かけ政
- くまのの本地
- 大友ぐんぼろ論
- 和泉城
- 秋田合戦
- 武平むほん
- 源平馬揃
- あんの行しや
- うかい
- 業平(幸九)
- ゆふしもんだう
- 金子いくさもんだう
- たいけんもんいくさ
- これたかこれ仁位あらそい
- よし野山花いくさ
- 大やしろ
- 源氏よろいそろへ
- よしたねびじんそろへ
- くわんまいあらそい
- 堀河夜討
- 秀平三代記
- 武平宗平
- かけきよ
- たゞもんたう
- 天狗もんたう
- 龍王合戦
- 日本あら人神
- せき原與一
- いけ取八郎
- ごだいで
- あつもり
- むしやしゆ行
- 源平かうめうあらそい
- らいかうゆふりきあらそい
- 北國落
- 和田酒もり
- 三××かつせん
- 清つみきやくしん
- 源平國あらそい
- 鬼塚
- 天狗羽討

- もち月
- もり久合戦
- 龍馬論
- 四天王あらそい
- あさいな百物語
- したらいいくさ
- 同四年二月二十日晚
- 同四年二月二十二日晚
- 同四年二月二十二日晚
- 同三月三日
- 萬治四年三月十九日
- 橋 姫
- まんちうかま倉入
- とね川合戦
- 武綱さいこ
- やはぎかつせん
- つきしま
- 頼朝記
- 太平記の中いろく
- たけち合戦 金平
- あき政はこねかり
- 鬼藤籠やふり
- 武者そろへ
- 上るり語、前と中由源之丞を呼寄、○十二段、七段、○伏見ときわ三段語。間にうた也。御裏
- 奥玄關にての小うたはちくご座忠兵衛名人也。たんせんあふさいかたはち しばかき
- はん女 このてかしわ、残はしらす。(日記の別の左記参照)
- おとけ狂言 彦九郎 當正月下る由 河原市、ほろしか母、むこ入 長光 小太夫しはかき打
- 女かた小太夫 同斷
- 御裏方御慰のため、奥方より堺丁役者四五人呼、小うた江戸座忠兵衛、同所三味線庄左衛門、松田日向座女方小太夫、古都座とうけ方彦九郎、はやし、同座八郎右衛門
- 註、右別冊日記にあり
- 於羅牟陀人御目見進上物
- 靈臺院殿へ奥方初御呼祝有、

式三番 但三番三斗

○ 上るり 龍田まふて

初段 狂言 魚ほろまつり 福の神の事 伊勢アコギ浦魚ヲ盗テ父母ヤシナウ事 物クルイ父也

二段 才六せりふ 小うた シハカキの類 三 段 たすはん女 吉田のなにかしが事 歌せつきやう

四段 にせおとこ かり小袖の類 五 段 萬六せりふ ついせんそか 大磯虎、化ハイ坂遊女、ハコネにて合、念佛ヲトリ有

六段 ざとうしばがき かけゆせりふ 中入

○ 楠みなと川合戦

初段 きやうけん 和泉式部 松風村雨の類、北野の輪馬 二 段 萬歳 くもきり 頼光事

三段 ぬすみのえん 女ヲヌスミトリニ行、トラハレ後ニ一所ニナル

四段 たすけ妻 蔵太鼓 五 段 すまかくれ 女の心ミントテ死タルト言、スママ女タズネ來ル じねん居士 能に有之 まくらおとり 枕ななけその歌

祝 言

一、同丑四月九日 此比のさたに、水野十郎左衛門とんせいの由、さた色々有之、或おもてきず出来、その故ともいふ。或はなをそがれて、それ故ともいふ。

一、萬治四年四月十六日 出羽殿丹後掾お呼の操有之由、是はおつる殿お振舞の由

一、萬治四年四月二十九日 越前殿を振舞、操申付、丹後掾呼、上るり○兼家六段、狂言は大かたいつもの如く、天人妻、藤六たんじり、舞斗也。

何もお歸以後、操三段○上るり小袖曾我、狂言色々

一、同五月一日 知樂院へ振舞に行、是越前殿御出ニ付、あやつり有之、太夫 丹後掾也○上るり、かけきよ。狂言替事なし。六段見物して歸宅

一、萬治四年五月五日 年號 寛文改元

一、寛文元年(萬治四)五月十九日 出羽殿御裏方靈台院殿振舞、初に御對面、依之操申付候

○丹後掾上るり二ながれ 竹とりの翁、よしたか二心孝

一、同五月二十一日 佐竹修理之輔殿へ出羽守殿信濃殿上野殿右近殿お出我等も行。初佐竹修理殿奥方ニ逢、それより前に見物こと有之候。狂言盡し也。三かつがしばいの者來。女かたなどす。内見しりものは、日向座に居候二郎兵衛(是はすきと、申女ニ成候)、どうけ七左衛門、同忠兵衛(是ハ都内、座に居候)、三左衛門(是は舞)

註 舞の座といふのは三勝芝居と思はる。

一、寛文元年八月上旬 堺町番組の覺、越前屋喜右衛門所より ×水長助處迄申來趣

△江戸 筑後掾 上るり

○ゆり若大臣、狂言 大小 小べにや ちほ××

△杉山 丹後 上るり

○ひしやもんの本地 狂言替事無之

△外記座。上るり

○北條八代記

△源太夫 上るり

○有 時

△八太夫 せつきやう

○もくれん記

△七太夫 せつきやう

○おくり

△いにしへ都傳内 日向太夫

狂言組

行平 萬三郎(松や)

左膳

源兵衛 五郎 彦九郎 三郎 右衛門

四天王

類之 左近 小源

四天王共 類之 近助 太(瀧山)

先陣あらし四天王

善左衛門 ひとりむしや 權三郎(秋山)

たいば しつた太子 類之助 右の祝言にきやらの膳出ル

△鶴屋勘三郎座 (註、この頃中村と云はなかつたと思はる)

鉢木 つねよ 勘三郎 女かた才三郎 西明寺角 彌(松本)

つしまもうで 、、らめんや

一、寛文元年極月十一日の日付にて越前屋喜左衛門所より近習……申越堺丁様子の覺

△當十月より古傳内座われ、役者大勢取のき、新芝居狂言つくし取立申候、役者覺

いにしへ座より 吉 兵衛 同座より ば、善左衛門 同かいて 六郎右衛門

とうけ同座 助右衛門 同女かた 淺之丞 小うた 清 兵衛

同 うた 傳左衛門 同 うた 十右衛門 同 やし 八 兵衛

はやし 八郎右衛門 若業方類之助 同 か も ん (これは様子にて引込居申候)

あけや 彌右衛門 同 孫八弟子 同若業方内 藏助

勘三郎座より どのけ 孫 八郎

此外ニ二三人

右之通取立霜月四日より芝居仕候處ニ、古傳内勘三郎ニ仕負、當正月よりハ難仕候、乍去何とそと心かけ申候よし

△勘三郎残りし役者の内に

上方より下り 玉川千之丞 女かた名人 うつくしき事筆にも不及、

其外とうけ勘兵衛、いくしまや 利兵衛、若衆方 櫻田門彌下り上々ニ候

註 伊原青々園氏云、下り玉川千之丞、「江戸名所記」に寛文元年都のカフキ崩れ、大坂庄左衛門、小舞庄左衛門、

勘兵衛、又九郎など、千之丞を柱にして、下り花をやる云々、今年京都から下りしもの多かりしなり。右の大坂

庄左衛門は多門庄左衛門の事か。

△いにしへ座残役者の覺

大坂 小舞 庄 左衛門	上方より下り若衆方
京 拍子 所 右衛門	京 すわ市之丞
京 多門事 庄 左衛門 (江戸者)	同 今村久馬之助
京 ばゞ久 内	同 左 伊藤小太夫
京 どうけ 又 九郎	同 太夫 同 玉川吉彌
大坂とうけ 與 五郎	同 太夫 同 山本勘太郎
大坂とうけ ゆふなん	同 同 藤田左京
はやし 九八郎 (江戸ニ居)	同 同 勝之丞
同 平 十郎	同 同 伊織
殘役者 佐右衛門 理右衛門 彦九郎	勘右衛門 武兵衛 勘四郎
權之丞 甚之丞 傳兵衛	勘右衛門 二郎右衛門 宇一右衛門

若 萬三郎 同左 善 同長二郎 左 近 其他ニ有

一、寛文二年卯月十二日 午の剃着。いなかものながら、すきの道はわすれぬものにや、堺町のお方々々の事を

とへば、じやの道はへみとかや、よくはしらすとてあらくしる人のあり

△新芝居 (註、新芝居又は新傳内座といふ。此年夏刊行の「刺野老」に新古傳内座及び勘三郎座の若衆役者人名が載つてゐる)

類之助 など座本 吉兵衛 右同斷 若 男 坂田市之丞 玉川主膳 主 來 江戸山三郎 同市三郎 九兵衛 同斷

△古日向太夫座

京、玉村吉彌、伊藤小太夫、藤田久米之助、松本勘太郎 (今村)

右之外、瀬川藏人、藤田左京、吉川六彌、江戸、左門、(松本)左善、(瀧)小源太、(竹本)八三郎

△勘三郎芝居

京、玉川千之丞、梅田門彌、梅澤掃門、花井才三郎、江戸、村山八十郎(花岡)

右之外、七十郎、權太郎、才十郎、吉彌、權八、角彌

同じ頃、はやりうたはととへば、だいはぶし、なぎのはぶしとことふ。

一、寛文二年五月三日 江戸野郎盛由、沙汰のみ、因茲、野郎虫、野郎とわす語などいふ草子出来

一、寛文二年五月三日

△堺町古傳内芝居狂言付

第一篇 資料篇

第一篇 資料 篇

追善曾我

心中様し

地こくやつこ

風呂屋やつこ

祇園祭

若衆論

雲(蜘蛛)きり

中光

茶湯たんせん

花のゑん

山中常盤

さたうさへもん

屏風まおとこ

江戸あみかさ

新市

あかぬ別

あこき

横笛

註 この番組十八番と、次の古傳内座の出し物と差あるは何故にや、この十八番中から撰擇して上演したものか、それにして外題の異つたものもあり、尤も次の「熊坂」と、右の「山中常盤」の如きは同物と思はる。

△堺町古傳内芝居へ大谷留齋見物に遣ス

番組役者付覺

一番 熊坂(註、前記山中常盤)

(と同物と思はる)

牛若 左

京

供の者 金十郎
同女 拍子所左衛門 惣兵衛

せりふ 三郎右衛門 熊坂先に見にゆく者、

小舞庄左衛門、

おとり有 左

小太夫 善

子やつこ 庄五郎
九十九郎 常盤のうらい 吉野善兵衛

二番 屏風まをとこ

本男又 九郎(道化)

まをとこ 小舞庄左衛門

同女 勘四郎

小舞庄左衛門女 善兵衛

おとり 左善 左京 小太夫 左内 八三郎 六彌

金十郎、二郎右衛門、惣兵衛、武兵衛出ル。武兵衛はなしをしてまをとこをにがす也。

三番 茶の湯 たんぜん

茶やていしゆ 與五郎 娘 玉村吉彌

女房 惣兵衛

やつこ 所左衛門

問狂 三郎右衛門

女かた 勘四郎

武兵衛 小舞庄左衛門 小太夫

後におとり、左京、八三郎、左門、吉彌もおとる也。小うた 八郎兵衛

註 此夏刊行の「新野老」の繪では、吉彌が、茶の湯をして、奴が多門庄左衛門、女房が久内となつてゐる。

四番 ついせん曾我

おにわら 左京 馬三正 庄五郎
とう三郎 左善 九十九郎 曾我太郎、勘右衛門 刀持 庄五郎 十郎五郎母 惣兵衛

五郎兵衛

問狂 三郎右衛門云、とら 勘太郎 五郎ちいん 八三郎 十郎のうらい 小舞庄左衛門

つかい女 三郎右衛門
八郎兵衛
五郎兵衛

五番 江 口 勘太 下女 勘四郎、宿かる借(瀬川)藏人、供の坊 金十郎

おや 庄左衛門、娘のうらい 吉彌

六番 ゆめの榮花

問狂 三郎右衛門

又 九郎 武兵衛

(後公案になる) 小太夫、同神のつけ言設 庄五郎、同斷 所左衛門、

第一篇 資料 篇

夫も來。

○上るり 菅原親王 金平 國綱

初段 さうしあらひ、付うたあらそひ
曲太鼓

二段 二度しよち入
やつこおとり

三段 やまたの大蛇
飛梅
らんまい

四段 和泉式部
四きらんきよく

五段 すま名所くさり

六段 中入

○多田満仲

初段 むさしのかくれ
しかたの曲

二段 やさか遊
小うた なきふし
きやうぶし

三段 あらし山

四段 祝言

一、同二寅年八月十八日 書之

一、鶴屋勘三郎、古都日向太夫芝居子共の善悪すきく也

玉川千之丞は不及言、乍去年は廿六七のよし、花井才三郎梅田門彌四天二天之沙汰也、ある人の云才三郎ハ少口もとあしと也、門彌ハぬるきと云人も有、又古都座名高きは勘太郎也、乍去當世は玉村吉彌也、是ハ見る程の人ほめぬはなし、大方十人よれば八人ほどは吉彌ひいき也。其次には今村久米之助、伊藤小太夫、藤田左京也。すきくなれば、とかくかたくちにはいひかたし

△いにしへ座

若宮八幡

ついせんそか

江口

花見たんじやく

屏風間男

茶湯たんぜん

櫻川

はんくわいほろあらそひ

狂亂松風

しやかの本地

かも物語

遊行柳

二女狂

執行順禮

はん女

△かん三郎座

河内通 (註、玉川千之丞の出し物たらん)

吉田物語

ほうらいきう

丁子風呂

大森大狂言

註 古傳内座の出し物に比べると勘三郎座のは常に数が少い。それは曲の内容が多いよりも、或は客を退出してはかへた爲だらうか。一三二頁参照。

一、同二年八月二十日 晩 ××御裏方へ奥方より御馳走に上るりかたり小うた狂言師懸御目

○上るり 平山熊谷先陣論 六段 近江太夫

小うた

色々 筑後座

忠兵衛
左次兵衛
三味、庄右衛門

註 寛文元年二月二十二日の條にも筑後座の事がある。筑後座は小うたである。

きやうげん いにしへ一座、ゆふなん、三郎兵衛ものまねす。

女かた、小十郎。町人の子、一人十二三、(是は傘の下狂言す。) はやし、八郎右衛門。

亥ノ刻濟。

第一篇 資料篇

一、寛文二年九月二十一日 佐竹右京大輔殿祝言相調祝儀振舞……操午ノ上刻初、大夫肥前掾清政也

○上るり 櫻 狩 六段

初段 狂言 まんさい
れいせん

二段 横 笛
しはかき

三段 茶の湯
おとり

四段 小うた
たいもく

五段 さらし
なんきん拍子

中入

○後上るり 小袖 そが 三段

一段 狂言 高尾山姥
うきよびやうし

二段 夕かほ
しのびおとり

三段 もんつくし
おとり

佐竹殿 (註、右京大夫義處、秋田藩、) 一度に二段目に退出ス
佐竹修理大夫の次の代

一、同二年九月二十三日 清天、終日上野殿へ昨日同前の振舞

操巳の後刻初ル、大夫筑後掾也

○上るり ゆりわか大臣

一段 狂言 ゑほしかい、
小町物くるい

二段 花見かたり
小べにや付おとり

三段 花のなると(こま)
風呂入やつこ
おとり

四段 あふぎをり
あかししほかさ

五段 子かくし道心、
れんぼの月待 付だんぎ

六段 中入 料理出候

○後上るり 和田 酒盛

一段 きやうけん太郎ませりふ
たすけつま

二段 にせ男
くもきり

三段 ゑひす夢合
善光寺まうで 祝言

一、同九月二十五日 小姓等堺町(古傳内座ならん)見物に遣

番 付

はんくわい

いたつら書

文 學

遊行柳

とをる

かこりむこ

かうし

いなかほまれ

一、同九月三十日 堺丁へ長尾……留齋花林等遣、酉刻何も歸、見物の番付。

△大夫鶴屋勘三郎座

一よきり

ちりやく

ほうらいきう

ゑんの鳥井

一らい法師

菊 重

河内かよひ 千之亟

大森彦七 勘三郎

いその玉水

金平どうじ 勘三郎

右之通の由、野郎沙汰とりく也、門彌、八十郎、才三郎、右三人すきくといへとも、八十郎ひいき多し。
女かた千之丞ハさら也、源太郎をほめぬものなし

一、同二年十月二十一日 信濃守殿御裏方、上野殿奥方佐竹右京殿奥方振舞、朝ハ裏方より振舞、我等方よりハ操云付、晝より振舞、

操巳ノ中刻より、太夫江戸筑後掾也

○上るり 酒 天童子

初段 狂言 えほしかい、にせおとこ

二段 見つ花あそび 小べにや

三段 太郎ませりふ れんほの月待

四段 花のなるこ、
風呂入やつこ
うきよおとり

五段 子かくし道心
かけゆせりふ
あほうまいり

六段

上るり過て狂言

万六せりふ

たすけつま

あこき物くるひ

才六せりふ

あふきをり

善光寺詣 付おとり

祝言

一、寛文三年正月六日 去年鶴屋勘三郎芝居にて、出入の様子、八十郎を勘三郎念比し候所、玉川千之丞もらい候へ共くれ不申候、其に付千之丞京へ登らんといヘルヲ一座の者共あつかひ、八十郎千之丞心まゝに成よし。千之丞は二百兩取よし、又九郎吉彌兩人メ百五十兩取よし。

註 吉彌は又九郎の抱であつた。

一、寛文三年正月七日 堺町吹矢町狂言付

△いにしへの都日向太夫芝居

一、とり越ふね

女かた 山本勘太郎 同金 作 同九十郎 同三九郎 同今村久米之助

間狂 傳兵衛 勘左衛門 五兵衛

女かた 久 内 とうけ 又九郎 狂言 庄左衛門 狂 所左衛門 同 二郎右衛門 舟頭彦、九郎

一、梅のうらみ

女かた 小太夫 同左 門 同左 内 同八 彌 同六 彌 同主 殿

狂言 武兵衛、五郎兵衛、勘左衛門 女形 久 内 狂 所左衛門 とうけ 又九郎 ものまね ゆふなん

ひやらし 所左衛門

一、堀川夜討

牛若 八三郎 山伏左 門 同小太夫 同八 彌 同藏 主 同六 彌 同久米之助 普賢 庄左衛門

ひやらし 所左衛門 女かた 久 内 母形 善左衛門 同勘四郎 とうけ 與五郎 同利右衛門 女方 五郎兵衛

狂言 武兵衛 同六左衛門

一、ぢねんこじ

女かた 但親 右近源左衛門 女かた 子金 作 小舞 庄左衛門 とうけ 與五郎 狂 傳兵衛 勘左衛門

第一篇 資料篇

ひやうし 所左衛門 母形善左衛門 どうけ 利右衛門 女五郎兵衛

一、小 町

小町 玉村吉彌 女かた 小太夫 同左 内 同久米之助 同八三郎 同又十郎 同勘左衛門 女かた 久 内
とうけ 利右衛門

狂言 三郎右衛門 善四郎 傳兵衛 助九郎 武兵衛 小舞庄左衛門 類助三郎 女勘四郎

一、又九郎名つけ親

女かた 勘太郎 吉 彌 藏 主 久米之助 下り 虎之助 金 作 五郎兵衛

狂言 六左衛門 傳兵衛 惣兵衛 女方勘四郎 女方久 内 同老父 善左衛門 狂三郎右衛門 所左衛門

とうけ 利右衛門 小舞庄左衛門 狂武兵衛 子ひろい 又九郎

一、さんややつこ

婆女 勘太郎 同吉 彌 同久米之助 同小太夫 又十郎 左 内 左 門 八三郎 藏 主

金 作 虎之助 六 彌 女かた 主 殿 あけやか、源左衛門

狂言 傳兵衛 庄左衛門 所左衛門 三郎右衛門 助三郎 ものまね ゆふなん 女かた 勘四郎 久 内

善左衛門 とうけ 與五郎 次郎 松 女かた 惣兵衛 助九郎 やつこ 多門庄左衛門 同小泉武兵衛

△鶴屋勘三郎座

一、きやうけん 篠原合戦 役者

子共 七十郎 吉 彌 長十郎 今 彌 五郎八 主 來 權十郎 萬之助 辨之助 久米之助 七郎助

狂言 方清太夫 利兵衛 小左衛門 平右衛門 七郎右衛門 左五右衛門 きねや 勘兵衛 作彌 九兵衛

八郎右衛門 孫市 とうけ 長右衛門 半左衛門 源兵衛 彌兵衛 曾四郎

一、繪 う つ し

辨之助 山三郎 平三郎

狂言 きねや 勘兵衛 半左衛門 左五右衛門 次郎兵衛 長左衛門 源左衛門

一、ちごあそび

勘三郎 市三郎 吉 彌 八十郎 左 近喜 助權 八

狂言 九兵衛 利兵衛 長右衛門 孫 市 一郎右衛門 源兵衛 二郎兵衛

一、つくはかいてう

玉川千之丞 才三郎 左近 主 來 萬之助

間狂 七郎右衛門 源兵衛 半兵衛 利兵衛 九兵衛 源太郎 長左衛門 小左衛門 徳兵衛

左五右衛門 二郎兵衛

一、忍ひかよひ

久米之助 花岡才三郎 吉 彌 吉田權八 主 來

狂言 七郎右衛門 源兵衛 孫 市 半兵衛 長左衛門 彌兵衛 徳兵衛 左五右衛門 曾四郎 清太夫

右は正月七日の狂言候也

一、寛文三年正月十三日 大藏彌太郎所にて狂言盡興行の由

註 正月十九日 直矩侯夫人死、二十二歳、出羽守直政二女駒姫也。又彌太郎は狂言師也。

一、寛文三年二月十一日

△古日向太夫芝居にて深川まふでといふ狂言、仕組は彼所の八幡の祭のてい也。野良共或は女方に成或若衆に成參所、彼所にみせものなとするてい舞臺の内にはさじきの内よりはすわなる若き者一人、あみ笠きてかほかくしぶたいの上の上る。諸人見て是はいつきようなる事也と見る所に、かの狂言茶屋のかゝに源右衛門成ていしゆに又九郎成、是兩人出むかいは何として御上り候といへはかの男我まはいなかものにて候、内々承及候へ共子共衆の御名を不存候。一々に承度そんし是へ罷出候。ちや屋のかゝとの御おしへ給へといへば、源右衛門女のていにていかにもうはの聞とけ候とて一々に是は吉彌そは勘太郎といふ。又かのおとこいふは、とてもこの事に此舞臺の内にて盃を所望成ほとといへは、又九郎出是は御人たいとこそ申しふじんなる御仕かたにて候まつもとの座へ御かへり尤といへば、かの男はらをたてこのわかいものか一度出てそらぶんとけすて盃をのましすごゝとはかへるましといへは、源右衛門いふはわたしのよきようにいたし候はんまつ御かへり候へといふ。いよゝおとこはらをたてる見物もしゝからりてゐる内に、かのおとこさらはあみかさをとらんとて笠を取づきんぬきたれば、多門庄左衛門なり見物の者も座中もとつとわらふ右の様子二日有之其後はいたし候はぬよし

△鶴屋勘三郎座にて座敷あやつりといふきやうげんす、人形出る事也

一、寛文三年四月二十一日 一番の小姓九郎三郎、次五右衛門、伊右衛門、團右衛、彌兵衛、喜太夫堺丁へ見物に遣之。古都傳内所見物

番付書本寫

ぜかい	北野ぬめり	見るめうり
わださかもり	きりかね妻	ちや入衆道
やつこ道心	さか大念佛	ちしよくのほまれ
かたみの手箱	男のよめ入	きよたけやつこ
ゑんの繪くらべ		

評歌 春秋はいつれをろかもなかりけり花の山本露の玉むら

一、寛文三年四月二十四日 晩、狂言師呼、少つゝ見る。人數

右近源左衛門 回子岩	松	多門庄左衛門	小舞庄左衛門	拍子所左衛門	齋藤與五郎	小泉武兵衛
どうけ 利右衛門	女方勘四郎	小うた甚之丞	小鼓一	人		
戌刻より狂言、	福神	きおんやつこ	ちねんこじ			
ちりやくいしや		とりさし	日待やつこ			

第一篇 資料篇

門言葉うた。

註 こゝに歌數首あり

一、同三年十一月十四日 堺町に通る 古へ日向太夫座二つに成、又九郎吉彌、權介其他伊藤小太夫

竹田相模、多門庄左衛門、小舞庄左衛門、梅田門彌など也

委は不見、外通見る也

一、寛文四年二月十五日 江戸堺丁吹矢町役者付狂言付上るり等書付來齋藤二左衛門より聞之

一、いにしへ座大形如例、

一、鶴屋芝居大形如例

一、新芝居 ゑひやすや吉兵衛、竹之丞、梅田門彌(元勘三郎所に有之)、竹中小太夫、狂言一郎左衛門

一、操、筑後掾所にて大明たつたん十八年の合戦三日に語よし。

一、寛文四年四月十一日 此比江戸にはやりうたは清十郎ぶし也。勘三郎所にて狂言に仕出してからはやると也。

一、寛文四年五月十七日 上野より鳥越へ寄、半袴に辰中刻時分惣泉寺へ振舞、兼約ニ付行、爲馳走、操有之

太夫肥前掾清政也

番 組

○上るり かんらの太夫友政

一段 狂言 似せ大黒 付若水おとり 歌 かけゆ

二段 ちりやく妻 付道中清十郎ぶし シテ 藤六

三段 しゆうく座頭 かけゆ

四段 れんかむこ入 かけゆ

中入 料理出

振舞過て、狂言天人妻、うるまおとり、並に、辻たんき、小うた、六段所望に付小うた有

一、同閏五月二十一日 終日本多内藏助へ振舞、操太夫肥前掾清政也

辰ノ中刻初り、申ノ上刻すみ。

操の番組

○上るり 吳越の戦 六段

初段 狂言 にせ大黒 付おとり かけゆ
松風村雨 米ま

二段 百物かたり かけゆ
横笛 藤六
美人たつき

三段 ちりやく妻
なんきんひやうし 藤六
清十郎ぶし

四段 むかくの悦 かけゆ
小うた
たんじり 舞 藤六

五段 名ごりのきやら
紅葉かくれ
よしのおとり

中入 料理

○和泉城 四段

初段 わたしむこ かけゆ
さらし 藤六
くもきり

二段 梅が妻
きうかうハとり
れんかむこ

三段 辻たんき
天人妻

第一篇 資料篇

五五

一、同四年七月十四日より玉川千之丞×××へ出、勘三郎かへりたるひやうしふみいたしたるといふ沙汰有。
江戸虎之助一日にてまつりのやうすあやつるよし、是も×××の事か。

一、寛文四年八月三日 堺町の見物に遺す、見て來咄是。

○達磨の本地

操肥前掾 所

○熱田本地

江戸虎之助 所

狂言方別テ替事無之、見せ物に唐獅子トテ有

一、同八月二十一日 雨天操呼、太夫肥前也。是は惣侍共へ爲見之也、辰之刻始ル

番 組

○上るり 達磨本地 六段

初段

証言 夜のさなへ
茶の湯 若松おとり

二段

にせくわんしん
うき世ひやうし
よこ笛

三段

ちりやく妻
忍ひおとり
しうくさとう

四段

しらきく 若衆たんぎの事
名残の伽羅

五段

たかを山うば
くもきり

六段

中入

○後上るり 味方論 六段

初段

辻談儀
水風呂

二段

よいての里かくれ
よしのおとり

三段

さらし
小うた
平さし舞

四段

一夜けんきやう
くもきり

五段

夕かほ
れんかむこ

六段

祝言

酉ノ上刻相濟、初ル前肥前兵三郎六右衛門出也

一、寛文四年十月二十五日 晴天靈臺院殿攝州裏方おつうとのおあくり振舞、操執行。

辰下刻操初リ、太夫肥前掾也

番 組

○源氏花揃

一段

狂言 万歳
夜のさなへ
すいふろ入
よこふへ

二段

ふせくわんじん
小うた
あさし舞
ちりやく妻

三段

名残のきやら
さかだんぎ
忍びおとり
辻だんぎ

中入

四段

わたしむこ
夕顔
茶の湯
若松おとり

五段

さらし
ふろやつこ
あしのおとり
ひの××かくれ

六段

大紅葉かくれ
たいもく
おくり
きうかうおとり

祝言

今日之操出來物也、酉上刻相濟

一、寛文五年四月晦日 米屋傳右衛門様爲見依之靈臺院殿内藤豊州奥方息女藤太本多内藏息女振舞。

操辰ノ刻始ル、杉山肥前掾也

第一篇 資料篇

○上るり 祇園ノ本地 六段

初段 狂言 天人妻 横笛 わたしむこ
二段 かつさふし 茶の湯 ぬさし

三段 ちりやく妻 かつねつり 風呂やつこ さらし

四段 高雄山うば 六月七日御祭禮、 中入午ノ刻始
名残のきやら

五段 水風呂入 若衆たんき いたの里かくれ

六段 六月十四日御祭禮 祝言

まつり渡り物の中、七日分米麻、うつたるまい、おはこき、瀬十郎ふし、さいもん、山ほこ多し。十四日まつりの中、からこおとり、舟うた、藤六石引、まんさい、外にほこ山數多不及筆、大人形やつこ三人出

一、同五年五月八日 堺町見物に一番の小姓、下石主税入江六郎左衛門……舟にて遣、多門芝居見物、雨降候得共見物多ニ付狂言五番するよし

一、寛文五年七月十一日天晴 爲長生見玉之祝振舞有り、依之家老共品川十郎右衛門奏者番白井源藏等來、……日暮に躍興行

おとり組

一、五人鶴おとり 開口、かい團扇にて、七夕のふかきちきりをむすふ文月なれはなかきためしに引三味せんをあはせおとりをはしめ候間、たいこのかしらを頼申

一、同葛の葉おとり

一、同まくらおとり ちねんこじ ぐせまい

一、同きやくおとり

一、四人うらちとり

一、もんつくしおとり

祝言 小鼓、水長助、太鼓、小河原武太夫

一、同夜 惣おとり有り

一、寛文六年四月二十一日 江戸著

一、寛文六年七月十一日 生見玉の祝振舞、靈台院殿御出ニ付、内藤、土州奥方息達呼、操興行、卯ノ后刻何も御出、膳過て操始辰后刻也、太夫肥前掾、申ノ上刻相濟

番組

○淨瑠璃 みけんしやく 六段

狂言 まんさい もちさけ
夜のさなべ ほうらい
うつしゑ うらみ櫻(藤六物まね)
濱遊ひ(はやし物)

むくらの悦(?) 小うた 孫兵衛
うつらつる舞よねま
高尾山姥 吉野おとり
曲たいもく

土るり濟

○いのちこひ道行 弓つき なすの與一よねま
うきよひやうし 忍ひおとり

○哥まくら道行 祝言

みけんしやく上るり不出來、狂言不勝、道行衆出來、かけ清の狂言、弓つき出來にて述之

一、同八月八日 堺丁へ見せにやる

番 付

一、ゑびすびしやもん

一、うらみのかね

一、曉のわかれ

一、うき草の月

一、すけたちのもん

一、布引の瀧

一、やなかやつこ

一、都曲ひやうし

一、土橋の大じや

役者は小舞、多門、又九郎、理兵衛、彌平次、玉川主膳、玉村吉彌、今村久米之助、出來島小ざらし、橋本せん衛門、梅田門彌、彦九郎、惣兵衛、三郎兵衛、武兵衛など也

一、寛文六年八月九日

同日聞、木挽町にてけんくわ有、上るりかたり和泉(丹波少掾事)が子長太夫と云者、堺丁にて上るり仕廻、木挽丁に宿有り、付テ狂言しばゐにて見物してゐたりしが、神明の向本上院とかやいふ人の小性親は鍋島殿に有之侍の子なるが見物に來、つれに坊主一人、刀さし一人有り、長太夫色々ちなどいひ、さはいなるていにてゐし所を通りしが、さうりはきながら前を通行を長太夫とかめしかば、御めんなれといひしが、聞つけさる事といひ事済しに、跡なる若黨の刀こじり長太夫にあたりじかば、猶はらをたて、前から侍そうにはなかつたなといひし事、坊主も若黨も何やかやぐづぐづといひあひしを、又小性聞かね、これはせばく候間、表に出合はたすべきといふ。長太夫出かねべきかとして出、きりむすびしが、長太夫手負ぬるを、町の者とも見付

小性をぼうやぞうりなどにてうちふせ、とやかくとしけるうちに、長太夫父の丹波もきよつけ、長刀もちかけ來、其内になべしま殿へもしれ、侍など多來、本上院からも人來を見て、和泉太夫も長刀をおさめ、あつかふていにもてなしけれど、丁人のうちしきすつよくして小性ハ死に、長太夫も切られけると也

一、寛文六年八月二十五日晚 茶過て馳走に舞言付、幸若八左衛門、ワキ權左衛門。

舞滿仲一番過後、段出、所望にて、和田酒盛、又伏見常盤有

成ノ后刻各退出

一、同六年九月十四日聞、此中虎之助煩ニ付、淨雲出上るりをかたる。依之見物入込事甚し、町奉行(村越長門)同心

二人見物を同道して來、サシキへ上ラントイフ、座の者云、人ツマリテ今日ハ入事難成ト答、同心腹立テちやうちやくす、同心と聞て座の者おじわなゝきければ、猶打まわり、かくやへ入テ役者迄うちまわり歸、其日町奉行與力見物に行、様子を具に見歸て奉行衆に語之、依之理ふじん成事なりとてかの同心二人被切之、依之淨雲も五十日(七日とも云)の閉門スと云

一、同十月七日 さつま淨雲、座元五郎右衛門閉門ゆるされ候よし

一、寛文六年十月二十五日 家來之者江戸にて氣詰に付、操言付。いつれもそろい候て我出。江戸つめにて氣つまり候はんと思如此言付。ゆるくと可爲見物候よし云後入。小役人等迄也。正面を渡、我ハ脇正面にて見物。太夫さつま也、伊勢大掾と有、淨雲來。是ハいせ虎之助煩ニ付也

辰上刻操初、番組

○上るり 花 軍

初段 清五郎語、是は左門と云、跡 狂言 初とら參
カフキの時分小つゝみ打子也 駒かた狸々、付曲玉取

二段 同人かたる 河原座遊 付あふきの曲
袴着 替しゝおとり 長崎拍子

三段 淨雲語 戀のつけこゑ
道行 うきよおとり おんがの舞

四段 同人かたる ためとも鳥わたり、付からはた織
みつきのびいとろ、付四竹の亂曲
うかれ題目

五段 同人かたる いにしへ鬼島原と云、舟岡ゆさん
忍の段 四季の亂曲 くるま僧
天狗けいづり

六段 清五郎かたる 花月落陽

○小袖 曾 我 二段所望、淨雲語。一段過て

狂言 やつこあらそひ 此狂言中に、小歌所望、三左衛門土手ぶし語 祝言、
ぬめりおとり 申ノ下刻濟、花いくさ四段過て申入。

一、同十一月朔日 操大夫肥前掾に銀三十枚遣之

一、同六年十一月二十二日 堺丁へ見物ニ遣輩西ノ中刻歸、

番組 一、嵯峨野長者、一、伊勢浦海士門彌 又次郎 一、赤染衛門久間介 彦九郎 一、景清小舞 一、むかし躍吉彌 かもん 久米助 門彌

一、やつこ紅葉狩多門 吉彌 又九郎 小舞 いくしま 外 一、万戸珠

一、同 六年十一月二十三日 村山淺之助、渡邊伊右衛門同道にて勘三郎座見物、狂言十一番見、越前屋庄左衛門弟孫兵衛才覺にて、やらう左近右近權三郎作彌八十郎傳十郎權八見物所ニ來、酒之興有之語

△又九郎座にて狂言 一、江州名所物かたり庄五郎 半之丞 一、伊勢浦海士門彌 又次郎

一、奴紅葉狩多門庄左衛門 出來島小さらし 一、小式部内侍久米 彦九郎 一、戀慕の教訓理兵衛 庄兵衛 小さらし 市彌

一、浮舟躍 跡子共不殘出 一、萬戸玉小舞 三左衛門 又九郎 吉彌

今日新役者出狂言もあたらしきを見物すよし

一、寛文六年十一月二十六日 伏見屋丹波大掾に成しよしにて菓子持參

一、寛文六年十二月二日 小舞庄左衛門(三十五 六歳) 坂下又次郎(十八 歳) 呼、

依之武兵衛、右兵衛、小舞平左衛門同道來。但武兵衛、懸見見廻の様子をする。多勢來事難成ニ付也。村野九郎三郎所にて、振舞候テ燈時分我所より、何も來りし及聞幸之事に候間出テげいをも少し見度よし云遣 齋藤周 (因カ) 雪同道して出、我料理の間へ出、役者が名乗。

狂言のセリふ當座ニ少シ仕組、狂言の様成事する。主右兵衛、下人又二郎ニ成出、大坂京などの事セリふ云、又二郎ひやうし踏。六ばう武兵衛、うり物や右兵衛、ちやや又二郎成出、どうけ云、小舞も有之、しんぼち大鼓右兵衛打、此合手に庄左衛門、武兵衛、又二郎出、小舞有之、又二郎は伊勢浦の海士と云狂言の中、舟にて舞、仕舞を少する。其後同狂言の中の事所望武兵衛と又次郎出、せりふ云、これの市之丞と云、小舞する。庄左衛門も色々舞中、安宅（勸進帳）、道成寺の語、よし原與市語、キリ紅葉狩

一、同 六年十二月二十四日 晚狂言師呼、

一、餅かいなりひら まひすや 吉郎兵衛 小舞 庄左衛門 彦九郎 一、法師が母 女 彦九郎

一、河原市 吉郎兵衛 庄左衛門 酒の汲入のまね 小舞色々有之 彦九郎 小うた 傳右衛門、作右衛門、文左衛門

一、寛文七年正月二日より堺丁木枕町にて、色々見物有之、はなしのついでに寄、大鼓打所に鐘を出すハ追出しにて無之しるし也。終日の見物ものか鐘を置と也

一、寛文七年正月二十八日 今年操太夫は

○酒天童子 伊勢大掾

○二十四孝 肥前掾

○頼義奥州責

丹波少掾

その外不寫

△又九郎所にてハ

住吉問答

浅キ櫻

やうかうの松

小野のおつう

若衆か町人

むこ入奴

染殿狂亂

金山寺

一、寛文七年二月三日聞 出来島小さらし岩城の者成が、おや大罪有ニよつて、岩城へよひかへさるゝよし沙汰

有之きらるゝともまことらしくいふ、又偽かと後に可尋

一、同時分聞 新芝居の皆之承は好々ニ云々あしき子にては無之、小さらしなどには比べかたきかと云云、又お

とりしとも云々、私云小さらしよりは次ニ次有べき

一、同七年二月十三日晚 白井頼母所へ薩摩太夫淨雲呼寄、振舞ニ付、因雪同道して出、上るり酒天童子四段、

花軍忍之段一段、語聞、誠名人也。其より又頼母長屋へ行、和泉城三段、道行二段語之、太夫當年七十五ニ成よし。

一、寛文七年二月十九日、村山浅之助見物ニ遣ニ付村野九郎三郎行田仁右衛門山田勘右衛門遣、又九郎座見物

一、孝の御門 一、近江國佐々木朝治 一、若衆お江戸町

一、やうかうの松 一、照田姫 一、市森長者

一、奴むこ入 一、金壽丸

右見物候次第不同、久米之助、小さらし(此子十日ノ見所同)ゆきえ、かもん、市之丞能と云云。此外もあしきにはあらねともくらべてはといふ事勿論也

一、同七年閏二月三日に聞、又九郎座出來島小さらしを孟子と世人いふ。是は文字にも子皿子と書について也。

一、同閏二月五日、浮世淨るりの地

さらさにたゆまぬ戀風の音信きててもかしはや二おもてなる君なればとはし心もおきつ舟恨みかねてそ身をくたく

一、寛文七年閏二月五日聞上るり

市藏一人供としておちこち人はさていつくうかれ行こそ嬉しけれ、こまかた堂も跡に見て、舟のあたり行さきも兄や弟にかくれてハさんやの里の一村に水はまいる茶屋の門、けにもと思ふけしきにて、めてはせんじゆこつかはら、弓手はなにあふ吉原のこうしに住女郎お帳つらさせ給ひける。五丁町を打過て、あけや町にもつきしかは二階座敷に打あがり、こゑを春けき君達の小哥三味せん引つれて入日をおしむとんてきやの土手のそなたに燈、煙ちかよふちんの鳴聲に誰かのひたるあかしさま、身をつくしてもおてきにはいつかあふせのお手枕、袖をしきねの夢にたに、わすれもせぬ床のうち後はきやうしやにへたてられ、歸り見らるゝ心地をばやけのをこるもはてしなきよひくそとのあふらむしあはぬけぬきてかえりけり

一、寛文七、閏二月六日夜 白井頼母助今日の慰として新芝居狂言師呼、服部文左衛門才覺。戌ノ后刻狂言始、

役者の覺

市村竹之丞(太夫前髪有り)、宇左衛門(母方即竹之丞親) 狂言彌平太、どろけ又五郎、狂加平太、同小兵衛
狂言八郎右衛門、同九郎三郎、女源右衛門、小鼓九郎兵衛、小哥左兵衛

番 付

一、福まつり 九郎三郎 大玉彌平太 一、江戸通 小田原六ぼう 舞有 竹之丞 加平太 八郎右衛門 彌平太 小兵衛

一、ぶんぜくし 又五郎 源右衛門 九郎三郎 加平太 一、奴子だんりん 居合やはら竹之丞 相手八郎右衛門 辨慶物語兩人にてする役者 大形出 三郎右衛門不田 一、ほうしが母 彌平太 九郎三郎 源右衛門

一、繪かたみ 小舞多 宇左衛門 竹之丞 竹之丞 一、なすの與一語 彌平太 一、所望にて 形見の太鼓 竹之丞、彌平太 八郎右衛門、拍子舞有 残役者大形出

一、日待遊 竹之丞 外皆出、いまわし有

祝言 過て竹之丞、宇左衛門一人つゝ前へ出、服部文左衛門も出、子ノ后刻相濟

一、同閏二月十一日曇 操興行、客衆出羽守殿上野介殿右近太夫殿中根日向守殿……巳ノ后刻始、 太夫杉

山肥前掾清政

○淨るり 二十四孝の中 八孝 六段(一段の中ニ一孝入、四段有り、二孝入、二段有り)

狂言 萬歳 忍ひおとり

京かのこや 腰いのり 七夕

車僧 ちりやく妻 ほうさい 小うた

くもきり 歌たいもく つりきつね

所望、さらし大鼓打煩しといへども成次第、羽州殿御所望付也

名残のきやら 忍ひおとり

祝言 酉の后刻相濟

一、寛文七年三月六日 堺町、はん東又九郎へ見物に村山浅之助等遣之、

番付 寫

一、あひすはいかい 牛之丞

一、かたみのふれん 又九郎

一、なさけ花むすび 久米之助 彦九郎

一、げんさいぬえ 小舞庄左衛門 小ざらし

一、頼朝濱遊び 門彌

一、たて山せんしやう 吉郎兵衛 又次郎

一、やつこつれ 多門庄左衛門 武兵衛

一、しかたりんき 小ざらし 小舞庄左衛門

一、女三宮まり 吉彌 次第不同及暮歸

一、同四月二十二日 昨日相殘小性溝口金兵衛山田勘右衛門堺丁へ遣之

番付 式三番

一、あひすはいかい 牛之丞

一、鹽ひあそび 門彌

一、しかたりんき 小ざらし 小舞

一、梅かへの曲 吉兵衛

一、戀のきれうり ゆき五

一、夢のうき橋 久米之助

一、やつこ哥枕 市之丞 多門

一、げんさい襦

△新芝居

一、八間茶屋 役者不殘 茶屋か、主膳

ちこ主膳いとこ 團右衛門 さるわか 竹之丞

一、寛文七年四月二十八日 出羽殿より操興行可有之候間、望ニ候ハ、可參旨御申越ニ付午ノ上刻行、太夫肥前掾

○上るり 天神本地 四段目より六段目の内迄見、

狂言 横笛、かのこや、哥たいもく、道中狂言 清十郎おとり見

一、同七年五月二日 天雨、晚方晴、暇請之振舞、靈臺院殿、豊州奥方、本多内藏息女藤太御出、朝料理、辰后刻。操興行。伊勢大掾呼、辰中刻初。

番付

○三番三 上瑠璃御前

初段 北野まうて 同しやくひやうし 孫のまれあそひ(れ?)

二段 こそくり二王 小袖のえん 長崎ひやうし

三段 うらみのふみ 付なかうたつれふし しゆんれいもんどう 付らかんのまね

四段 ようめい天王 やふさめまつり からはた織 やふさめまつり たいしよくわん おんかの舞 やつこあらそひ

第一篇資料篇

五段 たいしよくわん おんかの舞
おとり

六段 中入

わか宮まうて 付の、う
車そろ 付てんくけいつくし

○上るり 切兼曾我

初段 ついぜんそが
じねんこじ

二段 はかまき
かわりし、おとり

三段 祝言

上るり御前六段内 初二段、清五郎 三段目 姿見つれふし 虎之助 清五郎 四段目 忍の段 上るり 虎之助 清五郎

切かね曾我 三段ながら 虎之助語。

目見ハ虎之助、五郎右衛門、市之丞

一、同七年五月七日夜 堺町役者呼來、村野九郎三郎所にて振舞、酉ノ中刻狂言初

一、あひす大こく いくしま理兵衛 及びす 坂東又三郎 大こく 宇兵衛 本主

一、しかたのりんき 小舞 庄左衛門 女房 藤十郎 逢坂彦九郎 立木茂兵衛

一、奴むこ 多門庄左衛門、武兵衛 彦九郎、藤十郎 九郎三郎、久内郎

一、お江戸町 又次郎 藤十郎 武兵衛 宇兵衛 理兵衛

一、うきよたんき 九郎三郎 武兵衛 三郎兵衛

一、日待奴 不殘役者出順々ニ舞、小舞、キリ紅葉狩、幾島、玉九郎三郎歌ふ、いたいけ舞彦九郎、かくら 舞又次郎、拍子舞多門小歌にて出、しはかき打、惣おとりにて祝言。小哥十兵衛作右衛門來、但初前に一人 つゝ名乗。

一、寛文七年七月二十五日 操言付、巳ノ上刻初、伊勢大掾也、淨雲も呼來、

○三番三 上 瑠 璃

一段目 狂言 北野詣 袴着 し、おとり 車僧

二段 花月落陽 矢ふさめまつり
こべにや

三段 順禮問答 らうたいこ
うらみのふみ
あはうまいり(つゝ)

四段 小袖のゑん
まくらおとり
れんぼのきつね
大しよくわん

五段 戀のつけこゑ
あかしほ笠(カ)
六ひやうし
龍女成佛

六段 祝言

初段二段清五郎語、三段四段虎之助語、五段淨雲語、六段清五郎語、中入三段目狂言過有之

註 此年大和守五月十三日江戸を立ち同二十二日越後村上へ着同六月十一日公用ニテ江戸ニ至リ同八月五日江戸を 立播州へ

一、寛文七年七月二十八日 (註、此時大和守) 丁度江戸ニ在勤) 晚狂言師呼寄見物、長にも見せる

一、新町 彌平太 勘四郎 又五郎

一、大内花そろへ 竹之丞 彌平太 小歌 勘四郎 九郎兵衛 小鼓 左兵衛

一、ちせん石 又五郎 彌平太

一、いたはり衆道 竹之丞 又五郎 彌平太

竹之丞 又五郎 彌平太
九兵衛 小歌 傳右衛門

一、三百目 彌平太 又五郎

一、小町物狂 竹之丞 彌平太 勘四郎

一、やきの遊び 道明寺紅葉狩 竹之丞 彌平太 勘四郎 又五郎 各小舞

祝言

戌ノ后刻初、子ノ上刻濟、服部文左衛門才覺也、則市村竹之丞と一同に逢

一、寛文八年戊申七月二十四日 (姫路城にて)

立野狂言盡し様子見せに古澤五郎右衛門遣之及暮歸、立野より十町ほど脇北村と云所宮の前にて、芝居立舞臺も取置の様成様子、見物も千五六百人も可有之候、就役者の書付寫來

太夫森野小太夫とて大坂九郎右衛門次男なり 狂言付の覺

一、福人そろへ 勘之丞 山三郎 數馬 一、きしきのちうげん 鳴の淵あらいとちいふ 小舞庄左衛門

一、戀のたが神 久米之助 宇源次 一、やつこつれ六ばう たもん庄左衛門

一、祝儀のふりう 惣役者出躍有、但番組毎日かはるよし

役者 付

太夫若女方 今村久米之助 同 瀧井山三郎、小嶋勝之丞、川島數馬、松本門之丞、藤井瀧之丞、上野久太郎、

澤井金之丞、野村爲之丞、西川吉之丞、江戸中村勘太郎、松井主殿、櫻井初之丞、嶋田三郎源次、妻木掃部、

松島左源太、花井市兵衛、江戸花村吉彌、同 玉崎庄太夫、とらけ 秋田喜太郎、同 浮世又次郎、同 廣江傳右衛

門、か、方原田八郎兵衛、市彌源兵衛、同 田宮山三郎、同 中島二郎右衛門、勘三郎弟中村勘之丞、多門庄左衛

門、小舞庄左衛門、小うた 徳右衛門、喜兵衛、伊兵衛、三みせん 藤十郎、狂言 太郎兵衛

此外役者二十七人、巳ノ刻はじまり、未ノ中刻相濟よし
一、寛文八年十二月二十一日 根井源五郎、村山麻之助、大森一學、山田勘右衛門、齋藤因雪等振舞。……小舞
や久右衛門才覺して太夫さしきかり見物と也

番 組

一、三番三 勘三郎 弟長十郎 一、袴着 櫻井門彌 花井才三郎 一、ゑんの短冊 今村久米助 永井勘彌 彌五九郎

一、清水やつこ 多門庄左衛門 才三郎 一、惣おとり 子供出 一、時雨のそらねいり 小舞庄左衛門 十郎右衛門 庄兵衛

一、ちりやくのかけ物 作や九兵衛、權十郎 松島市之丞

一、寛文八年十二月二十四日晚 淨雲井小舞庄左衛門、きやり傳兵衛、どうけ彌五九郎呼寄、奥にも見物、予も

第一篇 資料 篇

見之、座敷は大小姓詰所にて也、簾屏風たてるなり。

○淨雲 淨瑠璃道行 鎌倉迄京よりの道 行、但旅言葉入 次に小袖曾我初段語之

△狂言に猿若傳兵衛 あいて庄左衛門はしめに芝居の云たて、其後に最上三藏色々のおかしき事あり、過て

狂言 亭主 庄左衛門 客傳兵衛 うちの者彌五九郎まねにて狂言也。當座つくり事か、傳兵衛きやり、庄左

衛門小舞山姥舞、彌五九郎魚の事小舞

○上るり 小袖曾我 末段過て○花いくさ 初段所望、△狂言きかず庄屋、亭主傳兵衛、つんぼ庄左衛

門、庄屋、彌五九郎、はじめに彌五九郎色々京はなしする。

庄左衛門も宇治のさらし、紅葉狩、キリ舞過て、小舞、與一が弓物語所望、

其後傳兵衛、事ふれ、過て○上るり 花軍忍の段 所望、過て、傳兵衛きやり、彌五九郎はやし舞、萬歳

傳兵衛 彌五九郎 所望する、

戌の下列相濟、いづれも大儀のよし譽、服部文左衛門同道して來。

一、寛文九年正月十一日 靈臺院殿如嘉例御出、奥ニテ……御馳走のため鶴屋播磨呼之からくり表にて御目懸、

からくりは三才圖次第

一、せんきやう國 腹へ棒ヲ入 荷なへ歩

一、かちやう國 ×××× カタニカケ歩

一、けんと國 木の枝を傳 ひ水くむ

一、ていまんはん國 舟に乗 魚釣

一、てうきやく國并てうひ國 足の長き人歩寄、てうび 國の手の長き人×××魚を取

一、ふつしり國 翁の民三人出、世ノ中ヲ 閉三人顔の色カへ見スル

一、うみん國 鳥の如く飛 び山谷行

一、けんゑんし皇帝 皇帝キサキ管ケンにて龍に乗天 へ上ルクワンケンの音色々有り

過て 一、氏神へ宮參のからくり、神樂あり

一、氏神の神主奉幣 ××××

一、茶屋にて人形てんかくしよくする

一、同たはこのむ人形 是ハ座 中へ出

一、鶏ときをつくる二こゑ也 一、高砂のほうか

一、物書人形 鶯 一をよき人形

一、舟のからくり

過て予寢間へ御通、餅出からくりの道具取をき、其後又みす屏風へ御出、松村体(休カ)閑色々とうけ御目に懸、是ハ靈臺院殿お好ニ付也、奥女中も見之

一、寛文九年正月十七日夜 表奥共奉御影待、依之狂言師呼、齋藤因雪云付、服部文左衛門召れ來、戌ヲ刻居間
の次ニ簾掛女中も見物、

番 組

一、ゑひす大こく 大こく又二郎 五びす山三郎 亭主 吉兵衛

一、しんぼち太鼓 山三郎 又二郎 吉兵衛 太左衛門

一、ゑひすおろし 又二郎 吉兵衛

一、こんくはい きつね山三郎 かつて 太左衛門

一、しのび車 又二郎 げい色々 吉兵衛

一、猿若 山三郎 太左衛門

一、さらし 山三郎 又二郎 色々小舞せつ 吉兵衛 きやう上るり 太左衛門

小鼓三之丞、山三郎伯父也、山三郎がい誠妙也

一、寛文九年二月二十二日天晴、操興行、依之松平上野殿同右近太夫中根大隅守……此方より言遣客衆也

辰下刻操始 太夫肥前掾、内匠虎之助

番 付

○上るり 鎌倉權五郎 六段 初段、二段、五段、虎之助かたる、三、四、六、肥前かたる

一段 狂言 ほうらい山 拍子舞 ため朝島渡 付きんこ躍

二段 不孝幸行 清水やつこ にせおとこ

三段 誰か袖 風車 拍子舞 ぬひす舞

四段 雪ふり、うらみの文 矢ふさめ なすの興市(ゆふなん)

五段 子からし道心 きふねまうて 石引きやり

六段 過て中入

此内重之物吸物、但二段過て酒出、四段過ていちこもとき出也、六段過て料理三迄、福田五右衛門七郎右衛門來、予も引物一度、上野殿盆予納之、茶過て所望にて

○操あたか二段、虎之助語、○吉氏道行一段、肥前かたる。△狂言、豊後妻、しのびおとり、きやり、

祝言

中入過て、操はじめ前に、役者ゆふなんを×××ものまね色々する

此操の内重一度、後段吸物出、酉ノ后刻相濟

小うた十兵衛、きやり千之助、其他才六、太郎ま。萬人形、小内匠市之丞也。

客衆歸し以後、肥前虎之助前へ出、情を出し候旨相述。

註 吉氏道行、八年十二月二十四日に淨雲が語つてある道行は之と別物か、この吾妻下りの道行が「淋しき座の慰」に収めてある。豊前中津川の大將吉氏が宇佐の國司から譏奏されて謫居の身となるが、妻とその子松若が遂に國司を亡ぼして舊領安堵する物語で、相當行はれたと思はれる。寛永期頃の趣向で、萬治前の作。詳しくは拙著「古淨瑠璃新研究」を参照。

一、同九年四月十一日 曇天大風吹、朝少雨降、今晚祝ニ靈臺院殿内藤豊州奥方……振舞、操言付、辰中刻過

初、太夫伊勢大掾

○上瑠璃 内 式三番 但あほしの段。 宇治橋姫 六段 内初段、二段、五段、小源太夫、永閑語 三段、四段、六段、清五郎語

中ノ語手也

狂言 番組

初段 あほしのみ 哥酒盛 ぬめり躍

二段 若宮まうで 枕返し 三幅一對ほうか

三段 小町物くるい 浦島太郎玉手箱ほうか色々

第一篇 資料篇

四段 貞女入湯 中入、表寝間にて晝の料理有之
四季らん曲 悦座頭 追善會我
長崎柴垣

六段 過て淨雲所望

○小 敦 盛 三段一人ノ語

初段 人形出揃、
ワキへ人形出淨雲老人にて 井筒水くみ
失念可有之旨せりふに斷之
二段 こならやうきひ
女おとり

未中刻過て相濟、太夫薄五郎目見

一、寛文九年八月二十六日 長振舞狂言師呼、是は春ニ懸振舞、此夏の祝儀也、申ノ后刻はしまる

狂言組

一、福まつり 荒木武兵衛 子共友之助
孝主 傳兵衛 下人龜之丞
同女房 金太夫 權之丞
おとり有り 一、若之君臣
伊之助 折助 卅四人源左衛門かゝへ

一、吉野花見 山本右近(十九) 子共やう
しつか 傳兵衛 近 左兵次 おとり有
伊龜之助 折助 卅四人源左衛門かゝへ

一、關寺小町 右近源左衛門(山本)
傳兵衛 長九郎
一、ぬめり鳥さし
山本采女 武兵衛
十郎右衛門 長九郎
六左衛門

一、つりきつね 源左衛門
源左末の子 七歳養 輔
中入有之 一、所望女萬歳
武兵衛 采女

一、なさけのあき人 横山ニ傳兵衛
同女房 金太夫 同下人 長九郎
同娘右 近 あき人 左平次
山崎 舞 同女 權之丞 海道下り舞

一、女さる若 役者不殘出、願々舞
おちやめのと 源左衛門 さみせん 右 近 猿若采 女 出おとりの時替々出
祝言 千秋樂謡入、予も番數大儀の
旨相述之

役者十九人來、小うた久兵衛、伊兵衛、はやし五兵衛、平九郎、狂言前ニ源左衛門父子三人、武兵衛、服部文
左衛門前へ出名乘、子ノ后刻狂言相濟

一、寛文九年九月二十一日 昨日大小姓一番、堀中八郎右衛門水野平右衛門……今日小島十右衛門、長尾三太夫
……大谷留齋等遣之、一昨日此方芝居同斷

番 付

一、式三番 但三番三斗り 一、佐夜中山 鈴木平右衛門 萬能五郎兵衛
坂東又九郎 三郎右衛門
吉村吉兵衛 玉川主 勝内
一、野飼牛 出來島小さらし
平右衛門 吉兵衛

第一篇 資料篇

第一篇 資料篇

躍二番間に有之 一、をいさかし 山新左衛門三郎右衛門

一、かつさ大もく 萬太夫三郎右衛門

一、保生 市村竹之丞 彌平太 彦九郎 十郎兵衛

註 小さらし所刑の噂は偽か

一、寛文九年十月二十四日夜 慰に見物事云付、奥も見物、役者木挽町其外集者、是者本多吉左衛門才覺ニテ役者共來なり。

伊勢島座 玉井權八 同座 淺井萬作 浪人者 橋本留井之助 同田中勘之助、道外 勘三郎彌八 浪人與五郎 長太夫座 油勘六、女方 長太夫座 二郎三郎 勘や座平八 長太夫立役者 篠塚半兵衛 同三郎兵衛 同武兵衛 勘や七郎兵衛 長太夫座 八郎左衛門 はやし多六、賀平 小うた 市郎左衛門、作右衛門 きやり 小半兵衛

狂言 番組

一、夢のいつはり 若女 萬 作 下女 武兵衛 八

一、れんぼのゆふれい 權八、勘六、半兵衛 武兵衛 三郎兵衛 七郎兵衛

一、萬歳 太夫 小半兵衛 八

一、名取川 若女 類之助 女 三郎兵衛 八

一、木やり 三味せんにて 小半兵衛

一、江戸六法 勘之助、彌八 半兵衛、三郎兵衛 中入有、役者ニも酒のまて

一、手引の座頭 女 類之助 似せ座頭 半兵衛 女 權八 座頭 與五郎 武兵衛

一、木やり 彌八 小半兵衛

一、みとりの狂言 女 萬 作 三郎兵衛 女 與五郎 武兵衛 女 二郎三郎 平 八

一、所望 浪人 知ちよくの笠 半兵衛 八、勘六

一、日侍 役者不殘出げいづくし

一、惣おとり 祝言

戌ノ中刻より丑后刻迄有之、此内、半兵衛彌八次ニ勘六二郎三郎上手なり、るゐ之助枕返しあふきの曲おとりの内にする、

一、寛文九年十一月二日 天朝晴、晝より曇風吹、晚晴、今日家頼共氣詰と存候付、操呼見物言付、予操はしめる前に出、家頼共永々江戸詰ニテ氣詰可有之と思見物云付旨何もへ相述之。他所の面々へハ料理朝夕出、予見物之様に何も相述候へ共左候へハ、予見物ニ呼寄たる様ニ有之、第一ハ何も氣詰り可申とて、少しも不見之。番付も番衆共寄合極之よし。操太夫肥前并虎之助古内匠市之丞、友男前へ出、此輩之家來共馳走之操ニ候間予見物の時のことく……………

番組

○上瑠璃 湊 川 六段

第一篇 資料篇

第一篇 資料 篇

狂言 ほうらひ山
道 ちやうめい天王

江口 名残の伽羅
田原藤太

妻物くるい
ちやの湯
石引きやり

なすの與市
うかれきつね
よこふゑ

たかやすかよひ
ふしみときわ
いさめほてい

祝言

酉后刻相濟て、友男、千之助前へ出、小うた物まね有之

一、寛文九年十一月十六日 天晴辰ノ中刻より操有之、肥前太夫、小内匠虎之助也

番 組

○上るり 吉 氏 六段

初段 狂言 田原藤太、甘玉の曲
名残の伽羅

三段 六代もんかく
たかやすかよひ
石引きやり

中入有之

四段 うかれきつね道中
井清十郎
いさめのほてい

五段 花見かたり
ふ孝のかうく
大坂おとり

六段 過て祝言

一、寛文十年正月 見物所堺町吹矢丁見セに遣之

△市村竹之丞芝居

一、小原の放せう 皆之助 九兵衛 喜九郎 (彦カ)

一、うづせみやつこ 萬太夫 平右衛門 三郎右衛門

一、あさむらさき 吉十郎 (野河) 皆之助 十右衛門

一、手本哥宴 勝之丞 (山本) 勘右衛門

一、つや物語 吉十郎 庄兵衛 十右衛門

一、庭の木かくれ 傳 吉 (宮崎) 平右衛門 久三郎

一、たはこや衆道 吉十郎 庄兵衛 三右衛門

一、枯野狂亂 かもん (上村) 久三郎

一、きやしや物賣 傳 吉 庄兵衛 十右衛門

一、二人御物 萬太夫 (村山) 今彌 (?) 利右衛門

一、若衆道くらべ 六平次 彌 (杉本) 左平次 利右衛門

一、戀の辻だんき かもん 三右衛門

△鶴屋勘三郎芝居

一、榮花のたから寄

一、すまゐのくわんたて 初太夫 (川島) 六右衛門 百兵衛

一、東やつこ 多門 (吉岡) 作や九兵衛

一、戀慕の文さがし 千之丞 門兵衛 仁兵衛

一、四條はりこや 山三郎 (瀧井) 仁兵衛

一、うきよ萬歳 久米助 (今村) 山三郎 彌五九郎

第一篇 資料 篇

一、浅くさまうて 多小九兵衛門

一、どうじ若さかり 勘三郎(中村)折長十郎

一、うらみのとんせい 権十郎(吉川)五兵衛庄左衛門

一、あはのなるとの介 菊之丞(玉澤)山三郎

一、にせ若衆 とのも十郎右衛門

△玉川主膳芝居

一、りんきのかけ物

一、やつこ花のゑん 内記(山川)多門庄左衛門

一、すかたのゑかみ 浅之丞(玉井)八十郎彌平太

一、ねやのむつこと 市之丞(松島)山三郎彌五九郎

一、君花かため 勘千之丞彌五九郎

一、一の谷女武者 久米助小舞庄左衛門仁兵衛

一、曉のわかれ 一之丞(松島)彌五九郎五兵衛

一、かり場のしか 岡之丞庄左衛門

一、しゆくくはんの水 多村(山川)彌平太

一、戀のかけ橋 小さらし(出来島)又九郎

一、八幡太郎義家 吉彌又二郎

一、津の國ありま遊 主三郎(玉河)又二郎

△操 一、肥前芝居 上るりきおんの本地

一、小源太夫芝居 上るりさとうせめ

一、大源太夫芝居 太平記 次

一、寛文十年正月十七日夜 爲慰見物事云付、奥も見物之、寄召役者狂言萬事齋藤庄左衛門所ニ云遣、荒木武兵衛才覺也、亥刻始り、丑后刻濟、狂言組ノ覺

一、新市 傳兵衛金太夫六 一、さんや上るり 武兵衛久采女内舞

一、やつこ花のゑん 小歌多門庄左衛門小泉勘五郎彌平太 傳兵衛武兵衛助三郎

一、繪うらみ 金彌平太彌六 武兵衛六 一、須磨名所物語 傳兵衛、勘三郎采女、しほくみ舞

中入有之、所望ニ付三番有之覺

一、清十郎 采平彌六 平太女 久助三郎内

一、うはなり衆道 勘金太五郎六 武傳兵衛

一、下谷やつこ しほかき打庄左衛門不殘役者出惣おとり

おとり有之濟て祝言

一、寛文十年正月十八日 書之(色々記したる文の後に)

此外に此中はやるうたは、むさとしたる言葉のやうなることや、みな前にしるすたちの歌なれば、いつれをいつれと書付かたし。あるいは吉原上るりの、きふねまうてのとてあり、事ななければ不記之。その上はん木に大方有之、何も狂言盡しの芝居にてする狂言のしくみの歌上るりせつきやうの類多し。

一、寛文十一年五月 (六月江戸着)

△十四日とやらん、玉川千之丞死、木挽町に有之しと云々、

△多門庄左衛門煩とて不出、京へか、大坂へ登らんといふ事と云々

△堺町見せものに當歳子につのゝはへたるものあり、いまたいきて有之、乳くれるものなくておはりしよし

△肥前太夫上るりに、源氏物語といふ上るりごせんの本ぶしかたり入多し

△内匠虎之助べち座に成よし

△勘三郎、主膳、竹之丞、大狂言、但主膳竹之丞ハ一所、六月に入りて狂言始めるよし

一寛文十一年五月廿二日参観 此の道中にて源五兵衛おまんといふうたをうたふ、うたの地はひろうなれば略之。興作といふうたも近年はやりしと聞、是は後に聞、源五兵衛まんも薩摩の國の事とも大坂の事といふ、清十郎に似たる事か、兄弟おもひをかけさしちかひたるともいふ、又云源五兵衛子六衛門まん兄弟おもひさしちかひしと云備中の事と云々

一、寛文十一年七月十七日 晩慰ニ狂言師呼之

戌上刻狂言始之、番 組

一、洛中めぐり 村上源太郎 名乗、名所花盡舞有之、武兵衛清水繪馬見之、野郎萬歳云、但芝居にてハ中村山三郎と云よし。

一、柳の水 下女水くむ藤田皆之助

親あひる 傳兵衛 同女 九兵衛 下女 中村金太夫

一、入間川 奴子大名の子 鈴木平左衛門 親 傳兵衛 かし召仕

いる間なに 竹村七左衛門 半右衛門 勘右衛門 三郎右衛門

一、衆道指合

若衆 玉崎市之丞 念者 勘右衛門 下人 半右衛門

一、小倉山 多門庄左衛門 (獅子三味線小歌) 藤田皆之助 後ニ道心念佛有 下人 かねや十右衛門 出家 三郎右衛門 弟子 半右衛門

一、雪見のてまり 娘 皆之助 源太郎

母親 傳兵衛 勘右衛門 半右衛門

一、花段落文 奴子 源太郎 勘右衛門 若衆 平右衛門 源太郎 半右衛門 (源太郎にほれ、さうり取ニ成)

(配役疑はし)

一、日待やつこ 不殘田 法印 傳兵衛 娘 皆之助 庄左衛門 下女 金太郎 兵衛 武兵衛 半右衛門 彌平次 座頭 十右衛門 橋の世物ふしあくる、ごうりき 久三郎 役者上るりかたる 皆之助 曲太鼓 三郎右衛門 玉の段 彌平次 小舞、四段五段十六段舞

一、惣おとり 祝言 丑ノ后刻相濟

小うた作右衛門、徳右衛門、十郎兵衛、三味線吉之丞、八郎右衛門、はやし平十郎

一、寛文十一年七月十日 比日沙汰遊山舟の内にて操興行珍敷事云々

一、同 七月二十二日聞 前記操の人数ハ御城の坊主共多有之町人もあり、松平越中殿見物のよし不分明、酒井

雅樂頭殿濱屋敷ニテ被見之珍敷興舟也見てまいれと春藤六郎次郎を遣して歸て其趣語、大名衆奉公人ハなきか

と先づ左様の者は無之大形町人と申よし、私云、是ハ進藤權右衛門にて可有之六郎次郎は違り

一、同日聞 遊山舟美女をのせ中に紙丁釣見物多時分かの紙丁ヲ上へ引上ケしかバ見くるしき老人ニ紙子きせ指

置よし

一、同八月二日聞 先日舟にて操興行ハ彌實正故ニ奉行衆吟味有之松平越中殿と云、大舟ニあやつり舞臺かさ

り、もうせんにて常のことくにつゝみ幕二段はり、上るり狂言あり、樂屋舟六艘見物舟二百艘も有之、まこと

の見物舟は前ニ有之舟には××有之云々

又大黒舟と云有り、舟の跡先、女をのせ、中に三十斗の男はさみ箱二つに腰かけ、もみの頭巾耳の根までかぶ

り有之、外の舟中より大黒舟ノとよはり候よし

又先にも記紙丁ヲ上へあけし舟は女ハ無之、女のかたはら紙丁にかけ有白髪につけ髪をしてくすみたるなりに

て見臺に大學のせよみ有、又見えすくかやのうちにゆふくと寝て有し小坊主ニ枕元ニて一人伽羅燒一人ハあ

ふきて有之、此三色めつらしき舟也、右之趣進藤權之助昨日與市右衛門に咄よし、操ハ藤堂和泉殿屋敷より見

物のよし

此日雅樂頭殿深川の屋敷茶屋より海表御見渡御入候得は大名衆二十丁立の舟に乗りか子に歌はせ主人ハ矢倉に

あかり被有之雅樂頭殿見付、やくらよりころひ下り、舟をこきかへされしについて、とかく雅樂頭殿被出間敷
とてかの屋敷へ比日ハ御出無之よし、右之屋敷ハ夏すゝみ斗故つゞいの屋敷とお申候より、是も權右衛門か
たる

一、寛文十一年九月十八日 吉原けいせい野郎の事書きあつめし

○草紙の名、見し聞しをこゝに書、開板次第不同

一、吉原かゝみ

一、同大全

一、同かい合

一、同よぶこ鳥

一、同こまさらい

一、同花の露(夢カ)

一、同しもく草

一、同くせつ草

一、同すゝめ

一、同玉手箱

一、同とうけわらい

一、そこねなし

一、同心かく抄

一、こんけんき

一、同さんてう記

一、かはり評判

一、同難波草

一、同ますかゝみ

一、同ひてん書

一、このてかしは

一、高尾落し文

一、高屏風

一、吉原太夫かせん

一、同つれく草

○野良分 開板次第不同

一、野良色まし草

一、同大佛師(寛文七年)

一、同風集

一、同ひはりくさ

一、やくしや評判

一、野良くさ

第一篇 資料篇

- 一、ひしや門天
- 一、同あまのしやく
- 一、同たぬき
- 一、同とはす語
- 一、同大かゝみ
- 一、同花さかり
- 一、同野人虫
- 一、同わかみくさ
- 一、同十六らん
- 一、同道引
- 一、同おもてかへ
- 一、同すゝはき
- 一、野良せん
- 一、同大せん(判野老ノ跋ニ永昌が大全トアリ)
- 一、同そうまくり
- 一、同つれくさ(寛文十一年)
- 一、同ふるたゝみ
- 一、同むきところ(跋に永昌が大全とある)
- 一、同からみとき
- 一、野良虫

一、寛文十一年十月五日 参勤之祝、靈臺院殿豊州奥御息女藤太次テニ奥上下振舞之ニ付……則操興行、肥前太

夫也

操。三段、琴二所ニ入、管絃四季連曲、第六兵衛四段、忍の段連曲、琴入、琴ハ九郎次郎引

一、上瑠璃御前 但六段

- 初段 狂言 酒餅論 三條こかち よしのおとり
- 二段 おくりむかし語 落馬かみなり 女順禮
- 三段 長持おとこ 伏見常盤 道成寺

四段 箱根詣 けんどん打 女さるわか

五段 うははみ きふねもふて 石引

六段 過て狂言 寶揃、非人敵討、大坂おとり 祝言 何も戌中刻お歸、

一、同十一年十月十一日聞 堺町木挽町役者只今迄ハ一年ヲ金何程と相極候得共、左候へば一ヶ月の内に二十日も出事無之、太夫元損有之ニ付、出たる日一兩つゝと極、役者上々也。其次其役者應之よし聞之

一、寛文十一年十月二十八日 本多吉左衛門才覺ニテ木挽町役者召寄、料理の間上の間ニ簾懸奥見物如例、侍共大形見物、夜戌ノ上刻狂言初、子ノ中刻濟 番 組

- 一、萬歳 仙台又五郎 伽羅小半兵衛
- 一、かはらぬ契 森川若之助 篠塚半兵衛 役者大形
- 一、花見座頭 篠塚半兵衛 油勘六 松本小さらし 役者大形

- 一、うつせみ奴 鈴木平左衛門 玉川小太夫
- 一、二人ねんじや 若之助 上村勘右衛門 田島喜左衛門
- 一、源五兵衛 役者大形 小さらし出

- 一、入間川奴子 平左衛門 若之助
- 一、糸屋大よせ 役者大形出、勘六小舞、文五郎門せつきやう語、

小さらし小舞、若之助小うた、其上ニ惣躍、 祝言

役者來覺、太夫 松本小さらし、同 森川若之助、同 玉川小太夫、若女 志加山萬作、かゝ方 二郎三郎、奴子 鈴木平左衛門、立役 河廣傳兵衛(阿房々)、篠塚半兵衛、明石武兵衛、あらし 上村勘右衛門、田島喜右衛門、油勘六、仙臺文五郎、小うた 九兵衛、三味 三左衛門、三郎兵衛、此外ハ装束着せ髪ゆいなり

一、寛文十一年十一月二日 大小姓昨日の半分残通遣之、山村座へ見物に行、狂言昨日の通り

一、多ひす祭 藤村清十郎
此外子共

一、多んま問答 山中小傳次
藤村一彌
花澤三彌

一、和哥の心見 正木市之丞
嵐勘右衛門
沖津傳六

一、常盤前化粧之縁 松本小さらし
森川和哥之介
篠崎半兵衛
河廣傳兵衛(阿房カ)
油勘六

一、入間川 鈴木平左衛門
坂田林之介
玉川小太夫

一、三井寺しかた小町 中村山三郎
勘右衛門
文傳五郎

一、待夜のうらみ 若之介
半兵衛
文五郎

一、二人手まり 市之丞
上村齋(?)
武兵衛

一、伊勢參旅寝の狂亂 役者不殘

堺町にて、勘三郎所にて顔みせ、主膳竹之丞近日仕よし。木引町河原崎と森田勘六(彌カ)、二座頓てより狂言
盡興行の由、河原崎座能もするよし

一、寛文十二年六月十二日 晚堺町狂言師呼

狂言 番付

一、大福長者 河廣傳兵衛(?)
幸左衛門

一、ちりやくの酒 市村庄之助
小舞 三郎右衛門

一、似せ順禮 坂東又三郎、松島采女
山本瀧之丞、荒木武兵衛

一、ゑんの鳥さし 村山勘太郎

一、鞠場の本望 瀧之丞
次左衛門

一、新市 中村金太夫
市村庄之助
三郎右衛門

一、ひふん物かたり 三右工門、大坂彦九郎
中村作彌、次左衛門
其他出

一、伊勢參り 役者不殘出
躍有

祝言

今夜の狂言中々出来なり役者下手多、

上中村作彌 上松島采女 上竹之丞甥八歳 市村庄之助 上山本瀧之丞、村山勘太郎 上村上源太郎
同市彌 女上中村金太夫 上河廣傳兵衛 上坂東又次郎 上大坂彦九郎 上小舞三郎右衛門
上姥善右衛門 上芝武兵衛、吉右衛門、伊右衛門 中香左衛門、又三郎、十郎兵衛、源左衛門、福藏
三味セン 八郎右衛門 同七郎右衛門 小つゝみ平十郎 大つゝみ加兵衛 小左兵衛 歌次郎左衛門
同吉左衛門 笛清左衛門 上岡田次左衛門

取合役者にて狂言の仕組おもひ不合、其外勘略役者の面々多

此内又二郎、武兵衛、傳兵衛、彦九郎、小つゝみ平十郎一同に出目見、曉方相濟

一、寛文十三年七月十六日 今夜竹之丞座の狂言師呼、戌刻狂言初、役者の來覺、藤田皆之介、上村掃部、花岡八
十郎、勘之丞 右之分 坂東又次郎、荒木武兵衛、嵐勘右衛門、狸十郎左衛門、トロ水十郎兵衛、大坂彦九郎、
油勘六、あと七左衛門、女方金太夫、八郎兵衛、河廣傳兵衛(阿房カ)、坊主又兵衛、小哥 十兵衛 三味線 吉之丞
久兵衛

小歌彌兵衛、鼓源五兵衛、外二三人

一、加賀菊酒 祖父傳兵衛 仙人 十郎左衛門
父 七左衛門 旦那 十兵衛
子 勘右衛門 五兵衛

一、形見の太鼓 太鼓の曲有 女方掃部、櫻傳兵衛、甥勘六
十郎兵 金太夫、又二郎

一、熊坂中入の末、市村庄之助、是もおやの所望とてあいさつ人出て有、此庄之助十ノ内斗、竹之丞が弟なり
 一、きふねつや物かたり 小澤女ニ成、さらしなと云、きふやらのよし川染松 有ちりめん髪下、若衆 川嶋勘太郎、

神主 又二郎、かん太郎名者 武兵衛

此狂言さらしなかん太郎に戀慕、其願に貴布禰の社へ參心を引見んとて、又二郎神宣の様に勘太郎と縁を
 結ぶ事ならぬと云てついでとかく武兵衛といふあふらむし有故とて、武兵衛かんたらう調伏せんといひ
 て、上るりにて調伏の仕舞あり、其後又二郎武兵衛出かんたらうと引合て神をいさめるとて拍子をさらし
 と又二郎ふむ、座にてせし狂言をぬきくにするゆへにしかと難記。小澤は時分能とて歸、與一右衛門長
 屋へ龍之丞同道料理振舞乗物にて送

一、おとり 若衆 川嶋勘太郎 女 杉本六彌 紋つくし大坂おとりの類

一、花盗人 末頼政のキリ舞 庄之助 傳兵衛 十郎兵衛 一、戀のにせ座頭 次左衛門 勘太郎 六 彌 藤左衛門

一、京うちまいり 小三郎 又二郎 武兵衛 拍子舞色々有 一、祝儀の樽 庄之助 狸十郎左衛門

一、業平戀慕丸 又二郎、長崎物語 十郎左衛門 勘太郎、八郎兵衛 武兵衛 一、戀の道行 次左衛門 三左衛門 勘太郎

一、榮花のさかもり 惣役者 げい躍、 祝言

今日來役者の覺。―出來島小曝、又九郎かゝへ、京より來小童十三斗しつま、十一二小太郎、是も出來島と云
 由、しつまは小曝の跡にもせんとの心入のよし、さほどにはなし。末の狂言におちやめのと舞、小三郎聲拍子
 もよし。浪人川島勘太郎、同杉本六彌、(扇子二本) 市村庄之助、荒木武兵衛、坂東又二郎、岡田次右衛門、河
 廣傳兵衛、狸十郎左衛門、どろ水十郎兵衛、瀧本庄太夫、天津三左衛門、女房八郎兵衛、小喜喜左衛門、權兵
 衛、彌兵衛。はやし、さみせん 勘五郎、善兵衛、大つどみ 加兵衛、左兵衛其他二三人あり
 一、同十三年十二月十三日 堺町(竹之丞座?)へ兒小姓内助はしめ村山龍之丞見物遣

見物の狂言

一、式三番

一、おとり

一、いこんの人たかへ 咲之助 所三郎 幸左衛門

一、君か心見 市之丞 かん六

一、京わらべ 雪之助、萬能丸 五郎兵衛 武兵衛 彦九郎

一、不孝孝心 竹之丞 市十郎

一、しかたの鬼 庄之助 七左衛門

一、情の浮橋 松本小ざらし 萬之丞

萬能丸五郎兵衛を上手とて驚目よしかたる

一、延寶二年正月十七日 見物戌上刻始、予裏付上下

番 組 但一二三付 狂言ノ上中下記

第一篇 資料篇

100

一、兩國の百姓彌五九郎 一郎左衛門

一、貞女の難題皆之助 源太郎 平左衛門 その外 傳兵衛 あど三人

一、しかたの鬼庄之助 七左衛門

一、若宮法樂の舞皆之助 北條傳兵衛 大刀持彦九郎 下女 金太夫

一、京童五郎兵衛 彦九郎 六 彌 武兵衛 (五郎兵衛ハ六方 狐女童四色ニ成)

一、戀の薬やいと河島勘太郎 孫三郎 彌五九郎 山伏 中入

一、ことはの文掃之丞 彦九郎

一、戀の双六又二郎、勘太郎 六彌 其他出

一、京打參九下也 村山太郎(?) 孫三郎

一、樂のまくら五郎兵衛 庄之助 一、風呂やつて同三 彌五九郎 此外二三人

此狂言の末大躍、役者大形出、

祝言

寅后刻相濟

今晚來狂言師。川島勘太郎、出來島主膳、杉本六彌、田坂湊、市村庄之助、角入村山源太郎、男役者坂東又三郎、萬能丸、五郎兵衛、荒木武兵衛、坂東孫三郎、油勘六、大坂彦九郎、相模彌五九郎、阿房傳兵衛、(河廣カ) 竹村七郎左衛門、中村金太夫、龜傳十郎、鈴木平右衛門、どろ水十郎兵衛、はやし小鼓 佐兵衛(是ハ庄) 三味線吉之丞、同三郎兵衛、小うた 彌兵衛、久兵衛、權兵衛、大鼓九兵衛(是ハ九郎兵衛弟子 内藤修理殿扶持人) 地うたい 喜右衛門

一、延寶二年五月九日晚 奥慰ニ木挽町(山村座)役者呼寄之。戌中刻初、番組

一、六條鏝屋の沙汰半兵衛 八十郎 孫太郎 一、石川五右衛門物語内八十郎 其他 一、五右衛門二番目勝之丞 八十郎 兵衛

一、丸山あけ屋物語類之助 内記 喜右衛門 一、同二番目半兵衛 主膳 武兵衛 一、與五平物語又二勝之丞 主膳 半兵衛

一、日待おとり 役者大形出 勝之丞、又二郎哥念佛 類之助けいも有 祝言

今夜來役者の名、山村勝之丞、染川類之助、出來島主膳、山川内記、田島喜右衛門、與三兵衛、勘十郎、半左衛門、八彌、萬作、花岡八十郎、坂東又二郎、篠塚半兵衛、してゝん孫太郎、明石武兵衛、ツ、ミ半之丞、三右衛門、さみせん 三郎兵衛、此外二三人可有之

右之内類之助主膳ハ判形仕廻、亥下刻來、依之狂言三番過右兩人待内中入有 一、延寶二年五月十九日 吉辰ニ付具足岩井吉左衛門ニ云付、……操興行、伊勢大掾呼、已上刻見物初

番組

○三番三上り 和國美人哥論 六段

狂言 一、三面大黒 一、花月六方 一、文珠智恵くらべ 一、若夷

第一篇 資料篇

101

一、初雪の兒

一、なれ初花子

中入

一、たはかり井戸
曲のまり

1011

○上るり 文治の巻 末三段

棧敷の次第
法樂の舞
梶原戀慕

狂言 一、かはりきふね
浪人狸

一、ついでせん會我
れんぼきつね

祝言

申中刻ニ濟

今朝太夫五郎右衛門、永閑清五郎前へ名乗出一々爲情入と云聞

註 「馴染花子」

「たはかり井戸」の二つ共、ホストン美術館藏屏風伊勢大掾座の看板四ツ日ニあり、口繪参照

一、延寶二年七月二十一日

先達江府長崎よりも云來、長崎へ二番ノ船、船頭定官口上

大明崇禎皇帝三ノ太子ヲ西平王吳三桂取立、正月十六日即位年號周啓と改、國々へ回文を福州清南王モ大明方

へ成まんきんをかふり大明の衣裳を仕事

東寧國錦舍も起兵回文を遣其勢十一万ニテ船手よりも寄筈之よし、吳三桂勢ハ三十六万人有之と云々、此錦舍

ハ鄭成功國姓爺子也、平戸一官とて、星之助と云し、筑紫の者の弟かと云々

一、延寶二年八月十二日

今日飾西丁田村狂言中嶋清左衛門當番にて相越

一、おとり、さし合のゑん澤(カ)
留之丞

一、不慮の本望萬作
三彌

一、あしやの市林彌
辨五郎

中入、おとり

一、たはこや三代寄人梅之助、香之丞
まけの丞

一、みすの戀慕香之丞
まけの丞

一、仁義の武道伊藤久米之助
武兵衛

此林彌太夫いまだ幼少、十五六とも云、久米助、次には梅之助器量宜云云、古澤五郎左衛門などは狂言仕組、役者藝等も能と云、遠山八右衛門、永井惣衛門ら不宜と云、清左衛門は子共はよきかと云々、是は八朔より興行、役者の覺次にて記也

大坂九郎右衛門座太夫村川林彌、太夫本村川六郎左衛門、

若女澤村香之丞、伊藤久米之助、品川富之助、村井しけ之丞、浅香市之丞、中村左馬之介

若衆岸村梅之介、藤本千太郎、伊藤鶴之助、竹河左内、竹嶋しけや、玉嶋市之助

拍子藤川万作 狂言九重藤四郎、松崎孫太郎、浅田喜平次、上村九郎三郎

立役山本宇兵衛、三澤庄右衛門、岡田半兵衛、藤井庄五左衛門、奥田太郎兵衛、岸田三郎左衛門、伴八郎兵衛

白井九郎兵衛

だらけ三澤又七、同八嶋辨五郎、か、方竹島勘四郎、同櫻井市三郎

おや方片山金幸平、三嶋市郎左衛門、子役權齋、小うた仁兵衛、五郎兵衛

せつきやう源十郎、拍子八右衛門、長右衛門、與右衛門、權右衛門、三味線五左衛門

狂言も毎日一番つゝかはる、江戸京大坂にて仕たるきやうげんどもなり

一、延寶三年五月十三日

見物事云付、山村長太夫、井、今井久米助、山本勝之丞、松本小源次、松村源五、此

外やらう二三人。小舞庄左衛門、篠塚半兵衛、相模彌五九郎、しててん孫太郎、鳴海長十郎、万作、二郎右

衛門、平九郎、小歌九兵衛、此外立役者二三人。はやし四五人、狂言師雨故未后刻來、申上刻始、大書院幸敷

舞台也。簾如例、番組

一、誕生祝 鞍おとり大勢出
源五、六方

一、あい染川 半兵衛、孫太郎
小源次、此外多
萬作

一、與五平浮世物かたり 勝之丞、半兵衛
萬作、彌五九郎
源五

一、つきぬ契り 勝之丞
孫太郎
萬作

一、楠兵捕 彌五九郎
長十郎
拍子舞 小舞庄左衛門舞

一、惣おとり 但前上野山おとり
其後惣おとり祝言 子后刻濟

一、延寶三年六月十二日 今日堺町ニテ爲見物……瀧井山三郎座見て來、山本勘太郎と云者狂言よくするよし

一、延寶三年九月二十四日夜 見物狂言嘉例也、戌刻始、兩所見、表奥見物

一、褒美の對者 小舞庄左衛門
三之丞
平九郎 山源三郎五

一、戀のくすりやいと 彌五九郎
三之丞
源五

一、道成寺 二番續ヲ
一番に 久米助、小源次、長十郎、不殘出
半之丞、勝之丞、小源次

一、かうき殿 久米助
長十郎 長十郎夫

一、枕物くるい 久米助
彌五九郎

一、目連記、藤見遊覽 長太夫、源五
小舞庄左衛門

一、奴子つるきのさんたん 平右衛門
辨之助

一、玉つきの鼓 小源次
彌五九郎 中入

一、名しらず座頭川渡の狂言 辨之介
勘六

一、立花中たち 鈴木平右衛門
かもん

役者共來覺、方々の座より集

山村長太夫、松本小源次、松村源五、宮崎傳吉、澤井弁之介、山本勝之丞、今村久米助、音羽千之介、藤村掃部、淺田金作、森岡山三郎、右子共分なり

立役者 小舞庄左衛門、鈴木平右衛門、澤田八郎右衛門、齋藤十右衛門、長嶋三之丞、外家相模彌五九郎、油勘六、してん孫太郎、女房八兵衛、万作、此外、雲井平九郎、竹村七郎右衛門、小哥九兵衛、半右衛門、音羽二付、小哥一人役者數五十人程也

一、延寶三年十一月二十六日 夜に入、兩所へ馳走、見物事有、戌后刻始之、役者來覺

一、盡ぬ縁掃 勘六 部

一、北國敦賀沙汰 傳吉
孫太郎

一、さんせう太夫 兄弟戀慕の情
勝之丞
源五 彌五九郎

一、小宰相局落し文 千之介
辨之介

一、大友のまとり 庄左衛門
小源次

一、惣おとり 祝言
舞長太夫 千秋樂

△市村竹之丞座 上村掃部、市村庄之助、同親左兵衛、達磨所三郎、梅津郷右衛門、小哥久兵衛、三味線權左衛門、權九郎

△勘三郎座 玉井權八、仙台文五郎、梅田小太夫、齋藤十右衛門、荒井兵右衛門、雲井平九郎、小哥九兵衛、下やこ二郎右衛門、女房八郎兵衛、尺八笛市右衛門、幸左衛門

番組

一、うかれ代官 代官勘六 五人組 所三郎 小あるき 文五郎 幸左衛門 庄や幸左衛門 権八 一、さんや馬方 さる若 庄之介

一、瓜罪人 かもん、八郎兵衛、二郎右衛門 所三郎、權八 一、戀の文あらそひ 波之介、小太夫 勘六、幸左エ門

一、檢使問答 角人 吉十郎、平九郎、十右衛門 權八、文五郎、幸左衛門 吉十郎、小うた論 一、劍茶屋 波之介、金之丞 八、かん六 中入

一、源氏女武者 ともへ掃部、下女勘六 和田所三郎、幸左衛門、權八 一、さんやぬめり 吉十郎、波之介 勘六、平九郎、十右衛門

祝儀の狂言 丹波七文五郎、同女勘六 役者不殘 大おとり 祝言 丑后刻相濟

一、延寶三年十二月十八日 娘縁組仰付候祝儀、朝奥ニテ振舞有

操、薩摩太夫、伊勢五郎右衛門。永閑、清五郎、小平太、二郎三郎、右四人前へ一人つゝ出名乗、辰中刻始縁座敷ニテ、大澤右近殿(二段過まで)延壽院(中二段ほど)、喜多見宗幽老(二段前より末まで)見物

操 番組 三番三

○勇力板額女 六段

初段 語永閑 狂言 一、三人長者 米ま 九兵衛 ちや平 太次兵衛 あど 長十郎 一、鷹の硯 九兵衛 長十郎 五郎兵衛 一、うき世猿若 二郎三郎 太次兵衛 勘四郎

二段 清五郎語 一、なす五郎 二郎三郎 九兵衛 太次兵衛

三段 小平太語 一、通圓杓の曲 二郎三郎 二郎三郎 玉 一、餅酒論 九兵衛 喜兵衛 十右衛門

四段 永閑 一、ふせやの名残 二郎三郎 太次兵衛 勘四郎、長十郎 一、初雪見 九兵衛 長十郎 一、櫻川おとり 中入

五段 清五郎 一、替りきふね 二郎三郎、八兵衛 太次兵衛、長十郎 一、まとうなほうらん 二郎三郎、長十郎 左兵衛、九兵衛 一、花車躍

六段 永閑 一、わかゑびす 長十郎 留兵衛 勘四郎

此上瑠璃御見物にて、幾久ニ殊御大悦

○後の上るり 安宅 二段

初段 小平太語、狂言 一、れんぼ狐 長十郎、かけゆ 勘四郎、八兵衛 一、馴染花子 二郎三郎、勘四郎 太次兵衛、長十郎

二段 清五郎語之 繪苜に鷹、大おどりあり、祝言

註 勇力板額女及び馴染花子、口繪のボストン美術館寫眞参照

一、延寶四年正月十七日 爲慰能樂才覺ニテ狂言師十一人、内瀧川内藏助、増之丞十一二の子、金五九歳、小源、立役者甚五左衛門、道外、又四郎、吉右衛門、女方勘三郎方源三郎、小哥長右衛門、小鼓笛采女、例ノ通敷舞台ニテ、奥も見物

上るり語、近江太夫語齋、三味線引同道、小哥一人三味線一人

○雷問答 過て同道小哥うたいニ一つ宛爲語、其間ニ狂言戌上刻始

一、加賀越前百性 一、節分福神祭 一、こんくはい 一、三屋ぬめり 一、關寺小町 一、都見事

一、出世の浪人 一、江戸六方 一、おぐり 中入 子の刻地震少し

初の上るり二段殘其上に○仲光先陣あらそひの内

○近江八景 ○大塔宮道行

所望聞之狂言 一、葛の細道 一、鳥さし 一、猿若 一、伊勢參、祝言惣役者出躍、千秋樂有り

内藏之助京郎也大形の器量、金五、小源能拍子踏、狂言丑中刻相濟

一、延寶四年二月二十二日 辰中刻過出、……其より(松平)上野殿へ操見物に行、勝手通内證見物所圍の内へ

通。操、初段の内三ヶ一濟所へ行、六段見物。

太夫丹波少掾正信、舞台庭假小屋、樂屋後へ四間、舞台五間有り。三段過て、ふち高に餅出、玉屋と云菓子屋の也、吸物酒茶如例、

番 組

○神武天皇 狂言 茂にてい馬、しのび妻、やつこ祝言、并せうかのおとり、上の山大おとり 三段過、狂言 相撲十番斗有、此相撲跡操興行

也、 四段目 茂助追鳥狩 おこけぼうか 五段 釋迦だいは佛法論 かしまおどり

六段 過予ハ退出、

跡介け ○頼光鷲尾山合戦あり

一、同三月七日 操太夫肥前所にて、相撲の狂言仕よし聞、青山花林爲見之、伊勢丹波見くらべ候處、肥前座の人形の動能有之、上瑠璃は神田明神の起記祭、芝居中からくりにしてまはすよし

一、同三月十日壬辰 天晴南風吹、東園殿招請操興行、伊勢大掾、依之靈台院殿御出、兼テ御對面有度旨双方之仰ニ付テ也 (註 東園權大納言基賢の女、直矩の養女となりて、京極甲斐守高任に嫁す)

操二通の内、一通ハ辰后刻始、此時ハ靈台院殿の外、他所の客ハ無之、奥上中之女中見物、中居以下ハ簾の中せはきニ付不爲見、予は裏付上下着

○初之操上瑠璃 荒川命問答 六段

狂言 一、吉長たはかり
清玄らうせき

一、吉長湯治
櫻姫しゆ行

一、清玄二世のくるしみ

一、吉原春こま
四季亂曲

一、情之母衣 祭のまな
びあり

午中刻相濟、 中入

予侍共見物 歩行以下は後の上るりよりは
見せず客衆馳走のためなり

○上るり始 相撲の大寄

狂言 一、若ふひす
枕返し

一、文珠智恵くらべ
秋嶋おとり

一、ふせや
観音利益

一、花月六法
さくら川おとり

一、餅酒の論
とんよおとり

六段 すまひ

祝言

戌中刻少前相濟

一、同四月十二日 堺町竹之丞座へ樋口甚右衛門等見合ニ遣之

一、延寶四年五月五日 夜見物言付、尤侍共見物

戌上刻始之、曙ニ相濟

一、万歳 伽羅小半兵衛
杉山勘右衛門 木挽丁子共二十七人おとり

一、女郎花宴 菊之助
吉十郎
大勢出

一、おとり 堺丁子共八人

一、夷問答 勝之丞
正木市之丞、油勘六

一、ぬめり参宮 坊主小半兵衛
市十郎
新三郎

一、氣儘六方 波之助 中入

一、女猿若 (但猿若にてはなく、女物狂、後ニ
開戀の狂風、狂言戀風と云ニ似る) 今村久米助
村山九郎二郎

一、鍋つるむこ 勘 六
孫太郎 渡むこ兼
勝之丞

一、源氏回文 吉十郎する筈の處、夜明ニ付止

一、戀の出世 小兵衛夜番に成、市十郎、前川久米助
万彌 所三郎九郎二郎出大おとり

但るあいおとりの様成木挽町のものゝ躍、後に大坂おとりあり 祝言
今晚來役者覺

△竹之丞座 今村久米助、小倉市十郎、玉澤勘之丞、中島初之丞、前川久米助、藤田皆之丞。

立役者、坊主小半兵衛、村山九郎二郎、達磨所三郎、小哥久兵衛、同五郎兵衛、三味線一人

△木挽町山村長太夫座

山本勝之丞、野川吉十郎、正木市十郎、國松右京、瀧山菊之助、松村源五、森岡金彌、同山三郎、花澤金之丞。

立役者、齋藤十右衛門、松山勘右衛門、油勘六、長島磯右衛門、笠屋宇右衛門、とま二郎右衛門、荒井兵左衛門、しててん孫太郎、千菊彦太郎、伽羅小半兵衛

女方 万作、同女房 八郎兵衛、坊主 吉六、はやし、三味線 權右衛門、同市三郎、大笛 三右衛門、小半之丞、小歌 九兵衛、半右衛門、木挽町は九兵衛、堺丁は久兵衛才覺

一、延寶五年五月二十六日 靈台院殿江參觀之御祝旁、兩所さて姫御招請、已上刻ニ大形一同ニ行、雜煮御吸物にてお祝、午后刻見物初、薪屋二郎兵衛(前島二郎兵衛)役者かりもよほし來、次郎兵衛、同子拍子二郎吉九才、弟子拍子傳之助十一二、女方小三郎十三四、若衆政之助、小歌若衆松之丞、若女初彌、若衆多門、女方源太郎、中村金太夫、どうけ杵屋十右衛門、同 田宮清九郎、同 又四郎、立役者三左衛門、立五郎二郎、立甚右衛門、小うた庄兵衛、吉三郎、三線作右衛門、小鼓八兵衛、太鼓八左衛門

番組

- 一、若宮物語二郎吉 兩童、靜法樂之舞之様子永閑ぶしにて、しかた拍子舞、役者大勢出、松竹おとりあり、
- 一、江戸めぐり松之丞 又四郎 三左衛門
- 一、いせ參二郎吉 傳之助
- 一、ぬめり二郎兵衛 清九郎 中入
- 一、龍女万三將軍 清九郎 二郎兵衛、三左衛門 小三郎
- 一、花見座頭初 十右衛門 金五郎二郎 三左衛門 彌
- 一、花みつ稻荷証宣 二 郎吉
- 一、出世ノ浪人大勢出 十右衛門も出
- 一、龍宮物語海士初 山三郎 彌 十右衛門 大臣 二郎兵衛 金太夫

一、あいそめ川もりすみ 二郎兵衛 神おろし有 金太夫 源太郎 傳之助 清九郎 三左衛門

一、大おとり しゆらとたゝかいの様子、二郎兵衛 とんよおとり、子共も出。其前に二郎兵衛三味線にて小三郎傳之助ぬめり、立波ふし、しやかのおどり、此時子共五人。後大おとり大勢。祝言

一、延寶五年八月十六日 奥慰ニ前島二郎兵衛(薪屋と)呼。但嶋野良順方より二郎兵衛子二郎吉其相手役者云遣處、二郎兵衛も來度とて相越。已中刻ニ狂言始、酉中刻に相濟。奥三の間にて也、廊下を樂屋にしつらふ。

番組

- 一、ゑほうまつり二郎吉 九右衛門 傳之助、清九郎
- 一、しんぼち太鼓二郎吉 清九郎 九右衛門
- 一、渡しむこ二郎兵衛 清九郎 つゝみ打也 小うた庄兵衛 八兵衛
- 一、おはらき二郎兵衛 小三郎 九右衛門、清九郎
- 一、みやこおち二郎吉 小三郎 傳之助 其外
- 一、竹生嶋まふで小三郎 九右衛門 傳之助、清九郎
- 一、業平餅二郎兵衛 清九郎
- 一、猿若二郎吉 傳之助 中入
- 一、しかたはなし九右衛門
- 一、風呂やつこ不殘 とんよおとり有 ぬめり有

今夜戌中刻奥さて姫表へ出、狂言見物

一、戀のよいさめ 清九郎、小源次、二右衛門、政之丞、女道と兼道さしちがへに出、狂言おもしろく出来

一、武邊の忠節 伊勢三郎、二右衛門、金太夫、よしつね、勝之丞、清九郎、三右衛門

一、似せ坊主 重右衛門、政之丞、其他

一、谷中やつこ 二右衛門

一、智略山ふし 清九郎、二右衛門、政之丞、其外

一、太平おとり 清九郎、長右衛門、つみ打八兵衛、きやり色々

千秋樂を誦亥中刻濟

一、延寶五年十二月二十四日 馳走に狂言あり小うた九兵衛才覺して同道簾屏風にて見物

一、祝遊 奥惣兵衛、三郎兵衛、久兵衛、七段の笑ものまね

一、ぬめり 左五右衛門、野中數馬、どうけ、鷹平拍子舞

一、ぬゑのものまね 久兵衛

一、ぬけまいり 左五右衛門、三郎兵衛、久兵衛

一、なすの與へ しかた有

一、出世の浪人 數馬、左五右衛門、奥惣兵衛

一、祝言

小うた九兵衛うたふ、戌中刻狂言濟

一、延寶五年閏十二月二日 おさて婚禮前之振舞、馳走に狂言師呼、小うた小兵衛才覺、午上刻始

番 組

一、悦の宴 篠塚半兵衛、鳴海長十郎、女方二人若衆方三人にて、かふしおとる

一、篠塚けん見物語 菊川勘太郎、小舞又太郎、關東孫三郎、女房二郎三郎

一、ねやの戸 但おとり也、瀧井村之丞

一、智りやくかたき打 野中數馬、佐々木を舞、左五右衛門、鷹平出

一、思の狂女 森川問三郎、津小太夫、してん孫太夫、大勢出

一、さんやかよひ 村之丞

一、かはちかよひ 山本勝之丞、しのつか半兵衛、三郎兵衛

一、おもわくの命こひ 野川善太郎、岡田次右衛門、西尾初や、ぬりかさおどり、權之佐

一、花玉のちやわん 米澤久三郎、半兵衛、問三郎、女方も出、達磨所三郎

一、情の舟人 松本小源次、半兵衛、又六、吉之助、次郎三郎、二右衛門、孫三郎

一、ぼやのゝすゝき 孫三郎、小太夫、瀧彌、又六、女方

一、よねまんぢう 竹村七左衛門、久三郎、二右衛門、藤田所三郎、問三郎、二右衛門、小源次

一、尺八のゑん 又太郎、能樂又六

一、さんやかよひ おとり子、共五六人

一、れんぼの下紐 勝之丞、糸よりする、半兵衛、二郎三郎

一、大おとり 祝言

今日の狂言惣て出来面白、久三郎殊出来、役者大勢来、小どうけ團之助も来、戌后刻濟
一、延寶六年正月六日 今晚日待ニ付……見物事、亥上刻初、其前に藤田皆之助出来嶋小曝樂屋より呼出……お
いく宵の内見物

狂言 番組

一、喜の日待 半兵衛 小源次 二郎三郎 松之助 其外出

一、宇治物語 松之助 桑右衛門 其外

一、うかれ参宮 猿若山三郎 竹村七左衛門

一、智略大名 久三郎 七左衛門 又太郎 其外

一、さし物屋 彦左衛門 女方其外

一、雪見の宴 皆之助 阿之丞 此狂言皆之助 曲つ、み有 其外大勢

一、文たがい 出来嶋小曝 平八 喜左衛門 大坂彦九郎 阿之丞

一、戀のろうせき 鎌田團右衛門 其外大勢

一、神前のりせう 勝之丞 孫三郎 半兵衛 中入

一、きふね 小うたはかり舞狂言はなし 小さらし 間三郎

一、かたみの人形 皆之助 幸左衛門

一、きみか花車 勘太郎 其外大勢

一、なさけの關守 間三郎 又太郎 久太郎

一、勝之丞の梅か妻、曲錢小鼓、大躍、祝言

丑中刻過而相濟

△出来嶋小曝妹おさて召使振下女かちといふて有之に付茶の間へ召寄見之親は八丁堀に干物賣買して召仕有名
は太左衛門と云、然處下人買に惡敷身代裏子六人有之故方々へ遣、只今小曝兄太左衛門とて町人して有之、
母一人有ヲ小さらしと兄として養之と云云

一、延寶六年正月二十三日 松本丹後守殿へ元千代殿招請ニ付予も被招て行
馳走ニ操興行、太夫 土佐少掾

○上り 八 島

初段 狂言 初春狸々 付おとり 戀の關守

二段 吉原万歳 大坂新町ぬめりたぬき

三段 しのた女 けいくわあじやり

四段 春の谷の湯 身延山入

五段 小袖のそらたき(狂言の内樂屋へ内證言遣) 相撲、太平躍

祝言。

中入ハ三段過、狂言けいくわあじやりの後有、茶ハ操見物の内に出、但中入過て出時、からくり座中にて、
有人形出て、幕之内よりからくりの様子彌惣人形にいはする。大木梅の作物に二尺斗也、天人作圖竹ヲ持
出、平調盤涉黄鐘一越調子ヲ吹、一越の時鳳凰様成鳥を作置聲を發時計からくりなり。……中入以後後段吸
物出。客衆肩衣取、但若き衆は不取

上るり六段有之筈之處、所替之衆有之ニ付、其方へ見廻度故内證云遣、五段ニメ狂言も、小袖のそらたき、ゆふきの何かし残り……。

一、延寶六年二月十三日 堺町へ珍敷爲見物出と聞、爲見ニ遣之も、んくわと云獸、鼠の顔ことくニて、尾長狸に似たり、こはんと云物はよりちいさく、同形也。さいてうと云白鷺のことく成形の鳥、毛は黒メ也、麝香猫も爲見候よし、藤巻嘉眞所ニて作物の鶴にをひるはせ、方能丸五郎兵衛法躰メ一圓と云人形の相手ニ成基を打、かの人形も人のことくせきするよし、洞藏とて聲のかはりたる男目の一有女をも見せ物にするよし

二、同二月十七日 堺町へ見せ物實正爲見届ニ村山新之丞遣之

一、延寶六年二月十八日 寅下刻宿出、雅樂頭殿へ行……操始左右聞表へ出、簾の内外見分言付、辰中刻ニあやつり初ル、太夫ハ伊勢少掾也。
上瑠璃小平太、清五郎語、永閑ハ煩不來。

番 組

○兩 太 子 御 國 論 六 段

- 狂言 一、懷胎夢想開
- 一、長持おとこ
- 一、還俗之壽
- 一、太平樂おとり
- 一、戀の跡追
- 一、むら上やつこ
- 一、延命加持
- 一、しのびのうはさ
- 一、たばかり井戸

一番の間に二番三番程有、延命加持より村上やつこまで六番、大塔宮 六番繼

一、延寶六年三月九日 己酉天曇時々雨降、京極甲州裡方已上刻被來、馳走に見物、鶴屋播磨と万能丸一圓一所に成、當正月より堺町にて爲見物仕ヲ呼、表にて簾懸如例、未上刻ニ始、申中刻ニ相濟。 番附

註 播磨と万能丸の看板が「聲曲類纂」に見ゆ

一、福神三番三 五びす 小源太 福祿壽 大吉

何も十斗より十二三歳の子共頭に其面をかふり、式三番をする。

一圓へんてつを着テ、初に福人の宿亭小舞、此藤兵衛大吉一圓の子。

一、鐘引 付時の鐘からくり 左門 吉十郎 丹三郎 鐘のゆいたて杯舞

一、江戸めくり、若衆方付喜藏乗物をかくからくりたはこをのむ。

一、碁打、一圓木濟と云人形からくりにて碁を打せきをする、井童の物まね、小用からくり

一、羽衣 天人三之丞 吉十郎 丹三郎 藤兵衛 天人四人にておとり、何も頭に顔、井付髪をかふる

一、しかたの與一 吉十郎、藤兵衛、小源太 此小源太十斗 播磨の養子の由 一、けいばのからくり

一、河内かよひ 井筒始からくり、後に大吉かはる、舞、其他出、

一、兼行法師つれ／＼の文字からくり

一、梵天國 王一圓くわんれん小源太、鳳凰からくり、綱を張、小源太くじやく舞、
 延寶六年三月二十六日 智恩院法親王 私宅茶莊江巳刻御光臨御慰ニ前島次郎兵衛、弟子傳之助、小うた庄
 兵衛、同次郎吉、どうけ清九郎、三味線忠六、小鼓八兵衛呼、藤の茶屋にて狂言云付

一、うかれ六方
 一、物まね
 一、宗論
 一、かつこ
 御所望にて、一、しんぼち太鼓 一、物まねぬめり 一、とんよおとり 一、太平躍

一、延寶六年四月十三日 甲州内方招に付來儀申上刻なり、今晚越前屋吉左衛門春日屋善次郎に言付、町の躍呼
 寄、内々は此月末にと雖爲約束能次而に付、俄に興行及暮來、書院に簾懸女中見物二躍有、人數は躍子塚屋又兵
 衛同七郎兵衛市川六郎兵衛袋屋半兵衛花屋喜左衛門虎や又兵衛天屋孫次郎、石川六兵衛内七兵衛九兵衛此二人
 女形、同内小坊主三加こくし長次郎、池宮五郎右衛門手品屋市左衛門、兼て出入の菓子屋太兵衛次男太郎二
 郎、尤越前屋吉左衛門吉兵衛も踊おんど小左衛門三線菅野都小鼓一丁地謡六七人有之、娘もこゝろよく見物。
 一、延寶六年九月十四日 室津狂言盡觀進相撲様子中嶋彌二右衛門方より注進
 相撲は……(略之)……

一、延寶六年九月十五日 慰ニ居間の庭にて舟手の者共招て相撲爲操見之午下刻始未下刻相濟
 狂言は寄合者大形大坂九郎右衛座より來座元松本權三郎太夫花井作彌松本市之丞若女方岩井花之丞川上葛之丞
 竹嶋千太郎若衆方富岡連之介外川早之丞など云道外猪熊左ぶ八十嶋藤右衛門惣役者三四十人有夜晝二芝居づゝ
 入も有之市へはやらすと云

相撲……(略之)……

宮内に見物言付癡間せうじの内に簾を懸せうじを破其内より見之
 一、延寶六年十月十七日 天快晴 千手觀世音拜禮、今日八代屋敷ニテ奏者番下川外記大田太左衛門等云合予を
 慰振舞、依之飾西逢坂と云所ニ比中有之寄合芝居之狂言師中島彌次右衛門遣呼寄之爲見、予は城之寄合ニ付、
 何もへ對面、其より毘沙門へ參詣直ニ……女乗物ニて行、宮内も供、惣女中ハ先へ遣、已上刻狂言はしまる

番 組

一、三番三 山本吉三郎

一、ちり、はまおとり
 女太夫 松本市之丞 若衆 前日ニ有太夫
 同 川上葛之丞 戸川連之丞
 同 竹嶋千太郎 伊藤金作

一、飛梅老松 大名 連之丞 下人 伊右衛門 菊川初右衛門 シテ 金作 神子 吉三郎 主 八十嶋藤右衛門

一、露のあやまり 若衆 金作 女 葛之丞 ねんしや 松井半平 下女 佐山二郎三郎 とうけ 八十嶋藤右衛門

一、夕霧名残の正月 夕霧 ふしや伊左衛門 千太郎 松本利右衛門 南都伊右衛門 山本二郎右衛門 門番 くつわの下人 二人 吉三郎 註 此年二月初日大阪荒木 與次兵衛座にて坂田藤十郎が伊 左衛門に扮して當つた名狂言

一、吹かゆる戀風 座頭 女 さくや 伊右衛門 女 方 葛之丞 若衆 金作 立役 半平 一、戀鸞の物語 荒尾新五右衛門 連之丞、初右衛門 藤右衛門

第一篇 資料 篇

一、宇治の遊覽 松本市之丞 あふきの曲 惣役者

料理出、上中下振舞有、狂言申中刻始、

一、はにふの小屋 おやち 松本利右衛門、下人 初右衛門、六郎右衛門
小性金作、おやち 千太郎、初右の弟 連之丞 訴人ス
女若衆ヲ預百性 武右衛門

一、こんからおとり 子共大勢出

一、にくからぬらうせき 咲やこま物や 新五右衛門 おやち 山本久兵衛
下女 二郎三郎 下屋敷守坊主 武右衛門

一、戀のやく拂 初右衛門女房 千太郎 金作はる、女 葛の丞
若衆 金作 おとこ 初右衛門
初右衛門 半

一、津之國布引瀧 市之丞

一、二端、さらしの曲 咲彌、伊右衛門
利右衛門
其外出

葛西源六 大おとり

子共不殘、立役大方出

祝言

役者は太夫松本市之丞、花井咲彌、次に女竹島千太郎、川上葛之丞、若衆戸川連之丞、伊藤金作、何も純子とも、市之丞藝に驚目

立役 松本利右衛門、是は座上役者のはいのを荒尾新五右衛門、六方方にても役者の指圖狂言ニ口出、次ニ菊川初右衛門(勘三郎所にて、野郎菊川初) 吉田六郎右衛門、南部伊右衛門、山村座ニ有之松井半平、女方さま二郎三郎、道外八十島藤右衛門、大かた也、はやし小うた三島武右衛門、小山三右衛門、山本吉郎右衛門、同九平次、大太鼓 同久兵衛、皆川喜平治。

戊上刻後退出テ八代ヲ立、今朝ノ通り歸城

一、延寶七年三月二日 丁酉天曇式、日寄合有、高砂之市昨日より狂言芝居大坂より來、座本備前屋久兵衛、役者四十餘人有、操、上野少と云者來。

高砂市狂言芝居、三月朔日ヨリ初、役者鑑盤之寫

大坂新芝居 太夫吉田友之丞 是ハま 座本備前屋久兵衛
だ不來

女方 野村左門 廿二三、津川政之丞 同、神岡小太夫 十五六、菊川龜之介 十七、富岡春之介 十二、同花本吉

十郎 十四五、野川吉彌 十四五

若衆方 香山万太夫 器量、藝有、若衆藤田其助 十三四、富岡勘太郎 同、神岡勝之丞 同、瀧川品之助 十六七、玉川

新十郎 十四五、川島三四郎 十四五、吉田淺之丞、淺香長太郎、山下小勘、池田市之丞、

立役 柳十五右衛門、梅津小右衛門、中川權兵衛、尾野八郎右衛門、成瀬半左衛門、山本万右衛門、松本武右

衛門、同三右衛門、村澤平右衛門、吉川市郎右衛門、村田傳三郎、中國諸平

親方 辻田留兵衛、高橋平右衛門、主役花井左門、加川吉左衛門、はやし青木八三郎、同加藤三右衛門、北島

長右衛門、河口彌平太、岩見善兵衛、野川五右衛門、金田八右衛門、吉田平兵衛、拍子梅本半之丞、道外富

田平太郎、秋田喜四郎、此内ニ小うた無之定てはやし内たるべし

一、同四月二十五日 操の舞台筋蘆ヲ懸見物所拵

一、延寶七年四月二十六日 爲馳走操興行、元千代殿甲州(京極甲 斐守)も辰中刻御出、元千代殿ハ奥へ御通、

(註 その妹ハ内藤豊前守の室、
されば奥へも通れる也)

已上刻操始 太夫薩摩 伊勢

番 付

○三番三上るり 柿本人丸

初段 狂言 大福帳閉祝

二段 庚申妻

三段 吉原式三番
風流おとり

四段 山科一心敵討

五段 徳利狂人
井名酒おとり

六段 中入

後の上るり未ノ上刻始、田村宇治河合戦と書付ニ有し故、云付候へ共、初り候て聞見は去春見る兩太子御
國論の上るり也。勝手に人ヲ遣、樂屋へよの上るりニ可仕候と云遣候得共、俄ニハ難成ニ付、其儘云付、
思の外上るり出来面白、番組

○田村宇治合戦

初段 永閑、狂言 莊子百年の榮花

二段 清五郎、狂言 延命の狐狩

三段 永閑、狂言 舟岡遊山

四段 小平太 忍心の噂
伊勢おとり
亂拍子 とんよおとり

五段 同人 還俗の祝
付 太平おとり
籠ぬけ

六段 清五郎 祝言

○人 丸

初段 小平太 二段 永閑 三段 田うへ 同人 四段 清五郎 五段 小平太 六段 清五郎

上るり初前ニ朝五郎右衛門、小平太、永閑、清五郎、二郎三郎一人つゝ出目見

一、延寶七年五月六日 予参観自分初て参府祝儀京極甲州へ兩所招請……申中刻過て籠技始表へ出……座元伊賀
屋三郎左衛門、太夫龍王蓮之丞、ワキ龍馬、琴之助、琴之助は病後灸治よし斷云て不出、依之蓮之丞一人にて
二人の代相勤よし

藝次第一番

- 一、たきをり 一、そりをき 一、またごし 一、わるかとび 一、中かへり 一、籠ぬけ 二尺五寸に
八尺
 - 二番 一、つるべわ 一、二つ輪 一、ほらおち 一、玉輪 一、かこみわ 一、いかうぬけもとり 一、月之輪
 - 三番 一、しよく台とび 一、つりわとび 一、衣かう中ぬけ 一、尺輪ぬけ
 - 四番 一、そりはし 付らんかんの曲 一から笠輪 一、二めんろうそくまたごし 一、ごばん五面ノ上
 - 五番 一、ロ一尺に長五尺のをごけぬけ
- 戊上刻相濟、但休間子共五六人中かへり、おとり

一、延寶七年六月三日 奥お幾慰ニ表へ呼、小書院にてうんとんかけ合料理振舞、おとりを云付、小うた九兵衛才覺、木挽町邊子共十之丞、千彌、久米丞、藤之介、松之介、初之介、忠之介、庄之介、小三郎、權作何れも前髪有り

一、かゝふし 一、たいこ 一、とんよ 一、笠 一、太平樂 一、花おとり、祝言、小うた山村座半左衛門、小鼓同座源内、笛勘彌座清左衛門、此内三十人十一二ノ子共勝之丞かゝへなり。小舞拍子舞、太平樂、拍子ありといへ共、面白からず、何も笑、九兵衛娘六七のつれ來、おいくより手鞠一給之、申中刻始酉后刻相濟みね、おんと三味線ろんしづ、三味線みんおとり次第大團扇中西彌惣兵衛笠鉾木村半兵衛……

一、延寶七年八月十一日 伊勢講幸之時節……晚馳走ニ町躍來、是ハ井筒屋平兵衛才覺、躍の師源八召連來、兼て小澤新平見立之也、踊子太郎七、三郎助、辰之助、七三郎、喜三郎、長十郎、市十郎、六人ハ振袖也、源八、半兵衛、孫十郎、此三人ハ男、申后刻ニ始、をんと小左衛門與十郎、笛八三郎、小鼓喜右衛門、太鼓小兵衛、三線園部左兵衛、地長右衛門……番付

一、千とせの松 地白帷子ニ袖もみ黒そぎつき くどき 拍子、こしこへ 拍子二くとき、露の玉 拍子二つ くとき、しちのや二つ、くとき、あふみ二くとき、此あふみ拍子あいの手有、三番三鈴の段 笛入
一、出はさんやかよい あみかさ、但ゆかたそめ出てぬく 上ノ山 拍子二くとき、能登 拍子二つくとき、唐人おとり 拍子籠拔はやし有

龍田川邊 拍子くとき、此間に新屋敷へ、おさて同道、花火有

一、田子 ほうかぶりゆかた染 くとき、さんやよね衆 拍子一、くとき、金澤 同二つくとき、伊豆小山 同二くとき、はた織拍子一、付獅子おとり、笛 所望にて

一、出は、あみかさ 戀は山のでくとき、小車 拍子二同、あたこあらし 同二、花盡、酒くとき 興作、にんきやうしきり、かね太鼓 祝言 千秋樂

一、延寶七年八月十七日 ……上野より直ニ鳥越へ參、……午中刻川一丸ニ乗、金龍山迄出、靈台院殿奥子も同舟遊舟數多躍山一丸 鶴太郎新平乗、是ハ井筒屋平兵衛才覺、源八取持の舟踊子六七人、役者一通有、駒形堂の前ニテ三踊有、大形先日此方へ來躍の通、又大東國と云大舟踊子十五六人 振袖もみ、二澤押 役者大勢一踊見物同邊にて也、是は淺草並木組と云おとり、相馬出羽殿屋敷前にておとり歸を此方屋敷の屋守才覺馳走するなり、……屋敷前に舟懸置此舟熊一丸大舟也、則座敷へ上り見物及暮てうちん燈、三番三唐人おとり籠拔の拍子もする無類の上手なり、其上にて籠拔中かへり有町人の召仕八に成有齋と云也……

一、延寶七年八月二十八日 狂言戌刻初、舞台如例、取持は平野屋久兵衛也、明石武兵衛ニ付テ才覺

番 付
一、泉水石引おとり 女方松本鶴之丞 同 出來島靱負 同 松本六三郎 若衆方 出來島主水、杉山政之助
一、吉原檀林 同方成有 松本小曝 但夕霧相手誼人 左近九郎二郎、殿荒木武兵衛、小さらし 左近左兵衛、武兵衛、家老 明石武兵衛、出入町人 半平、外主役二人

- 一、縁のかためくさ 親方明石武兵衛 娘にゆゆゑ、鶴之丞、小性に山本十二郎、主水 同侍ニ、しててん孫太郎、うはニ 左近左兵衛 同 七三郎
- 一、情の狂亂 松本名左衛門 若小性 大澤李右衛門 若衆ニ 政之助、名左衛門女房 六三郎 うは 佐兵衛
- 一、千手しけひら 千手に 出来島吉彌 重ひらに 主 水 かの、助ニ 李右衛門 同妻 六三郎 千手うは 左兵衛 孫太郎、形見の段かたる、琴名左衛門引
- 一、松風村雨 松風 小さらし 行平ニ 十二郎 同下人ニ 荒木武兵衛、九郎二郎 拍子舞有、主水吉彌六三郎ゆきへ女方にて出
- 中入 酒宴の興有、出来島吉彌器量能故何も取持、盃指、其外之子共にも二三人盃の有、小さらしを呼盃遣
- 一、戀の猿引 猿引名左衛門 猿 同人子、兵藏、政之助、六三郎、七三郎、明石武兵衛も出
- 一、横笛 小さらし、左兵衛 樋口 荒木武兵衛 坊主 孫太郎、外に立役者二三人
- 一、縁の呉服屋 女ゆきへ 親方明石武兵衛、舞 荒木武兵衛、左近九郎二郎 下女方 七三郎
- 一、おとし文の縁 女吉彌 九郎二郎 明石武兵衛
- 一、榮花遊、大おとり、小曝 をんとついでふし、市のやいせおとり、千秋樂
- 今夜來役者數 松本小曝、杉山政之助、出来島靱負、同主水、同吉彌、松本六三郎、角前髪 山本十二郎、左近左兵衛、荒木武兵衛、明石武兵衛、シテテン 孫太郎、左近九郎二郎、大澤李右衛門、うは方 七三郎、立役十右衛門、半平、善次郎、利右衛門、小うた内記、傳右衛門、權右衛門、三味線 權八、三郎次、笛 傳兵衛、尺八 清左衛門、鼓ていか、平十郎、判改二人、野良番二人、髪ゆい二人來

傳十郎と平十郎ニハ言葉懸、急に目見ハ、小さらし、名左衛門、兩武兵衛、してん孫太郎也
 一、延寶七年九月十九日 松平出羽守殿同備中守殿……招、馳走ニ町躍興行、……未中刻に始、先へ下りはにて
 桃屋二郎右衛門出、ことふきを述ふる。

- 次第一番 千年の松、腰越、能登、近江、小車、秋の千種、三番三、此間疊屋清九郎、次郎右衛門物まね、狂言大山參、籠拔其外曲有
- 二番 あみかさ、さんやかよひ、さんさらり、金澤 よね衆、露の玉、唐人
- 三番 君は川上、花つくし、いつの山、いちのや、ことのね、はた、しよ、酉の后刻相濟

夜ニ入テ奥お幾へおとり見する、簾掛内ニ樂屋後段振舞、清九郎二郎右衛門、せりふの上、吉原万歳、祭のな
 らしとする、其上ニ直
 △おとり次第 戀は山ので、上の山、あたこ嵐、酒くとき 與作 しゃきり、次郎右衛門、清九郎、せりふの
 上、なすの與一しかた

△おとり次第 あかしや須磨、露の玉、いつの山、ことのね、唐人、獅子、祝言、諷
 一、延寶七年九月二十九日 頃日氣滯ニ付、良順ニ云付、前島二郎兵衛ニ五六人同道可申旨俄ニ遣、奥の三の間
 にて不取合狂言有、暮テ初、亥刻ニ相濟

第一篇 資料 篇

一、新市 延寶左京太 ほうろく 清九郎 扇寶傳之介 カ、代 源太郎

一、おとり分 清九郎

一、戀の鳥さし 不殘 シテ 二郎 吉

一、關寺小町 前島二郎兵衛 多宮清九郎

一、狂亂尺八 不殘 中入 此屋敷ニテ作そは切兩所も祝

一、賢女の跡追 不殘 一、所望、判官都落 不殘

一、犬にかまれ 清九郎獨狂言

役者ハ二郎兵衛、二郎吉、左京太、傳之助、源太郎、清九郎、三味忠六、小うた庄兵衛

一、延寶八年正月八日 堺町木挽町見物之座書ニ遣之

◎堺町ニハ △鶴屋中村勘三郎座 △市村竹之丞座

右兩座芝居大狂言、但勘三郎は追出也、

○操の座ハ △大薩摩、是を下りさつまと云之也 △丹波和泉太夫 △土佐座 △都長太夫座也

○せつきやうにハ △大坂七太夫座 △石見座、兩座也

○籠拔ハ △龍王蓮之丞座 △飛龍勝之介座 △藤卷嘉信座 △傳内座也

○子共狂言 △万能丸一圓 △松村又樂座、此座ニハ本傳内、只今都右近と申、枕返しも仕よし

○見せ物ハ △孔雀、大蛇鹽漬、牛の生替女、猿、かち也

◎木挽町ニハ 大狂言 △山村長太夫座 △森田勘彌芝居 △龍尾連之助座、籠拔狂言有

一、延寶八年正月二十一日 伊勢講ニ付テ予の馳走ニ都傳内、松村又樂呼、巳中刻ニ始之

番 組

一、若松おとり 子共不殘

一、出世の浪人 松村菊之丞 瀧川内藏助 津國團六

一、鞠の曲 都傳内

一、安宅 藤井丹三郎 津國團六 松村源三郎

一、枕の曲 傳内

一、むたいの鍛冶討 小舞又三郎 松村又樂、其他大勢 付、手立のいましめ、不殘出

一、いものくきとてうの曲 傳内

一、知略の馬かた 松村千之助 其他大勢出

一、おとり 中入有り

一、柿本貴僧正 不殘出

一、山のいもうなきの曲 傳内

一、きらくの悦 不殘

一、慰の道中 大形出

一、おとり 但躍ハ何も太平なり、色々品々にて名あり

今日來役者の覺 太夫 道外 太夫松村又樂十二三、小哥松村千之助十四五、若女方松村菊之丞十三四、下女松井萬之助十四五、小舞又三郎十三四、藤井丹三郎、松井源二郎、小三郎、吉十郎、相之助、是齋、何も十四五より下なり。上るり小うた若山五郎次、三味線庄右衛門、利兵衛、笛老人三郎兵衛、鼓半右衛門

一、延寶八年正月二十四日 今夜月待如吉例……爲慰狂言師呼、前島二郎兵衛方へ島野良順方より云遣、役者才

覺仕也、狂言酉后刻始

一、大黒連歌 川島左近 柏木采女 重右衛門 清九郎
左源太 傳之助 金太夫 子共おとり有

一、婦見物狂 二 郎兵衛 金太夫 杵屋十右衛門 是にも謠有
采女 左近二郎右衛門 六右衛門

一、無げんの鐘 千之助 二 郎兵衛 源太郎
一 郎右衛門

一、松島遊覽 二 郎兵衛 不殘 鹽くみおとり
大形出

一、夜半のうかれめ 二 郎兵衛 其外大勢、辻おどりの體、
采女

一、無言の破戒 二 郎兵衛 十右衛門
千之介 下女方等

一、太平おとり 二 郎兵衛 二 郎吉 傳之介
左源太 左近 采女 六右衛門

寅ノ中刻相濟、二 郎兵衛 二 郎吉 其外千秋樂を舞

一、同二月十三日 兼約ニ付大澤右近將監殿友之助殿……振舞……馳走ニ籠拔云付、籠拔太夫、龍王蓮之丞

(廿五)、龍馬琴之助(廿三)、鷲尾龍之助(三十六)、鶴之助、チャル一之進、云立權兵衛

一、杉たち 一、そりをき 一、いるか飛 一、瀧をり 一、そりかへり 一、中かへり 一、釣籠
一、花おとり子共六人布衣頭かふり一人二番 一、一つ輪 一、二つ輪 一、三つ輪 一、玉輪 一、釣輪

一、迷ぬけ……三番 一、ふみすへり 一、たちかへり 一、いかふの中飛 一、夢のぬけもとり 一、月輪
一、風くるまちくぬけ 一、くわつきよおとり、蓮之丞、琴之助、龍之助、鶴之介替りく藝勤、むつかし
きは蓮之丞勤、

△今日奥お幾へ籠拔爲見

一番またこし 一、そりぬけ 一、またぬけ 一、座ぜんかへり 一、二面のまた越 一、一尺の輪

一、籠ぬけちかい(蓮琴) 一、しかの谷つたい 一、おとり二番 一、籠目輪 一、衣かう籠 一、谷越

一、ひざ車 一、そりはし 一、そりかへり 一、中かへり 一、大籠二番、暮時分ニ相濟

一、延寶八年四月六日 今夜侍中氣詰骨折ノ馳走ニ森田勘彌座狂言師呼、相伴ニ兩所お幾も見物、狂言戌上刻ニ始、才覺川口宇兵衛明石武兵衛取持

番 組

一、寄花戀 出來島小太郎 坊主 百兵衛 其外出 一、十番切 松本小さらし 出來島吉彌 荒木武兵衛
山本十二郎 同 主水 坊主 百兵衛 其外

一、盃開眼 松本二三郎 勝村十郎右工門 其外立役出 一、飛脚の難儀 小さらし 武兵衛
同 雪 會 太次右衛門 主 水 十郎右衛門

一、現のけはい 小さらし 子共不殘 役者大形出

中入の中子共出酒宴あり、予も出興、吉彌小太郎益ヲさす、松本小さらし方へろくろ首の狂言及聞しより驚目之旨言遣之、珍敷狂言故委記、飛脚ニ百兵衛三度目ノ聲十郎右衛門、小性主水、小さらし親ニ明石武兵衛、同人ノ召仕立役二人、小さらし姥ニ藤四郎、首之作物釘金ニテ釣出、二番のうつゝのけはい小さらし首ぬける時ノ胴藤四郎、めしつかいの女とも子共不殘出、おとりあり、こまんと云女ニ老女かた久内振袖着テ出、浪人に孫太郎、小さらしうはに左兵衛、四郎五郎に荒木武兵衛、小さらし伯父坊主に立役者二人但弟子一人、後の狂言子ノ下刻に始

一、戀ハくせ物 小太郎 百兵衛 九郎二郎 半平

一、あふむ返し 内藏助 主 水 孫太郎 左兵衛 其他立役

一、都めぐり 小さらし 荒木百兵衛

一、君がこゝろ見 仁三郎 十郎右衛門 左兵衛 其他立役

一、太平躍 小さらし おんど

子共并十二郎九郎次郎立役者三四人おとる、祝言 寅上刻相濟

役者の覺 松本小晒、同二三郎、同雪會、出來島小太郎、同吉彌、同内藏助、同主水、荒木武兵衛、勝村十郎右衛門、坊主百兵衛、古今九郎次、してん孫太郎、左近左兵衛、角前髪山本十次郎、立役、善次郎、十郎右衛門、半平、利右衛門、長右衛門、半どうけ太次右衛門、かゝ方久内、女方藤四郎、小哥二人内平三郎、三味線權八、又三郎、はやし宇兵衛、平十郎、傳兵衛、清右衛門

一、延寶八年四月八日 堺町へ、二の御丸へ誰か座まいり候や尋ニ遣之、操土佐少掾、籠拔ハ龍王蓮之丞座、松

村又樂座、都傳内、此三座今日雅樂頭殿へ被召寄御内見有之よし

一、延寶八年四月十一日 雅樂頭御膳献上ニ付テ巳刻二の丸江渡御……御書院出御、庭上舞台構之、操太夫土佐

○上覽 酒天童子 狂言五番、すまふ、春の茶の湯、しのだ女、有馬やつこ、てんぐ庖丁、

相撲人形脇より借、狂言小山二郎三郎杯、其外、上手脇より來よし、是ヲ堺町へ聞ニ遣右未后刻終ル

△今日堺町へ昨日の様子尋ニ遣し、土佐上瑠璃六段一人ノ語。狂言春の茶の湯、與作とう風おどり、しのだ妻、有馬やつこ、てんぐぼうてう、祝言 高砂のきり。

初段次の狂言迄、御簾上り有之よし、一段〜

註 此記述から見ても、上覽ハ四月十日にて、翌日の日誌と見ゆ

△龍王蓮之丞座籠拔被仰付候者可仕とて仕組の覺、一番、杉立、かめおき、石れい、いるか風、衣かう中抜、夢の抜戻、夢想の中こし、天狗の羽かへり、籠拔二番、らんかんのまたとり、そめかけ、かたかへり、山からあおとし、夢の浮橋、鹿の谷つたい、そめはし、兩籠拔三番、たち抜、釣籠、ひさ車、花車、たち飛、月の輪、つくみ、拍子拔 蓮之丞 琴之助 兩人出、

△松村又樂座都右近、放下、鞠の曲、枕の曲、おごけの曲、玉子の曲、うなきの曲、とび花の品、籠拔放下 何も不仕よし

一、延寶八年四月十六日 大膳殿(毛利)表へ出、操興行(太夫名ナシ)巳中刻ニ始、

三番三

第一篇 資料 篇

○奥州攻六段

狂言 三條小鍛冶 伊豆國姥が宿 吉原いなり 笹野三人 上野山おとり 四季らん曲、大坂おとり。
ふく藏坊 さんやれん拍子 名寄十番切

……元千代殿部屋にて料理出、操見物 番付

○上るり 酒天童子 六段

狂言 吉原万歳 太夫おとり たはかり尺八、しのだ女、れいほう開帳、與作おとり 祝言、

内に初の上るり八島の管有之、予見て奥州攻に直、酒天童子も好、暮前相濟、

註 四月十日上覽の曲日にて上演せしものと思はる

一、延寶八年十月二十五日(の條に) 十六日の夜、奥へ前島二郎兵衛呼、狂言見物事、

番付

- 一、猩々福あたへ 二郎吉 傳之介 左源太 三郎兵衛 金太夫 十右衛門 一郎右衛門
- 一、さとう中立 二郎兵衛 千之助 一郎右衛門 三郎兵衛 金太夫 文四郎 十右衛門
- 一、殺生石 二郎吉 傳之介 左源太 大勢
- 一、智略の落文 一郎兵衛 千之助
- 一、夢のかりやと 千之助
- 一、衆道中立 千之助、二郎兵衛 左源太、をのく

一、執行の車 二郎吉 傳之介

一、松島遊覽 二郎吉 左源太 傳之介をのく

一、戀慕染衣 二郎兵衛 仙之介 文四郎 をのく

一、茶屋あそびをのく 祝言 大おとり

一、延寶九(天和元)年三月十二日(於姫路城) 今晚爲予の參觀の祝儀久太郎より於八代振舞……多宮鐵右衛門

ヲ仙右衛門招狂言有之

番組

一、松ゆつり葉 松右衛門 七兵衛 鐵右衛門

一、二道の口せつ 若女 多宮 鐵右衛門 新右衛門 吉右衛門 左二兵衛 九郎右衛門

一、戀の狂亂 多宮 七兵衛 新右衛門 八兵衛 松右衛門 大形同役者

一、智略の小袖賣 一、恨の怨靈

一、住吉相生の松 不殘出 祝言におとり 千秋樂、亥上刻ニ相濟

一、天和二年七月二十二日 天晴吉日、今日堺町木挽町見物芝居見せに遣、

註 二月蟹居赦免日田に轉封さる

△中村勘三郎、上るりござん十二段を三番繼(續) 狂言△市村竹之丞ハ山科右大將色好と云先年伊勢掾の芝居の上るりを三番繼ニメ末に加茂祭有之、△山村長太夫ハ太平記二番繼、△森田勘彌ハ五輪碎三番繼、是も十

二段、先日ころ装束等目を驚仕候よし

○操は和泉太夫。薩摩、是肥前一所二郎三郎座也、小六たて男と云上るり。永閑座、メ操、三芝居

△外は天満八太夫、七太夫、中芝居中村善五郎、籠ぬけ琴之助、中芝居都傳内ほうか子共狂言のよし、見せ物

色々有之といふ。

一、天和三、四年(芝居の記)

一、貞享二年七月三日 晝過テ大鼓の音聞、久太郎の望ニ付仙右衛門ハ掃地ニ附有之丹羽作兵衛茶店に爲詰故則作兵衛呼入テ遣來狂言師也、簾掛我等部屋見、外にてハ久太郎源之助狂言見物、番組とて書出、

一、若多びす 一、都六方 一、おとり 一、うたさる若 一、ぬめり万歳 一、ゆるせかうさゑもん

狂言師、島澤小太夫、玉井三之介、上村萩右衛門、勝山武左衛門、澤田八郎次、鎌倉傳藏、河上三郎兵衛、片岡源兵衛、杉山李兵衛

一、貞享二年八月十四日 天曇晚方晴、五ツ時算新兵衛長州へ被越、久太郎操見物ニ同道の事(太夫の名はない。或は土佐?)

操 番組

式三番 高砂但中入 ○上瑠璃 富士 牧 狩小袖曾我 十番切

初段 狂言 松竹はやし舞、風流茶の湯、小原木、

二段 吉原狐二番續(買手はうせ)、江戸名所柴垣、櫻の渡りに水かけおどり、縁日參、(物釣きつね)

三段 徳利狂人、同酒くとき、遊女太夫おとり

四段 おとけ一休付忍おとり、智略の狂言、吉原万歳、

五段 此次の狂言缺?

六段 此次ニ ○田村丸 といふ上るり一通有之

今日操先年の上手共程ニハ無之、のろまとやらん徳利狂人ハむかし見し狂言にて、上手の面影殘、此座にどんつうとかや云人形有之むかし茶平と××云しか重役者成藝者也、いやな風也、人形其外不勝、上るりにも名護屋山三、狂言ニ魚らんのくわんおんなどはやる事あれど亭主不×始

一、貞享四年二月二十三日 今日操狂言太夫二郎三郎來、舞台見セ我等前呼出、可精出候と云聞、操番組等云付、伏見屋利右衛門同道。未上刻より戌上刻迄有之。

次郎三郎五十七歳と云、子ハ吉右衛門とて小鼓打也、次郎三郎髯藤田皆之助、今ハ助右衛門と云、二歳の孫在之と云ニ付、手翫物遣し悦事不斜

一、貞享四年三月二十一日 今日御目見首尾能基知へ被仰付、祝儀の爲操興行、已上刻ニ始之

○上瑠璃 太郎坊根元記 六段、始前ニ内匠次左衛門、吉右衛門(次郎三郎) 次郎三郎名乗一人つゝ出(總領也)

一、三番三 初段 狂言 一、大福殿よねま 九兵衛か、 十右衛門大黒 長十郎 一、庚申遊のろま座頭 次兵衛長十郎 二郎三郎女

一、高雄音語高尾 二郎三郎若男 九兵衛長十郎

第一篇 資料 篇

第一篇 資料 篇

二段 一、六番 たぬき山伏 次兵衛 勘四郎 一、うき世さいもん がうりき 七左衛門(吉右カ)

三段 一、ちりやくの中立 しもよ 次郎三郎 長十郎 次郎兵衛 一、一心さんげの坂 右同人

四段 一、かね巻 しもよ 次郎三郎 長十郎 九兵衛 一、執心道成寺 白拍子 次郎三郎 九兵衛 道成寺住持 長十郎

五段 一、おもひは山の内 若衆 次郎三郎 治兵衛 一、江戸名所しはかさ 角前髪 次郎三郎 同 四郎三郎 同 長十郎

六段 中人祝、委末記

○上るり 小式部小野詣 六段

一段 狂言 一、茶の間違ひ 下人 九兵衛 若男 長十郎 いしや 勘右衛門 獅子躍あり 一、さんや万歳 次兵衛 十右衛門

二段 一、五番 非常の戀慕 八木寺 次郎三郎 九兵衛 どのろく 四郎三郎

三段 一、悪道の友顯 同人 一、武道のかんけん 侍 十右衛門 のろま 次兵衛

右済て樂屋藤田皆之介今助右衛門 呼寄所望、道行(下ヶ髮管笠地白正平染) 并きふねさらし舞、(祭小袖着用)

人形も所望候へ共、夫ハ難成と申、俄装束取ニ遣、さらしハ鼓も打、舞相手ニハ辨五郎使、出、歌次左衛門、七左衛門、小鼓次郎三郎

四段 一、邪道通心 もしは 二郎三郎 舍利之助 長十郎 次兵衛 五段 一、二河白道 同 一、もろこしおとり

六段 祝言 亥上刻ニ相濟

一、貞享四年四月朔日 操召寄ニ付、銀子十枚次郎三郎に遣、次郎三郎へ小袖一、藤田助右衛門へ銀子一枚遣之、次郎三郎助右衛門禮ニ十郎左衛門方へ來。今日水野作州にて興行也。

一、貞享四年七月十一日 午刻長州殿へ行、森田勘彌役者狂言五番濟所也

註 江戸四座を招いて合同上演とする豪華祭するに餘りある。尤も毛利元千代は大和守女と婚す

役者肝入ハ鎌倉屋久兵衛并松本小さらし、今ハ家督屋善兵衛次竹之丞芝居安田一郎左衛門のよし、善兵衛一郎左衛門は呼出

△番 付 森田勘彌座

一、大福長者 不殘出

一、淡路丹波 太夫 勘 彌 明石順磨之介 荒木武兵衛 花村きぬえ 坊主百兵衛

一、ほやのゝすゝき 村山万三郎 片山新藏

一、からいと 瀧本八重之介、坂東又太郎、山崎小太夫 武兵衛、百兵衛、其他

一、惣おとり 馬 引 躍

一、吉野山花の宴 八重之介 四郎三郎 片山仁兵衛 武兵衛 又太郎 茂右衛門

第一篇 資料 篇

第一篇 資料篇

- 一、勘忍五十番 田村平八 百兵衛 四郎三郎 茂右工門 八郎兵衛
- 一、こかねくちせぬ古金買 又太郎 鈴木平三郎 其外大勢

中入

△寄合役者 是は竹之丞座の者來内參合候にて所望

- 一、歸國の本望 竹中喜世三郎 宮川幸之介 三國喜作 一、戀衣 玉川歌仙 仁兵衛 小十郎

△番附 市村竹之丞座

- 一、惣おとり 子共十二人

一、あさきさくら

宮川幸之介 今村金太夫 竹中喜世三郎 國松小十郎 竹中五郎三郎

- 一、與作三番續 第一、舟路のあらそひ

中山喜世之助 藤田所三郎 松尾吉三郎 猿若山左衛門 岡之助 山本平九郎 やつこ利右衛門

- 第二、吉原夜見勢 中山小夜之介 幾島半六 笹岡甚五右衛門 女方

此の狂言に小夜之介三味線小うた 其外大勢

- 第三、與作馬方

太夫 伊藤小太夫、金太夫、勘五右衛門、所三郎、山右衛門、始前=狂言=出候面々大かた出かたき打有、小太夫道行

- 一、道念くとき、惣おとり 子共十一人、男十二人

おんど 小夜之介

△番附 中村勘三郎座

- 一、つりきつね

袖島市彌 松村源之助 森田小右衛門 かもん 上村六三郎 三國喜作

一、櫻川 歌仙又太郎 松村四郎三郎

- 一、出船おとり

是ハ竹之丞座子共、宮川幸之助、今村久米之助、伊藤鶴之丞、竹中喜世三郎、加川三造酒介、野崎内藏丞、岡之助、軍之助、鶴島佐源太

- 一、先陣おとり

是ハ山村長太夫座 玉川千之丞 宮崎式部 和泉

一、さゝれ石 是ハ勘三郎座 源之助 又三郎 小右衛門

- 一、鎌倉名所八景 道行 伊藤小太夫

一、駿河名所 中山小夜之介

- 一、柴舟 千之丞 和泉

一、行れつおとり 是ハ長太夫座 千之丞 和泉

- 一、旅寝の平産

小吉や 小右衛門 喜作 平三郎

一、遠藤武者盛遠 長太夫座 式部 八重之介 百兵衛 茂右衛門

- 一、惣寄合子共おとり

祝言

役者 名付覺 (×點の子共、器量能見 勝しは無之)

伊藤小太夫 ×中山小夜之介

同喜世之介

宮川幸之介 伊藤鶴之丞

野田内藏丞

加川三木之助 ×今村金太夫

鶴澤左源太

第一篇 資料篇

役者

藤田所三郎	猿若山右衛門	幾島半六	山中平九郎
山本十右衛門	杉山孫市	油勘右衛門	西岡兵五郎
片山仁兵衛	笹岡甚五右衛門	杉山與惣次	玉村小十郎
宮田九右衛門	やつこ利右衛門	幾田又兵衛	花岡喜右衛門
竹中五郎三郎	上村六三郎	森川又三郎	小河久兵衛
若山五郎次	川口平十郎	上村宇右衛門	きねや六三郎
竹田半五郎	村山半兵衛	山下半兵衛	三味線權右衛門
安田重右衛門	右竹之丞座より也		
	上村小吉彌	袖島市彌	松村源之介
	三國喜作	鈴木平三郎	若山吉右衛門
	三味線きねや勘五郎		
	右中村勘三郎座より也	山崎半太夫	村山萬二郎
	森田勘彌	坂東又太郎	荒木武兵衛
	花村きぬえ	瀧本八重之介	
		明石須磨之介	

坊主百兵衛 田村平八 村山左五右衛門 片山新藏
 鈴蟲權右衛門 小うた小 兵衛 つゝみ源 兵衛 松村四郎三郎
 右森田勘彌座より也
 玉川千之丞 ×宮崎式部 同 和泉 内記傳右衛門
 三線三郎兵衛
 右山村長太夫座より也
 一、貞享四年八月六日 お伊久兼て大願にて村山十郎左衛門へ再三申ニ付狂言勘彌座より呼寄、酉中刻ニ始、奥三ノ間ニテ興行、二ノ間ニ簾懸、お伊久見物、部屋見物の所をは、しきりをして國長屋の家持共兩方の出入の者呼ニ遣見物有……

狂言番附 但明石武兵衛呼出舞台を見する

一、高砂おとり 女 瀧本八重之助 女 村山万三郎 女 花村きぬえ
 若山崎小太夫 若 坂東又太郎 若 明石千之介
 一、時若丸 又太郎、きぬえ、千之助、金五、浮本太次右衛門 一、縁のうらかた 古今新左衛門 太次右衛門 万三郎
 片山新藏、坊主百兵衛 八郎兵衛 八郎兵衛 八郎兵衛 明石武兵衛
 一、戀の繪あはせ 八重助 櫻井加平次 一、とじやうおとり 子共六人 立役者六人 もみにかたばみ裝束
 千之丞 八郎兵衛

中入後、 一、梵天國 役者大勢三番續、中ニ狂言に古今新左衛門出、三番すみて所望

一、戀の中おとり 八重助 新兵衛 千之助 新藏

一、大おどり そば切おとり

祝言

子の中刻ニ相濟……是は伏見屋利右衛門才覺、明石武兵衛取持

一、貞享五年二月大朝日 長門守殿よりお使……我等行、木挽町森田勘彌來、狂言有、辰中刻ニ始、亥中刻ニ相濟、我等行時分ハ未上刻、役者裝束、傳内子共上るり杯語、此外ニおどりも有

番 付

一、三福神寶開 井おとり

一、今角田川四番續 新右衛門 平右衛門 喜左衛門

一、角田川 二半 喜左衛門

一、同 三万三郎 市之丞 市之丞

一、同 四 小大夫 又太郎 有 助、大勢出

一、不破番左衛門むたいの戀路 和式 八部 泉

一、柏右衛門 半兵衛 百兵衛

一、しかた津島參 勘 武兵衛

一、うかれたんせん すまの介 新三郎 百兵衛

一、衆道落文 平三郎 市之丞 小傳次 多磨之介

一、戀の繪かき 松本市之丞 立田市之丞 佐五右衛門

一、ゑんのうらかた 新右衛門 万三郎 平三郎

一、爲朝若さかり 金子市之丞 新三郎

一、惣おとり 子とも

一、そいねのつよし 金 五 儀右衛門

一、猫は軒端の花 又太郎 新右衛門 鶴之丞 太次右衛門

一、同二番猫の執心飛行 かるわき 常右衛門 その外大勢

一、戀の表具屋 勘之丞 儀右衛門

一、榮花猿若 半 勘 彌

一、今てるて七色草 喜右衛門 小太郎 半 彌 夫

一、舍利 又太郎 彌

一、千手の利生 小 太 夫 佐五右衛門

一、久米仙人 勘之丞 新 武 兵 衛 藏

一、惣おとり 祝言

役者の覺

太夫 森田勘彌

若太夫 坂東又太郎

女かた 松島半彌

同 村山万三郎

同 花村鶴之丞

女方 山崎小太夫

同 花村きぬゑ

同 若衆方 松本主膳

同 龍田市の丞

同 明石須磨之助

同 若衆方 澤井小傳次

同 松本市之丞

同 瀧本金吾

同 出來島一學

同 中村勘之丞

同 明石千之助

道外 片山新藏

同 坊主百兵衛

立役 山川喜左衛門

半とうけ 古今新左衛門

同 鈴木平三郎

立役 川島儀右衛門

同 田村平八

同 荒木武兵衛

同 松本勘右衛門

同 小松十郎兵衛

同 梅本加平太

同 村岡佐五右衛門

同 松本半右衛門

とうけ 浮本太次右衛門

第一篇 資料篇

立 村山常右衛門

同 橋本新右衛門

女 八郎兵衛

女 善三郎

小うた 柏木六郎兵衛

同 山口勘兵衛

三味線堤 權八

同 杉山又三郎

はやし 山口彌三郎

はやし 松原平三郎

同 松島四郎治

山岡×二郎

山村座外の者來在候よし

宮崎和泉 同式部

一、貞享五年五月二十三日

今日木挽町森田勘彌芝居へ長崎より來とて唐崎色之助と云十二歳に成者かるわさ名譽有之去十七日より始と辻の木戸々々に板札有之依之高井逸齋見て可參と云付

一、元祿二年二月二十五日(於山形) (此日加茂松風小袖曾我等の能) (が催されて次の記事がある)

右何も長袴にて如能、加茂松風作物、甚右衛門異風を着して特出、右之間當町の者狂言有、

番 付

一、横笛 瀧口入道長三郎 弟子孫内
横笛 坊主庄兵衛 うは忠右衛門

一、新市 奉行 孫内
細物賣 庄兵衛

一、花見狂亂 唐頭庄兵衛 弟子孫内
女大名長三郎 其外

一、戀の似佛 後家 鐵右衛門 娘一學 佛師長三郎
佛 孫内 から物や三 吉

一、風呂屋やつこ 孫内、鐵右衛門
庄右衛門

一、さよ衣 鐵右衛門 三長三郎 吉

一、おとり(太平躰) 一學 五右衛門、忠兵衛
清助、孫内、三吉

一、元祿二年三月十四日(於山形)

何も爲馳走當町人集狂言興行舞台樂屋如先日、我等金吾舎人は掛作にて見物

狂言番付 女芝居一番ニ
鑑板出言立

一、万歳 三 吉
孫内

一、ちちよく唐笠 若衆八 彌
同親 庄兵衛 取持 長三郎 供清助
孫内 供さうり 鐵右衛門 供武兵衛

一、二番 あこやの松記 今度 大臣、孫内 供 五右衛門
實方 一 學 武兵衛
所の者 六郎兵衛 出家 忠右衛門

一、奥州歌枕 今度仕組、哥枕ハ平 實方 一 學 うは 鐵右衛門
清水久左衛門作之 所の者 甚兵衛 供 三 吉
立役 長三衛 庄や 庄兵衛

一、戀の懸物 不殘 大名 庄兵衛 娘一 學 立役大勢出 一、猿若 八 彌
出 大名子 八 彌 念者 孫内 所ニ 此八彌當所山伏子一學と一
小性のよし)

一、妻たかい 一學、五右衛門 うは 忠右衛門
勘兵衛 長三郎

一、湯立 八 彌
鐵右衛門 庄兵衛

一、鎌倉落 一學、八彌
其他大勢

一、縁の月見 同斷

一、藝關 一人つゝ藝有、酒誦儀三 吉、さいもん 清 八、ことふれ長三郎、大黒舞甚兵衛、まひす舞 一 學、唐頭庄兵衛

右の間庄兵衛、獨狂言、髮結碁打、

一、惣おとり

一、元祿二年五月十日 堺町市村竹之丞芝居へ富田甚左衛門遣之ニ付、金舎并麻之助遣

二、元祿二年八月二十二日 (兼能興行の記) 今夜土岐右衛門方へ早川茂右衛門方より内々申越ニ付花都迎遣呼寄
とやかく云々漸戌刻來、弟子波都連來奥へ直ニ呼次の間にて藝、

一、小夜衣 一、冬草 一、五尺手ぬぐひ 一、小紫 一、てんま 一、きぬた 一、八段獅子 一、うきね

一、おとりくとき 亥后刻濟

一、元祿三年正月二十八日 部屋見物……(能興行の番付あつて後に、左の記述あり)

舞台しつらいて伏見屋才覺職人之藝云付見物

○上るり 松 風 六段

初段 人形 太郎ませりふ 狂言 毘沙門男 又太郎 清九郎 八郎 二段 人形 鎌倉名所 狂言 さんや春駒 又太郎 清九郎 八郎

三段 人形 辨天待 狂言 花ものいふか梅のせい 同前 四段 人形 若ゑひす 狂言 五尺手拭 喜九郎 又太郎 八郎

五段 名護屋山三 役者不殘 六段 作高砂 日待大おとり 祝言
役者 小舞 弓や又太郎 タ、ミヤ清九郎、喜八郎、三味傳六、葉子ヤ小右衛門、上るり内匠ふし長十郎

大郎ま 九郎右衛門 亥上刻ニ始、寅中刻ニ相濟

一、元祿三年四月六日 ……夫より兼約ニ付内藤紀州奥方へ相越、……濃茶出、おとり所望、

一、松竹おとり 十四五女童二人 一、かんこ兵衛 十四五 二人 一、たつたおとり四人 三人右ニ同 一人十六斗

一、くんしけん (おとりの中) 十四五、ニ切合あり二人 一、よしの山 四人 一、けんしおとり 四人

一、みよおとり 四人 四番濟……

一、元祿三年四月二十六日 獨狂言上手の由にて石見屋傳左衛門と云町人呼、扨從詰所にて、藝云付之、簾懸部

屋見物子供も見物安福初近習小姓見物

一、二福神 一、牧狩 一、郭去(巨ヤ) 一、橋姫 一、風呂吹塵頭 一、女鳥さし 一、若衆袖かたみ

一、花子 一、都ものがたり 一、物まね 一、祝言

何も上手とて譽

一、元祿三年十月十一日晚 今夜慰ニ門彌と云首八人座頭と卅ニ云藝するよし今朝十右衛門、右衛門内藏語ニ付

則呼寄近習詰所ニテ藝云付番付とて書出

一、三番三 一、よねませりふ 一、のせかた 一、こんくわい 一、しかた上るり

此内四番聞、まことに二三人の聲のまね、鼓太鼓三味線鈴一人にて勤、此間一學三吉孫内など可呼寄と云付候、
得共方々へ相越、八彌孫内五右衛門庄右衛門など云者來、猿若、碁打、横笛などする、亥后刻ニ相濟

一、元祿三年十月十一日 朔日の晩にはお書院見物事の言付に、お伊久へ馳走、兄弟并部屋次太郎も見物のよし

番 付

一、福まつり 喜八郎 常右衛門
小太郎 清九郎

一、うらみの礎 喜八郎 團九郎
常右衛門 清九郎

一、さんやほうさい 同断

一、水中玉手箱 同断
金五入

一、夢中のかいこつ 同断

一、猫のなさけ 同断

○上るり こうきてん 虎屋永閑 三味線引 五ツ前より子の中刻まで在しよし

一、元祿四年正月十八日(於山形) 能戌后刻ニ濟、夜食上下ニ出、同中刻ニ當所町人狂言始

一、萬歳樂 當町の作 清三 吉介

一、山家聲入 孫 庄兵衛内
忠右衛門 長三郎 彌學

一、賴義奥州責 三番續 委略 不殘出

一、貧者の參宮 三 鐵右衛門
内學 鐵右衛門 吉

一、戀のほうさい 八 庄三郎 彌 鐵右衛門内

一、目黒六方 武右衛門
鐵右衛門 小兵衛

一、大内花揃 鐵右衛門
鐵之丞

一、浪人歸參 三 庄兵衛
八 彌學 吉

一、惣おとり

狂言ハ寅后刻濟、曉餅出祝

一、元祿四年三月十六日 去五日ニ病後祝ニ久太郎(註、嗣子基知、元祿六年)方へ操呼、お伊久始兄弟共部屋ち
ろ招請見物振舞有しよし、太夫ハ小山次郎三郎

番 付

○上るり 一谷坂おとし

狂言 一、大福 よねま 九兵衛
大こく 長十郎

一、文珠智くらべ 文珠 二 郎三郎
のろま 治兵衛 一、色のさまたけ 義のまへ 二 郎三郎
よねま 長十郎 宇太夫

一、にこらぬ心清川 役者同

一、邪心のいましめ 同断 中入

○上るり 賴朝白川合戦

一、枕返し 二 郎三郎

一、忍ひのろま 仁兵衛
小山助 左衛門 一、ともしり浪人 治兵衛
十右衛門 長十郎

一、雪中のねこまた 右同

一、おとり 一、長持おとこ よねま 八 郎右衛門
長十郎 十右衛門
×右衛門

祝言、此使南部新能番付來

一、元祿四年六月五日 爲慰勸略操×共武太夫ニ内談×呼、午中刻ニ始、近習詰所にて也。簾懸て娘部屋見物、
表向八年寄用人ハ不出、奏者番近習小姓共子共附之斗也、

番 組 太夫さつま甚太夫

第一篇 資料 篇

○上瑠璃 頼光武家鏡 末武事也 六段

一段 狂言 試茶屋 長兵衛 太兵衛

二段 男女いけん 忠右衛門 八兵衛
鬼島原 吉兵衛 八兵衛

三段 春こま 伊兵衛 八兵衛
かゝしおい 忠兵衛 九郎兵衛

四段 文 忠右衛門 太兵衛
うかれ大名 忠右衛門 八兵衛

五段 一、江口 長兵衛 太郎兵衛 忠右衛門
八兵衛 忠右衛門

一、江戸めぐり 忠右衛門 八兵衛
太平おとり大勢 太兵衛

六段 祝言

中入は上るり二段濟、其次狂言濟ニ有之。

今日の操人數 太夫薩摩甚太夫、小山長兵衛、どろけ忠右衛門、同太兵衛、地人形武兵衛、武者三郎兵衛、

花車方八兵衛、小うた伊兵衛、三味線吉兵衛、(花火屋)彌藏、太郎兵衛、

幕ニハ根本長兵衛と有之、但上るり語の外ハ何も町人也。代金一兩遺約束のよし、然共少増遣よし

一、元祿四年六月十日

父子四人 (註、直矩、久太郎、源之助、源五郎なるべし) 京極甲州 (註、甲斐守高任の室は直矩の養女) に振舞に行、操辰后刻ニ

始

番 組

三番三 太夫 土佐少掾 橋正勝

○鹽屋 文 正 六段

初段 春の耕し 米まもり 高砂おとり

二段 武命 春の緑子

三段 心の二面 片影堂

四段 比翼の三味線 吉原道成寺 大磯仕形跡

五段 龍虎闘ひ 一念の願 馬方躍

六段 中入、書院にて料理出

亭主引物渡、後淨瑠璃未上刻ニ始

○上洛 義經記 六段

初段 待宵の橋 うき世おせん

二段 實植小櫻 正月遊ひ

三段 買手は曲者 悦の道中 釣狐

四段 身を捨て浮ぶ衆道 かしま踊てかたき討

五段 武士の二本 變化退治 太平樂躍

六段 高砂

一、元祿四年七月二十九日

午中刻長門守殿へ振舞行、馳走ニ碁盤人形、茶濟始

○上るり 猪股小平 六段

太夫式部、三味線三郎右衛門、麻上下、本ヲ足折ニ載語。狂言、一段の間、一番或ハ二番つゝ有、不殘碁盤の上にてまわす。常の碁盤もうせんにて包也。次郎三郎子吉右衛門持出、但長うた治右衛門弟子七郎兵衛出、若松といふ祝言をうたふ。三味線三郎兵衛、何も麻之上下著用

第一篇 資料 篇

四段 丸山遊女
付枕返し

五段 島原遊女
付くるわおとり

中入前、碁盤人形、

○後上るり 前 中 書 王 六段

しはかき如例、のろま鶴物かたり。

一段 ともり浪人
雪中ねこまた

二段 五番續
物臭太郎
犬引おとり

三段 縁の辻立
女しばかき

四段 出世太郎
枕おとり

五段 三番續
玉屋新兵衛物語

身うけの氣のとく
手くだの祝言
付たらふくおとり

六段 祝言

役 者

狂言太夫次郎三郎、上るり太夫式部、長うた次右衛門、同七郎兵衛、よねま九兵衛、のろま治兵衛、
茶平太次兵衛、わかおとこ長十郎、小やま助右衛門、悪女十右衛門、やつこ八郎右衛門、あど佐右衛門、
同六郎兵衛、切合長兵衛、同一郎兵衛、同權兵衛、同三之助、笛市郎右衛門、鼓吉右衛門、同小右衛門、
大いこ又四郎、歌三味線三郎兵衛、上るり三味線三郎右衛門、

此内次郎三郎、式部、治右衛門、助右衛門、治兵衛、吉右衛門前へ召出

一、元祿五年正月十八日 今夜爲慰白井權太夫琴屋政右衛門呼、戌刻に如毎、於大書院敷舞臺狂言云付、

役 者 之 覺

太夫政右衛門、付前髪又三郎、若女清右衛門、萬能丸九右衛門、どうけ十右衛門、半どうけ二郎右衛門、悪人
形三右衛門、おやち二郎兵衛、女か下女か代右衛門、立役金十郎、小うた市兵衛、哥上るり三味線五右衛門多々六
……武太夫始奏者番如例目錄披露

狂 言 組

一、猩々酒屋 又三郎 二右衛門
清右衛門 傳右衛門
十右衛門

一、歸國音楽 九右衛門
十右衛門
二郎兵衛

一、世繼曾我 三右衛門
又三郎 九右衛門
清右衛門 十右衛門

一、吉原さいもん 政右衛門
金十郎
三右衛門 大勢

一、身うけのくぜつ 政右衛門
金十郎
三右衛門

一、仁義のかたき討 政右衛門
外大勢

一、雪中の女 政右衛門
九右衛門
二郎兵衛 三右衛門

一、ほうべんの地藏 清右衛門 三右衛門
二郎右衛門 九右衛門
又三郎

この間九右衛門長三郎
ほうかのまねいろく
清右衛門曲三味線好云付

一、雪中の女 政右衛門
又三郎 大勢

一、弓やわた 又三郎 三右衛門
清右衛門大勢

一、正月おとり
とんとんおとり 政右衛門
かうやくおとり 又三郎

一、よしのれいせい 政右衛門
九右衛門 大勢

一、太平樂おとり 祝言

寅中刻濟

一、元祿五年三月十一日 ……内藤紀州へ振舞に行、……事済て見物始……ほうかは鹽賣長次郎、是ハ鹽屋鹽、何も長次郎と名乗在候内のよし聞、

番 付

- 一、扇子目の内へ入事
- 一、長柄のひさく 出来山万世
- 一、夢中釣銭 長二郎
- 一、八文銭一倍事
- 一、八文銭手の内より貫事
- 一、徳利茶碗曲 万世
- 一、源氏の白旗 長二郎
- 右済テ琴之屋政右衛門狂言

番 組

- 一、名よせ萬歳 政右衛門 二郎兵衛 三右衛門 九右衛門
- 一、よし原さいもん 政右衛門 二郎兵衛 三右衛門 九右衛門
- 一、ふくみ狀 政右衛門 九右衛門 三右衛門 二郎兵衛
- 一、大日如來方便の銭
- 一、小刀のみ
- 一、手鞠の曲 万世
- 一、空海ふうし水 長二郎
- 一、錢人の頭へ打込事
- 一、手の内揚弓
- 一、表具屋 右人數ニ政右衛門 付きぬた曲 清右衛門 不_レ清右衛門入
- 一、おみ衣の袖 同斷
- 一、智りやく扇子屋 同斷 政右衛門不出

一、さんやはるこま 同斷

一、ちこせの契り

一、惣おとり

此末二番所望也 三味線一人 小うた一人 以上七人來。子上刻ニ歸 同中刻ニ不少地震有

一、元祿五年五月二十五日 今晚江戸半太夫呼上るり聞、脇初太夫三味線引一人來、肴屋彌惣兵衛取持、幕て表の居間に簾屏風懸、部屋ニ出、次の間ニて爲語、道異井不閑挨拶云付、戻子肩衣ニて來、太夫ワキ名を披露

○黒 小袖 初段 半太夫 二段 初太夫 三段の内道行つれふし 四段の内初太夫 五段の内忍の段兩人

○まつよの姫 小袖のまよう ○天狗揃 ○あき氏道行 つれ ○狂女 上かた上るり つれ ○祝言 中休在て亥中刻ニ濟

一、元祿五年七月十四日 今日嘉例通久太郎祝踊興行、燈時分より初、舞臺は大挑燈如例、笛虎之助、小鼓不閑、太鼓平三、三味線城幸そよ都、小うた政右衛門善右衛門、久味地は甚五兵衛小平太半藏仙右衛門惣左衛門也

初、太平躍 くととき 五尺手巾 しやきり すまふ 與作 後、太平躍 くととき 姫路おとり しやうかの ちらし 千秋樂 おとり出来何も感譽也

一、元祿五年八月二十六日 今晚二郎三郎召寄甚盤人形云付、大書院へ簾懸、お伊久奥始、女中見物、簾の外に

初段土佐、二段小太夫、三段土佐小太夫、四段土佐、五段土佐小太夫、六段長太夫

一、元禄六年二月十八日 江戸より十五日に出荷物來（白河にて越年）
此便に十一日ニ久太郎并兄弟共本知ニ云付候祝賀心ニ操二郎三郎呼、江戸本邸にて操興行番付

註 十一日江戸本邸にての操興行の番付を白河にて使から聞いて記せるものと思はる。外題から見ると上るり太夫は廣瀬式部らし

○富士牧狩 六段 狂言 徳利狂人、付名酒おとり、どもり浪人、雪中ねこまた、たづねあふきの夢想、付ひくにおとり、非道の戀慕、あくたうのゆふげん、武道のかんげん、蛇道の通心、二河白道、しうしん道成寺、長持おとこ、智略非人、やみのよのかたき討

所望上るり○花うり道行 狂言 けんくわのさいはい、白山かたき討。○上るり 小松物くるい 狂言
ふじをこひ、脉取辨慶、茶の聞達。○上るり 傳教大師神おろし 祝言

一、元禄六年五月六日 今日櫻町（白河）見物芝居へ歩行目付磯部彌惣右衛門相越、番付持參。入九百四十五人、惣役者の書付は四日に來、今日番組

一、おとり 子供不殘

一、神勅名劍卷 乙女、小太夫、利兵衛、瀬平次

一、のふやつし あつもり 小内藏 金彌

一、舞あたか 大藏 九郎右衛門

一、女御かはり 紅顔見せ 不殘出

一、公平鐘引 不殘

一、大おどり 不殘

毎日番付少つかはる、先舞言たて故、舞一段つゝ在之、

役者覺

△女舞太夫 桐大藏。 能太夫 同小内藏。 狂言女太夫 桐乙女。

註 寛永六年幕府は女歌舞妓を禁じ、翌七年には、桐大藏の女舞一座が、幸若與太夫と合併し、江戸中橋にて、男女混合の興行をした時、男子のみにて上演すべき嚴命を發した。

△若太夫 松永靱負、同女方 杉山小源次、同金村小太郎、同村山初彌

△女衆方 花澤萬二郎、同桐島七三郎、同桐山金彌、同桐川采女（子役也）

△立役 拍子舞 豊田利右衛門、敵役、片切七郎右衛門、實方 西村只右衛門、高松左平次

△丹前 中川半四郎、親方杉山七郎兵衛、角前髪鈴木八郎次、立役市川孫五郎、立役山品平二郎、正木庄右衛門、大島長太夫、田村平八

△局方龜伊兵衛 △下女方吉川太十郎 △どうけ村山瀬平治 △歌 和歌平七

△せつきやう山本團右衛門 △三味線宮崎伊平次、柏木小太郎 △笛 山口一郎右衛門、小鼓上村善四郎、

大鼓荒川若助、大鼓三星小平次、此外七八人

歩行目付ハ存候より藝も装束も能在候よし申

一、元禄六年七月十日（於白川） 同日能興行、夜おとり催について次の記事あり。同夜おとり有、品々番付

一、五尺手ぬくひ 二、順禮 三、せうかいな 四、手品おとり 五、太平樂

おとり子ハ龜之丞、一學、半彌、犬千代、雲八、嘉勤、珍齋、手品おとりは雲八珍齋相手ニなるよし

一、同十一月十四日（於江戸） 爲馳走中山萬太夫ヲ呼、次ノ間簾懸、三味線、左七、勘九郎

一、名寄春駒 三人 一、四季おとり 左七 勘九郎 一、尺八名こや道行 万太夫